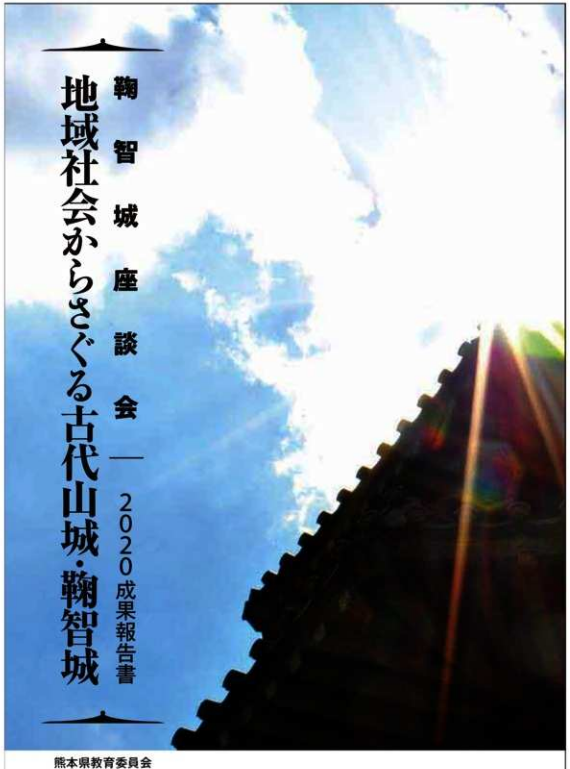


鞠智城座談会

地域社会からさぐる古代山城・鞠智城

2020成果報告書

熊本県教育委員会

鞠智城座談会　２０２０成果報告書

地域社会からさぐる古代山城・鞠智城

座談会概要

鞠智城座談会　２０２０成果報告書

地域社会からさぐる古代山城・鞠智城

一　開催日時等

日時：令和二（二〇二〇）年　十一月二十二日（日）十四時～十六時三〇分

場所：鞠智城研修施設

主催：熊本県・熊本県教育委員会、
　　明治大学国際日本古代学研究クラスター日本古代学研究所

後援：山鹿市教育委員会、菊池市教育委員会、
　　熊本県文化財保護協会、菊池川流域古代文化研究会

二　プログラム

第一部　報告要旨発表

報告要旨１　「鞠智城と地域社会 ―「辺要」としての地域のなかで―」
　　吉村　武彦（明治大学名誉教授）

報告要旨２　「古代山城と地域社会 ―備中鬼ノ城を中心に―」
　　亀田　修一（岡山理科大学教授）

報告要旨３　「古代肥後の地方豪族と鞠智城」
　　溝口　優樹（中京大学講師）

報告要旨４　「鞠智城と菊池川流域の古墳・古代遺跡」
　　亀田　学　（歴史公園鞠智城・温故創生館）

第2部　座談会

司会・コーディネーター　佐藤　信（東京大学名誉教授）

参加者　吉村　武彦

亀田　修一

溝口　優樹

村﨑　孝宏

亀田　学

テーマ

Ⅰ　考古学からみた古代山城・鞠智城と地域社会

Ⅱ　古代史からみた古代山城・鞠智城と地域社会

Ⅲ　鞠智城と肥後の地域社会

目次

座談会概要

主催者挨拶　熊本県立装飾古墳館長　村崎孝宏　2
座談会主旨　東京大学名誉教授　佐藤信　4

報告1「鞠智城と地域社会　―「辺要」としての地域のなかで―」　吉村武彦　7
はじめに　8
一　律令制国家の辺要政策―律令法の辺要と「辺要」　10
二　筑紫（西海道）の辺要政策と古代山城　12
三　肥後国と鞠智城　17
むすびに　20

報告2「古代山城と地域社会　―備中鬼ノ城を中心に―」　亀田修一　23
はじめに　24
一　備中鬼ノ城　24
（一）備中鬼ノ城の遺構・遺物の概要　25
（二）備中鬼ノ城のいろいろな特徴とその背景　26
（三）備中鬼ノ城が築かれた地域　34
（四）いつ、だれが、どのように、備中鬼ノ城を築いたか　34
二　備中鬼ノ城築城モデルからみた筑前大野城築城　38

報告3「古代肥後の地方豪族と鞠智城」　溝口優樹　41
はじめに　42
一　肥後国の豪族　43
（一）火国の国造　43
（二）肥後国の氏族　46
二　鞠智城周辺の氏族　47
（一）久々智氏　47
（二）大伴部氏　47
（三）菊池地域と筑紫君氏　49

（四）秦人氏　49
おわりに　50

報告4「鞠智城と菊池川流域の古墳・古代遺跡」亀田学　55
はじめに　56
一　菊池川流域の古墳　56
二　菊池川流域の古墳時代の集落　58
三　菊池川流域の古墳文化　66
四　菊池川流域の古代の集落・官衙関連遺跡・寺跡　68
おわりに　72

座談会　75

付録　参考資料
報告4（亀田学）　42
報告3（溝口優樹）　32

報告2（亀田修一）　16
報告1（吉村武彦）　1

座談会次第
【令和2年（2020年）鞠智城座談会　資料編】

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として巻末にまとめました。

主催者あいさつ

主催者あいさつ

熊本県装飾古墳館長　村崎 孝宏

こんにちは。熊本県立装飾古墳館館長の村崎と申します。本日はお忙しい中、鞠智城座談会にお集まりいただき、ありがとうございます。コーディネーターをお願いいたしました佐藤信先生、ご発表をお引き受けいただいた、吉村武彦先生、亀田修一先生、溝口優樹先生にはご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、今回の取り組みは、当初、明治大学古代学研究所のご協力をいただき、明治大学での開催を予定していたところでございます。ただ、新型コロナウイルスの流行に伴い、東京での開催ができませんでした。ですが、これまで継続をしてきました鞠智城の特別史跡指定に向けた取り組みを止めることなく、少しでも前に進めていくため、佐藤信先生とご相談をいたしました。今回はネット配信を活用することで、より多くの方々に視聴していただけることから、むしろチャンスであると捉え、座談会の形式で実施することといたしました。本日の様子は収録編集の上、後日情報発信をさせていただきますのでよろしくお願いをいたします。

本日のテーマは、「地域社会からみた鞠智城」です。鞠智城がなぜこの地に築かれたのか。なぜ300年余り維持されたのか。また、地域社会とどのように関わりながら維持されたのか。求められる役割はどのように変化していったのかなど、日本の歴史だけではなく、肥後国、それから当該地域の歴史の中で鞠智城の姿をより深く理解するため、このテーマを設定いたしました。鞠智城が地域社会の中でどのように受け入れられ、どのように関わりながら維持され展開したかを考えていく端緒になれば、と願っております。

今回の取り組みを通じて鞠智城をより多くの人に知っていただき、理解が深まるとともに、鞠智城の歴史的、学術的価値がさらに高まることで、一日でも早く特別史跡に指定されることを願っております。どうぞ実りある取り組みとなりますよう、よろしくお願いいたします。

座談会主旨

東京大学名誉教授　佐藤 信

今回、コーディネーターを仰せつかりました、東京大学名誉教授の佐藤信と申します。どうぞよろしくお願いします。

座談会の主旨につきまして、若干、ご説明を申し上げたいと思います。

史跡、鞠智城跡の調査研究、その調査研究の成果の発信につきましては、熊本県教育委員会を中心に、これまでも「鞠智城シンポジウム」ということで、継続的に成果を発信してきていただいています。今、村崎館長からお話があったように、今年も明治大学をお借りして、東京都心にある１１００人くらいの方がおいでになれる大ホールでのシンポジウムを予定しておりました。毎回応募の方が１８００人程度おられて、大変恐縮ながら、一部の方にお断りしながら、満席に近い形でシンポジウムを開かせていただいてきました。今回は、一応無観客の座談会という形で開かせていただくことになりました。その分、先生方のご発表の時間がすごく短くなってしまって恐縮です。その後の座談会につきましてもコンパクトな形で行わせていただくことになりました。ただ、村崎館長からお話があったように、明治大学で開かせていただいている時は、会場においでの方々だけが対象だったのが、今回はオンラインで公表することが可能になりましたので、全国の方、あるいは海外の方にも聞いていただける、ご参加いただけるという新しい試みになると思っています。

これまでのシンポジウムでは、対外関係や軍事的位置付け、あるいは律令国家の形成との関係、また、平安時代においてどういう機能を果たしたかをテーマにしてまいりました。今回は、鞠智城が営まれて存在していた時代の地域社会との関係、地域社会から鞠智城のあり方を見ようと思います。同時に、古代山城が地域社会とどういう関係にあったかという全体像の中でどう鞠智城を捉えるか、ということにテーマを絞って、適任の方々にご講演をお願いいたしました。

報告の時間はコンパクトになり、先生方の研究成果をどの程度詳しくうかがえるかは気になるところですが、鞠智城が持つ歴史的課題の奥深さや幅広さは、今日の話によってさらに理解できるのではないかと思います。これからの鞠智城研究の課題も見えてくるのではないかと、ひそかに期待しています。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

報告1
鞠智城と地域社会 ―「辺要」としての地域のなかで―

報告者紹介

吉村武彦（よしむら　たけひこ）
東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学文学部助手、千葉大学専任講師・助教授・教授を経て、明治大学文学部教授・大学院長を歴任。現在、明治大学名誉教授・博士（文学）。著書に『日本古代の社会と国家』『大化の改新を考える』『蘇我氏の古代』など多数。専門は日本列島の古代史。

鞠智城と地域社会 ―「辺要」としての地域のなかで―

明治大学名誉教授　吉村 武彦

はじめに

「鞠智城と地域社会 ―「辺要」としての地域のなかで―」というテーマで報告させていただきます。律令制国家における「辺要」とされた筑紫の地域において、鞠智城の問題を考えてみようという意図です。

キーワードは「辺要」ですので、最初に辺要について述べたいと思います。

この言葉は、律令法の用語です。官人の居住地の問題として出てきますが、要するに、「辺にあって要となす地域」のことです。職員令大国条においては、蕃国、夷狄に対する国として、東北地方の陸奥、出羽、越後が蝦夷対策の国々になります。一方の九州では、壱岐・対馬、日向、薩摩、大隅があがっています。朝鮮半島、中国大陸に対する壱岐・対馬と九州南の隼人に対する日向、薩摩、大隅の国が、蕃国、夷狄対策の国にあげられております。

話を分かりやすくするために、九州の筑紫における辺要政策の歴史を最初に述べてみたいと思います。

第一段階として、七世紀半ばの大化改新の時期を設定したいと思います。東北では蝦夷対策として、日本海側の渟足柵と磐舟柵、太平洋側では文献史料にはないのですが、発掘調査により仙台にある郡山遺跡が蝦夷対策をもつ施設として設置されたことが分かっています。

九州ではどうでしょうか。筑紫大宰は推古朝に最初に出てきますが、大化五年に筑紫大宰の帥、つまり長官の名があります。おそらく、東北の蝦夷対策と同じように、半島・大陸の蕃国対策とともに隼人対策の官職と施設があったものと思われます。

第二段階として六六三年における朝鮮半島での白村江の戦いに大敗した後、西日本に造られた古代山城、ふつうに言えば朝鮮式山城になりますが、防人などの配置をした西日本の国防体制ができます。これは大宰府とともに、対馬・壱岐から瀬戸内沿岸、そして大和の高安城に続くという、朝鮮式山城と称される古代山城が造られます。

ところが第三段階になると、大宝令の軍防令による国防体制が構築、それと同時に朝鮮半島の新羅、あるいは、中国大陸の唐との外交関係が安定化いたしまして、西日本の防衛体制というか、対馬から高安城にかけた国防体制が廃止されることになります。つまり、朝鮮式山城の築城が止められるわけであります。朝鮮式山城の築城

が止められるわけであります。

筑紫では大宰府体制自体は維持されて、私は、鞠智城がそこに組み込まれているのではないかと考えております。つまり鞠智城を、大宰府防衛体制の一環として捉えたいと思っています。

ところが、七一〇年から七一五年、明確な文献史料があるわけではないのですが、律令制国家による隼人に対する夷狄観、従来夷狄であった隼人がそうでなくなるという、夷狄政策の変更がありまして、それが第四段階として設定されるのではないかと思います。隼人に対する政策が変わることによって、鞠智城の役割が変化するのではないか、と考えています。これは文献史料がありませんので、考古学資料で検証するしかありません。

一　律令制国家の辺要政策―律令法の辺要と「辺要」

第一章の「律令制国家の辺要政策」の要旨を述べます。大宝令においても、条文には「辺要」とあります。辺要となる地域は、大宝令に規定はありませんので、大宝令あるいは養老令の注釈書から考えていきます。職員令の大国条には、辺要という言葉はありませんが、具体的な国名が出てきます。実質的には辺要国だと考えています。

東北の場合は蝦夷対策の国として、大宝令においては陸奥と越後国です。養老令になりますと、大宝令以降に建国した出羽国が加わります。これらの国が、軍防令に書かれている「東辺」や「北辺」の国にあたります。西日本においては、半島・大陸対策として壱岐・対馬が、隼人対策としては日向国があがっています。養老令においては、大宝令以降に建国された薩摩、大隅国が追加されます。これが「西辺」にあたります。辺要とは書かれていないのですが、事実上の辺要国として扱っていいかと思います。先ほど言いましたように、律令法においては、辺要の語があるにもかかわらず、条文には具体的国名があげられていない、ということになります。

大宰府と鞠智城の位置を見ます。鞠智城から大宰府までは直線距離で六二km（図2）ですが、当時の交通では1日半ぐらいの日程です。ほかの肥後の南部地域と比較すると、距離

図1　西日本の古代山城（朝鮮式山城）

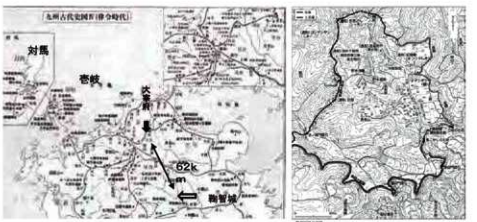


図2　（「新版古代の日本」3　角川書店、1991年）　（「古代山城鞠智城を考える」山川出版社、2010年）

が近いことになります。

辺要地に設置される山城などの施設の名称ですが、東北と九州では異なっています。筑紫の場合は、「城」と書きます。東北の方は、元は「柵」なんです。律令法の条文である衛禁律越垣及城条から分かります。東北の方は、最近では「国司分担統治政策」とも指摘されています（三上喜孝「古代北方辺要国の統治システム」）。国司が国衙だけではなく、城柵にも滞在して国の支配に関わっていると言われています。筑紫では、そうした国司の分担はないと思いますが、大宰府のシステムとしては大野・基肄・鞠智城が一体として扱われているのではないかと考えています。

二　筑紫（西海道）の辺要政策と古代山城

次に第二章の要旨に移ります。筑紫の辺要政策をどのように考えていくか、ということです。遡って言いますと、大宰府の端緒として那津官家があります。『日本書紀』では宣化天皇紀にありますが、事実かどうかは不明です。ただし、対外関係の記述になっており、元はこれが中心の職務かと思います。そして、推古十七年（六〇九）の筑紫大宰の記事になります。

ところで、かなり前から亀井輝一郎さんによって、大宰と総領は違うということが言われています（「大宰府覚書」）。九州の古代史研究者も、大宰と総領とを区別して考察する方が多いようです。

私も今回、改めて報告を準備する過程で、やはり大宰と総領を分けて考えた方がいいように思いました。ただし、『書紀』その他の史料では、混乱して使用されている箇所もあり、大宰と総領とを明確に区別して解釈することは難しい記事もあります。

こうした大宰・総領制のなかで、西日本の朝鮮式山城の築城には特徴があります。狩野久さんが指摘されていますが、総領が設置されていた時期に、古代山城ができるという現象があります（「瀬戸内古代山城の時代」）。

筑紫大宰の場合、初見は推古朝です。推古朝には官司制が造られてくるので、筑紫大宰のような官司が存在してもおかしくはないと思います。ただし、『書紀』だけで判断するのは難しいかもしれません。続いて『書紀』では、皇極二年条に外交関係の筑紫大宰の記事が2カ所あります。そして大化五年条に長官（帥）に任命する記事になります。このように史料はきわめて少ないのですが、大化前代に外交関係の担当部局があったことはまちがいないでしょう。

律令法では、大宰府関係の事項に防人司と呼ばれる役所があります。厳密にいいますと、大宝令では「防司」と表記され、後に防人司と呼ばれる官司です。官僚制機構のなかで、防人が位置づけられていることになります。

筑紫における防御体制で重要なのは、この防人と兵士です。防人は、東国から派遣されるわけですが、八世紀において停止される時期があります。防人が停止されれば、国防体制はどうなるのでしょ

うか。その際、兵士、とりわけ筑紫の兵士が動員されることになります。最近の研究によりますと、大宰府には筑前だけではなく、肥後国からも大宰府防衛の兵士が行くという指摘もあります。こうした可能性はありますが、そうしますと肥後国の場合、肥後国を守るという任務と大宰府の防衛があることになります。ただし、具体的事実を示す文字史料が乏しいものですから、実態はよく分からないところがあります。

対隼人政策に関しては、大宝令以前では九州島の東側は日向国、西側は肥後国が直接対峙しています。具体的に城が築城されているかが問題になります。こういう意味では、『続日本紀』文武三年（六九九）条にみえる三野城と稲積城の場所が問題になります。三野城は日向国児湯郡三納郷、稲積城は大隅国桑原郡稲積郷（当時は日向国）の地に想定していいかと思います。いずれも旧日向国ですが、筑前国（福岡県）で想定するのではなく、南方の隼人対策として城を考えた方がいいように思います。発掘調査はされておらず、地名が残っているだけですが、事実であれば隼人対策として重要な意味をもちます。

以上のように筑紫における辺要地の問題を述べてきましたが、筑紫大宰の場合、遣隋使や遣唐使の派遣がありますから、七世紀の推古朝の外交施設との関係が気になります。ただし、同時代史料からは確かめられません。そして、孝徳朝における筑紫大宰についても、『書紀』に記事があるだけです。隼人対策があったかどうかはわかりませんが、孝徳朝における対蝦夷政策をみていきますと、対隼人策があってもいいように思うわけです。

東北では、日本海側では『日本書紀』に書かれている。ところが、太平洋側では名称すら出てこない。それが郡山遺跡があたるわけです。孝徳朝における史料の散逸問題を考えますと、九州でも「史料にないから、ない」とは言えないのではないかと思うのです。歴史学は想像ではありませんが、記録が残っていない問題をどう考えるか、ということです。

九州の場合、筑紫大宰が対外関係と密接なことは容易に推測できますが、隼人との関係はどうなのでしょうか。史料には『書紀』履中即位前紀に、いわゆる近習隼人が記されています。それ以前の神代には、皆さんもご承知でしょうが、海幸彦・山幸彦の神話の中に隼人の話があります。兄（海幸）のホノスソリ（火闌降命）が、弟（山幸）に隷属し、隼人らの始祖とされています。

一方、クマソ（熊襲）に関しては、ヤマトタケル（『古事記』は倭武命）伝承です。『古事記』では、ヤマトタケル（元はヤマトヲグナ）はクマソタケルを征討し、そのタケルの名を献上されて、ヤマトタケルを名のるようになります。このように大化前代から伝承を持っているかと思います。それはともかく、大宝令以前に関しては、隼人に対しては日向と肥後が対峙していたでしょう。

中央政府は辺要国に対して、東北には柵を設置し、九州には筑紫城を設けています。この筑紫城には、大野城・基肄城・鞠智城は含まれるでしょう。文武二年条に、この3城が出てきますが、一体として運営されていたと考えていいのではないでしょうか。

西日本の朝鮮式山城は、大宝律令の施行以降、対新羅等の外交関係が安定して緊張が緩和され、律令制軍団が確立してきますと、廃止されるようになります。ただし、文献史料においては、高安城や、養老三年（七一九）の備後国安那郡茨城、蘆田郡常城の停止記事しか残されていません。

ところが、考古学の赤司善彦さんの研究「出土土器からみた古代山城の時期消長表」（図3）をみますと、最近はさらに新しい研究があるかもしれませんが、八世紀の第1四半期に役割を終えた山城が多くみられます。しかし、大野城・基肄城・鞠智城という山城は九世紀まで継続、維持されています。対馬から高安城にいたる西日本防衛ラインは解除されますが、筑紫城の3城は残されています。

つまり白村江の敗戦を契機とした西日本防衛ラインがなくなっても、これら3城は維持されるのです。こうして3城は新たな政策任務を付与された段階に入るのではないでしょうか。律令制による蕃国・夷狄に対する新たな体制に入ったのではないかと思います。そして九州においては、隼人に対する夷狄政策の変化があるのではと思っています。

ただし、同じ夷狄といっても、蝦夷と隼人では内実が違います。隼人は夷狄ではないという説もあります。私自身は、蝦夷も隼人も夷狄と考えていますが、隼人は神話にも登場します。隼人の始祖とされる海幸は、天皇に続く山幸の兄で、兄と弟の関係にあります。先ほど述べました神話ですが、釣り針をめぐって海幸と山幸が争い、山幸が隼人の祖となる海幸を隷属させるという話になっています。

ところが八世紀の七一〇年代に、隼人に対する夷狄観が変わってくると（永山修一『隼人と古代日本』）、夷狄視されなくなります。隼人に対する夷狄観がなくなると、律令制国家の対処の仕方も変化するのではないか、というように考えています。

出土土器からみた古代山城の時期消長表

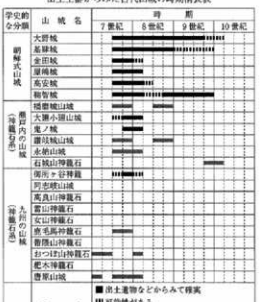


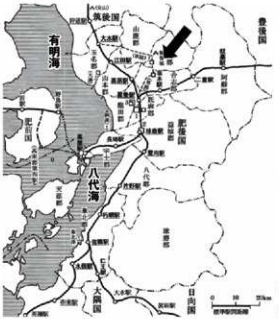
図3
（赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」『月刊文化財』631、2016年）

三　肥後国と鞠智城

第三章は肥後国と鞠智城という地域研究にあたります。

私が先ほどから申し上げているように、大野城・基肄城・鞠智城は、大宰府体制の一環として捉えるのがいいと思っていまして、その中で鞠智城の役割を考えていくことにしたいと思います。

かつて坂本経堯さんが、鞠智城の3つの役割を指摘されています。①大宰府の支援、②有明海方面



（「古代山城鞠智城を考える」山川出版社、2010年）

図4
（木下良「事典日本古代の道と駅」、吉川弘文館、2009年）

（「新版古代の日本」3　角川書店、1991年）

図5
（草場啓一「阿志岐城跡」「古代文化」61-4,2010年）

の防御、③九州南部の夷狄対策です。これを律令制国家の辺要政策の視点から考えますと、大宰府の維持のための築城、有明海方面の蕃国対策、九州南部の隼人対策ということになります。各役割の質的な差異はありますが、この方向で考察するのが重要な視点ではないかと思います。（図4）（図5）

先ほど、隼人に対する夷狄観の変化について話しましたが、隼人に対する夷狄観の変化、つまり隼人政策の変化があるとすれば、鞠智城の政策に新たな性格をもたらしても不思議ではありません。しかし、残念ながら具体的に論ずる史料がなく、鞠智城における考古学的研究成果に学ぶ必要があります。

これまでの鞠智城の研究によって、「鞠智城跡変遷表」が作成され、鞠智城における築城・展開の諸画期が明らかにされています（「鞠智城跡Ⅱ」ほか）。この変遷表の第三期に注目したいと思います。八世紀の第1四半期後半から第3四半期にあたります。矢野裕介さんの研究整理によりますと、鞠智城の転換期にあたっています（「鞠智城の変遷に関する一考察」）。

矢野さんによれば、「管理棟的建物群はそのまま存続するものの、掘立柱の総柱建物が礎石建物に建て替えられるなど、施設の耐久性向上が図られるのが特徴として挙げられる。その一方で、土器の出土が皆無に等しく、最低限の人員が配置されるなど、城の管理・運営に変化が生じたのもこの時期となる」、ということです。つまり、夷狄としての隼人観が変わり、隼人政策に変化があるとすれ

ば、矢野さんの指摘に適合すると思います。隼人政策の変化が、鞠智城にも及んでいるのではないでしょうか。

むすびに

最後に、結びにかえて簡単にまとめます。

筑紫は半島と大陸の蕃国、そして九州南部の隼人対策の地域として「辺要」としての扱いでした。具体的には大宰府と筑紫城がその拠点となります。その筑紫城の中に大野城・基肄城・鞠智城が位置づけられます。この3城は、広く大宰府防衛の一環として捉える必要があります。ところが、白村江の戦いで倭国・百済連合が唐・新羅連合に大敗します。敗戦以降、唐・新羅連合に対する防御体制が構築されます。それが壱岐・対馬から高安城までの西日本防衛ラインだと思います。

その西日本防衛ラインは、大宝令制による軍団体制が確立し、唐・新羅との外交関係が安定すると廃止されるようになります。筑紫城としては、大野・基肄・鞠智城は蕃国・夷狄に対する「西辺」の役割として残されることになりました。しかし、隼人への夷狄観の変化にともなって、鞠智城の役割が変化したと考えられます。

文献史料でははっきりできませんが、今後、鞠智城第3期における発掘調査がさらに進めば、矢野さんの指摘がさらに具体的になるかと期待しています。

その後、いくつかの変遷があるかと思いますが、文献では兵庫・不動倉の記事があり、それらが重要な意味を持ってきます。今回の報告では十分に話せませんでしたが、筑紫には西海道以外から派遣された防人の停止の時期があります。報告のため改めて年表を作りましたが、確かに短期間に防人の停止が繰りかえされています。防人が停止されますと、筑紫の兵士が動員されています。明らかに筑紫は、辺要地域として重視されていたことが分かるかと思います。

ご清聴ありがとうございました。

〔参考文献〕
狩野　久「瀬戸内古代山城の時代」『坪井清足先生卒寿記念論文集』2010年
亀井輝一郎「大宰府覚書1・2」『福岡教育大学紀要』53・54、2004・2005年
坂本経堯「肥後上代文化の研究」『坂本経堯先生著作集刊行会、1979年
永山修一「隼人と古代日本」同成社、2009年
三上喜孝「古代北方辺要国の統治システム」『古代国家と北方世界』同成社、2017年
矢野裕介「鞠智城の変遷に関する一考察」『大宰府の研究』2018年

報告2
古代山城と地域社会 ― 備中鬼ノ城を中心に ―

報告者紹介

亀田修一（かめだ　しゅういち）
九州大学大学院文学研究科修士課程修了。大韓民国忠南大学校留学。岡山理科大学助手・講師・助教授を経て、現在、岡山理科大学生物地球学部教授。
主な著書・論文に『日韓古代瓦の研究』『日韓古代山城比較試論』『朝鮮半島古代山城の見方』など。専門は考古学。博士（文学）。

古代山城と地域社会 ―備中鬼ノ城を中心に―

岡山理科大学教授　亀田修一

はじめに

岡山理科大学の亀田でございます。よろしくお願いします。

僕は、「古代山城と地域社会」ということで、直接、鞠智城ではないのですが、多少参考にはなるのかなということで、岡山県の備中鬼ノ城というお城のお話をしたいと思います。

一　備中鬼ノ城

備中鬼ノ城は、現在の岡山県総社市というところにございます。古代の国で言いますと、備中国賀夜郡阿曽郷というところにあったと考えられています。標高が三九七ｍの鬼城山に築かれた、城壁の長さが二、七九〇ｍの古代山城です。版築土塁、石垣、城門の構造、水門の構造、それから、角楼と呼んでいます、城壁から飛び出したもの、土塁の築き方、特に版築で堰板という板を使ってするやり方、その柱、その内外の敷石などに特徴があります。これらの特徴は百済、高句麗、新羅、加耶地方の山城に見ることができます。西日本のほかの山城にも少しずつはあるにはあるのですが、これだけまとまっていることが鬼ノ城の特徴かと思っています。そして、これらが日本化しています。多様性と地元の技術の合体が見られるかと思います。

築城年代に関しましてはよく分かっていない部分もあるんですが、六六〇年の百済の滅亡、六六三年の白村江の戦いの敗戦との関わりで築かれたと考えられています。六六七年に、岡山県の南側の香川県、讃岐の屋嶋城が築かれているんですが、それと比較的類似しておりますので、六六七年頃というのが一つのポイントとなるのかなと思っております。

（一）備中鬼ノ城の遺構・遺物の概要

今回の発表では、備中鬼ノ城の築城、お城を築く時に地元の人々がどのように関わったのかということにウエイトを置いてお話ししたいと思います。

図1は平地部から見たところですが、山の稜線近くにはげているところがあります。これが城壁の線です。つまり古代にお城が築かれた時には、それなりに離れたところからお城の位置が見える、というのも特徴かと思います。それから図2は地元の

図1　備中鬼ノ城 遠景

図2　備中鬼ノ城 復元模式図（2000.5.7山陽新聞）

山陽新聞社がシンポジウムを行った時に作ったものです。大体こんなイメージではないだろうかと考えられています。左上の山の一番高いところから南側に降りてきた斜面にずっと土塁を巡らせています。これが朝鮮半島の山城の特徴になっております。細かいことを言いますと、5カ所に門があって、建物があって、谷部になったところに堤でせき止めて貯水施設を作っています。お城を研究されている方はよくお分かりだと思いますが、お城は当然水がないとやっていけません。鞠智城でも同じように見つかっております。そういう意味でも類似した山城であることがお分かりいただけるかと思います。

今述べましたように、備中鬼ノ城には、いろいろな特徴があります。それについてお話を進めていきたいと思います。

（二）備中鬼ノ城のいろいろな特徴とその背景

まず、選地です。なぜこの場所を選んだのか。そして縄張。どこに本丸をつくって、二の丸をどこに作って、どこに城壁線を作っていくのか、などです。これに関しましては、日本の弥生時代には高地性集落であるとか、環濠集落であるとかありますので、お城は弥生時代からあるんだと思っておられる方もおられると思うんですが、これらは後の時代まで続かず、古代山城とはつながっておりません。古代山城に関しては新たに、朝鮮半島の人たちの知識・技術でできたと僕は思っています。そういう意味で、これらのお城づくりには専門の知識が必要になります。大野城、基肄城の築城に関しましては、百済からの亡命将軍または貴族たちがやってきて、指導したことがわかっています。なぜここを選ぶのか。鞠智城も一緒なんですが、岡山の場合、鬼ノ城の麓に後の備中国の国府、お役所ができます。それから山陽道も目の下を通る。そういうことも大事な要素として選ばれたんだと思います。このような場所の選択に関しましては、亡命将軍たちだけでもできないだろうし、渡来系の人々や地元の人たちだけでもできない。それらが重なってできている、そんな視点で見ています。

城門構造に関しましては、懸門（けんもん）という、門に入る時に一段高くなるようなもの、それから平門（ひらもん）というって、そのままの高さで入るものが両方にあります。花崗岩製の唐居敷（からじき）と呼ばれるものがあります。鬼ノ城では、門を入る時に下に石を敷いております。こういうものはほかの山城ではあまり見かけません。それから水門構造。これも後から写真が出てきますが、九州の古代山城の場合、一般的には、水の出口は地面そのもの、高くてもちょっとくらいなのですが、鬼ノ城の場合は外側の地表面から一～二ｍほどの高さ、つまり上から水が出るんですね、こういうものも特徴かと思います。

角楼と呼んでいる、方形の飛び出しがあります。日本列島では対馬の金田城（かなだじょう）が以前から知られています。それから、城壁の築き方。これがかなり特殊なのですが、城壁、土の壁、石の壁もそうなんで

すが、城壁の内側に柱が入り込んでいるのです。これは、日本の古代山城では一般的に見られません。それから、もう一つ、版築。これに関しましても、ただ土を固めるだけなら一般の人にもできると思うのですが、少なくとも堰板（枠の板）を使用する。どのように枠の板を組み立てていくのか、という話になるとやはり専門家の知識が必要かと思います。そういう意味で、指導に関しては渡来系の人々がいたのではないかと思っています。具体的にどういう風に堰板を使用するのかにつきましては、後でお話しします。

それから花崗岩。九州にもたくさんありますからご存じだと思いますが、花崗岩を本格的に、きちっと、きれいに加工するのは大体七世紀に入ってからです。飛鳥時代に入る頃で、これは渡来系の技術でいいだろうと思います。といいますのは、それ以前には、基本的に花崗岩を、このようにきれいに加工した技術はございません。

図3　鬼ノ城西門・角楼

図4　鬼ノ城西門・角楼（総社市教育委員会提供）

それから、鍛冶場における鉄器製作。賀夜郡や下道郡というところが鬼ノ城の地元にありますが、この辺の鍛冶関係の人々が関わっているのではないかと考えています。

図3の写真ですが、ここに復元された西門があります。この左側に、方形の飛び出し、角楼があります。図4は絵にしたもので、真正面に西門がありまして、左手に角楼があります。方形の飛び出しのところです。それから、右側に高石垣と呼ばれる石で積んだ部分がありますが、基本的には土のお城です。前面には石を多少敷いた状況が出ております。図5は西の門です。建物は復元ですが、丸で囲んだ部分の石敷は発掘当初のもので、おそらく七世紀後半代のそのままです。床面の石敷きは割った石を使っていますが、門の扉部分に関しては花崗岩の切石を使っております。図6は門の扉の右端のところですが、花崗岩を加工して柱を据える穴があります。ここには、方立てといって、門の扉をギギギと閉めた時にすき間ができないようにする材などを乗せるための穴を造っております。このように花崗岩をきれいに作るというのは、かなりの技術がいったんだろうと思っています。

図5（上）図6（下）
備中鬼ノ城西門:花崗岩切石扉居敷・蹴放し・石敷き床面・図5の手前が石階段

図7は北門です。懸門と言いまして、門の外と内側に、これだけの段差があります。ここにあるスロープは見学用に作ったもので、もともとはこのようなものはありません。約二六mの段差があります。ですからこれは梯子を架けて登る門。簡単に言うとそういう話なので懸門とついています。

図8（中・右）は百済の都でありました扶余というところから東のほう、新羅との国境線近くの錦山栢嶺山城と言う山城の南の門です。これは石の壁で、見にくいのですが約三mの石の壁があり、その上の面が門の床面になります。つまりこれだけの段差がありますので、当然、梯子を架けないと登れないですよね。入りますと、壁にぶつかって左に曲がります。このように折り曲げて入るようにした門は、中世のお城にもありますが、実は鬼ノ城の北門にも同じ用に曲げて入らせる構造があるのです。このような知識に関しても、地元にたとえ詳しい人がいたとしても、ここまでできる人がいるかというと、いないと思いますので、やはり北門の造営には専門の知識を持った人が必要だと思っています。

図7　備中鬼ノ城北門跡（懸門）

図8　備中鬼ノ城北門跡(左)と韓国忠清南道錦山栢嶺山城南門跡(中・右)の懸門・内壁域
(総社市2005「古代山城鬼ノ城」)（忠清南道歴史文化院2007「錦山栢嶺 山城-1・2次発掘調査報告書-」）

それから、水門の高さの話を先ほど申し上げました。図9は鬼ノ城の第2水門と言っているところです。大雨が降るとこんな風に水が流れて出てきます。ここらへんで一mちょっとくらいですかね。このように第2水門では、石垣の上に土塁があって、その土塁の中に通水施設を設けています。韓国でもこのような例はさほど多くはありません。図10は百済と新羅の国境線近くの忠清北道の沃川城峙山城の水口です。水口までの高さは二m以上あったと思います。

それから、角楼です。図11を見ていただくとわかるように方形に飛び出しています。特徴としましては、奥行きが1としますと正面の幅が2か3くらいで、正面のほうが長いんですね。このように正面幅が広いものは、百済のほうにあり、奥行きが長いと

図10
韓国忠清北道 沃川城峙山城水門跡

図11　備中鬼ノ城角楼跡

図9　備中鬼ノ城第2水門

と新羅や高句麗にあるのではないかといわれています。

図12は平壌の大城山城の城壁の写真ですが、縦方向にくぼみが見られます。このくぼんだ部分に柱があったのです。このような構造の城壁は、基本的に日本の山城では見かけません。そのようなことから、この角楼部分にも、朝鮮半島の人が来て関わっているのだろうなと想定しております。

それから土塁の前面に石を敷いています。図13は鬼ノ城。図14は韓国の忠清北道の蛇山城です。ここも壁の中に柱の痕跡があります。この鬼ノ城の土塁にも縦方向の線が見えます。調査担当者の方も悩まれていて、まだ決定はしていないんですが、このような縦方向の線が実は何本かあるんです。ここにもし堰板があり、棒で突いて土を固めると、土は水平じゃなくて、すみっこが上がるんですよね。この鬼ノ城のものは両方とも上がっているんです。このような状況を見ますと、やはりここも堰板があったのではないかと推測できます。こういうやり方は当時の日本にはありません。

図13は一二五〇年の高麗時代のものですが、ソウルの西の方にある江華島のものです。同じように壁に痕跡があり、さらに上にも板の痕跡が残っています。これはその写真です。鬼ノ城がここまできちんとしていたかどうかは分かりませんが、こういう例がありますので、朝鮮半島と鬼ノ城の技術はかなり直接的につながっているのかなと思っております。

先ほど、花崗岩の加工技術の話をいたしました。花崗岩の加工技術は、飛鳥では確かに飛鳥寺、七世紀に入る直前に入っているわけですけれども、地方寺院では、そこまで古くはなりません。図16は、下道郡の秦原廃寺というところの塔の心礎です。年代は七世紀前半です。現在の地名はまさに秦です。図17は秦原廃寺の瓦、右が山背広隆寺の瓦です。まさに秦氏に関わる寺です。今のところ、秦

図13
備中鬼ノ城第5塁状区間版築土塁・堰板痕跡?、そして土層端部の上がり
(総社市2005「古代山城鬼ノ城」)

図12　平壌大城山城城壁内の柱痕跡
(朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会『朝鮮遺跡遺物図鑑』3 (1989))

図14
忠清北道稷山蛇山城跡の土塁の中の柱跡、前面敷石 (筆者氏提供)

図15
京畿道江華玉林里遺跡上面堰板痕跡

図16　下道郡秦原廃寺塔心礎

図17
備中秦原廃寺(上)と山背広隆寺(下)の瓦
(7世紀前半)
奈良国立博物館1970
「飛鳥白鳳の古瓦」東京美術)

原廃寺の瓦に一番近いのはこれでいいのかなと僕は思っています。ちょっと点珠のあり方は違いますが、類似する範囲を多少広げても、大阪の四天王寺とか、そういうところぐらいしかございませんので、この瓦は秦氏系でいいのかなと思っております。このような花崗岩の加工技術でもつながるのかなと思っています。

（三）備中鬼ノ城が築かれた地域

これまで鬼ノ城のいろいろな特徴と朝鮮半島との関係をお話ししてきましたが、次に鬼ノ城の周辺にどういうものがあるのかという地図を作ってみました。図18です。たくさんありまして、ごちゃごちゃしてしまいました。賀夜郡阿曽郷、窪屋郡、下道郡、先ほどの秦氏の関係のお寺が分布しています。この辺の地域がずっと関わっているのではないかと思っています。

（四）いつ、だれが、どのように、備中鬼ノ城を築いたか

これらをもとに、西日本の古代山城を築いた人々について、鬼ノ城を中心にしてお話ししたいと思います。

まず発注者。作らせようとしたのはヤマトの王権、天皇でしょう。候補としては、この時期ですから、皇極天皇（斉明天皇）、孝徳天皇、天智天皇、天武天皇、持統天皇、文武天皇くらいまででしょうか。僕は一番古いほうだと思っていますけれども。それから、選地、縄張、設計ですね。これは朝鮮半島、主に百済だと思いますが、百済からの亡命貴族、将軍たちであろうと思います。それから、白村江の戦い以前からこの地域にいた人も関わっているのではないかと思っています。それなりの知識がある人がいたと思います。

それから、具体的に施工する現場責任者。縄張図などを作成した将軍たちが「こう作りなさい」と設計図をくれたとしても、現地で実際に仕事ができる人がいないとできませんので、現場監督も含めて、城づくりの知識を持つ、白村江の戦い前後の朝鮮半島からの亡命者たち、それ以前からの渡来人、その子孫たち、もともとのその地域の人々で、有識者などが現場監督になり得たのではないかと思っています。

そして、実際に施工する労働者は、山城周辺の人々および、ちょっと範囲を広げて地元の倭人、渡来系の人々という理解ができるのではないかと思っています。一般的な作業者と共に、鍛冶、つまり鉄

図18　備中南東部の朝鮮半島関係遺跡分布図

器の生産だったり、加工したりする人。そして大事なことですが、石材の加工も当然必要で、石材の加工には鍛冶、鉄製品が必要で、木材の加工もそうです。それから土木建築、こういう技術は、在来の技術だけでできないこともないとは思いますが、ちょっと厳しいのかなと思います。

実際に作業する人たちが動員された地域としては、中国四国地方の場合、山城が築かれた地域は国単位でできていることが多くて、国、郡レベル。瀬戸内海沿岸地域では各国に1ないし2カ所の山城が築かれています。実際の作業者は、少なくとも築かれた郡、当然近くから多く動員されたのではないかと思います。

特殊な技術は郡だけでは足りない場合が当然ありますから、国単位で最低考えてもいいのかなと思います。その時に注意すべきなのが、その地域の屯倉だと思います。国の直営地的なものです。吉備では五六九年、渡来人の王辰爾の甥の胆津という人物が、白猪屯倉の田部の丁籍（僕も詳しい読み方は分かりませんが、戸籍みたいなもの）を作ったという記事が出てきます。五六九年ですから、鬼ノ城築城より一〇〇年近く前です。この時に、戸籍を作ってこの地域にどういう人がいるのか、というのを確認した、みたいな話になるんだと思います。この戸籍が、山城築造の労働者動員にも関わってくるのかなと思っています。

もう一つ、吉備、この地域が恵まれていることとして「備中国大税負死亡人帳」という文書が正倉院に残されています。税金を納めずに亡くなった人たちの記録です。これは七三九年の記録です。この地域の人たち、先ほどの賀夜郡ですね、ここに庭瀬郷三宅里、忍海漢部、東漢人などの地名や人名が見え、阿蘇里に宗部里、西漢人などの地名や人名が見えます。明らかに近畿地方の渡来系氏族と関わるような名前の人たちが入ってきています。僕はこういう人たちは、屯倉の設置後にヤマトから新たに派遣された人たちではないかと考えています。それも屯倉設置に関して入って来たのではないかと考えています。そして「宗部里」は蘇我氏が絡むと言われています。まさに蘇我氏が屯倉設置に関わっていますので、こういう人たちが屯倉設置に関連してこの地域に来ていたんだろうと思っています。

今回の話を簡単にモデル化すると図19のような図になります。三角形の頂部は、ヤマトの王権の発注で、実際の選地などは百済の亡命将軍クラス。そして軍隊には工兵部隊というものがありまして、この人たちはかなりの土木技術を持っていると僕は考えています。そのような工兵部隊の責任者の人たちがやったのが選地、縄張。ただし選地に関しては、地元の人の協力がないと難しいと思いますので、この辺の渡来系の人物も関わっている可能性は高いと思います。その人たちが現場監督も兼ねるみたいなことがあるとも思っています。あとは技術者の

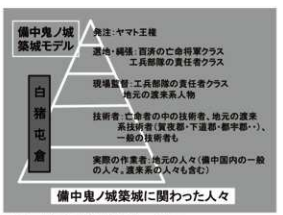


図19　備中鬼ノ城築城に関わった人々

中に渡来系の人も含めて、特に、地元、賀夜郡。この賀夜は、僕は朝鮮半島のカヤでいいと思っています。そして、下道郡、都宇郡。都宇というのは港の関係なのですが、この付近は海上交通の要所になります。そういう人たちも関わっていると思います。そして、あとは実際に作業する人が必要です。この人々の動員に白猪屯倉が関係するのではないかと思っています。

二　備中鬼ノ城築城モデルからみた筑前大野城築城

資料編では大野城のことにも触れております。筑前大野城の築城に関しても、こういう見方をすると、まだまだデータは不足なんですが、ある程度推測できるようなこともございますので、鞠智城に関してもこういう見方をすればどういうことになるのか、楽しみにしているところです。

【図出典】（いずれも一部改変引用）
図2…「山陽新聞」2000年5月7日記事
図4・9…総社市教育委員会提供
図8左、13右上下…総社市教育委員会2005『古代山城鬼ノ城』
図8・中・右…忠清南道歴史文化院2007『錦山栢嶺山城 －1・2次発掘調査報告書－』
図12…朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会1989『朝鮮遺跡遺物図鑑3』図85
図14…東勇杰氏提供
図15…中南文化財研究院2012『江華玉林里遺跡』
図17…奈良国立博物館1970『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術
その他…亀田作成

報告3
古代肥後の地方豪族と鞠智城

報告者紹介

溝口優樹（みぞぐち　ゆうき）
国学院大学文学部史学科卒業。国学院大学大学院文学研究科博士課程修了。信州豊南短期大学非常勤講師、大手前大学総合文化部非常勤講師、大阪大学大学院文学研究科助教等を歴任。現在、中京大学教養教育研究院講師。博士（歴史学）。主な著書に、『日本古代の地域と社会統合』、論文に「凡河内国造の成立」「土師氏の系譜と伝承」「野見宿禰を中心に」「地域からみた大野寺土塔の造営」等多数。専門は日本古代史。

古代肥後の地方豪族と鞠智城

中京大学講師　溝口 優樹

中京大学の溝口優樹と申します。私は、古代肥後の地方豪族と鞠智城というテーマでお話をさせていただきます。

はじめに

古代山城は、天智二年、六六三年における白村江の敗戦を受けて、唐・新羅の侵攻に備えて倭王権の主導によって築造された防衛施設だと言えます。現在の熊本県菊池市、そして山鹿市にまたがる米原台地に築かれた鞠智城も、そうした古代山城の一つです。ただし、鞠智城の立地は、やや内陸部に位置している。そこから有明海は望めない。こういう立地からは、対外防衛的な機能というものを疑問視する見方も少なくありません。

こうした疑問から提起されるようになってきたのが、現地の豪族を牽制するために鞠智城が築かれたのではないかとする説です。その一方で、鞠智城の築城が倭王権、あるいはそのもとの筑紫大宰によって主導されたものだったとしても、労働力の編成などの面で現地勢力の協力というのは必要不可欠だったと思われます。いずれにしても、鞠智城の機能とか、築城の背景とか、そういったものを考えるうえで現地の勢力の存在というのは無視できないと思います。こうした問題に関して、今回の報告では、主に文字史料の分析によって、肥後国、鞠智城がある菊池郡の一帯を菊池地域と呼びたいと思いますが、特に菊池地域における豪族の動向、これを探っていって、鞠智城が築かれた背景などを考えていきたいと思います。

一　肥後国の豪族

（一）火国の国造

まずは、肥後国における豪族の概要を見ていきたいと思います。鞠智城の所在地、これは律令制下の肥後国にあたるわけですが、ここはもともと肥前国と肥後国、両者はもともと、

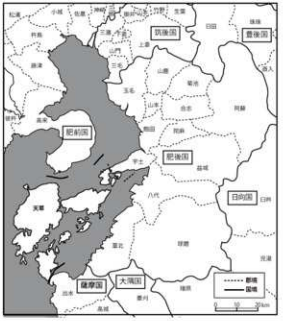


図1　肥後国の郡
（鳥方洸一「企画・編集統括「地図で見る西日本の古代」」平凡社、2009年）をもとに作成

一体の火国という国を成していました。平安時代初期に編纂された『先代旧事本紀』という書物があります。その中の国造本紀を見てみると、火国あたりの国造、これが8つほど登場します。この中で、火国の名前を冠する火国造、これが注目されるわけですが、火国造は火君氏から輩出されます。火君氏は、律令制下の肥前、それから肥後にまたがって分布している。さらには、筑前なども含めて、九州の広い地域に分布しています。これについては、火君氏の本拠地を肥後国の八代郡だと考えて、そこからほかの地域に広がっていったのではないか、分布を拡大していったのだろうという見方が強いのですが、違った見方もできるんじゃないかなと思っています。というのは火国、肥前も含めて、火国各地の豪族たちの集合体、各地の豪族が結集して火君という一つの豪族を形作っていたと考

図2　菊池郡の郷配置
（国土地理院発酵20万分1地勢図「熊本」〈2005年測量〉をもとに作成）

地域	人名など	出典	備考
筑紫国	火君等祖（不知名）	『播磨国風土記』飾磨郡条	筑紫の地名起源説話、「筑紫国」は九州全土を指す可能性あり
筑前国嶋郡川辺里	肥君猪手ほか	大宝2年（702）「筑前国嶋郡川辺里戸籍」（『大日本古文書』1-9～142／『正倉院文書』正集三十八・三十九、続修六）	猪手は大領
筑前国志摩郡	肥公五百麿	承和8年（841）「筑前国牒案」（『平安遺文』第1巻、67号文書／『大宰府市史　古代資料編』史料132）	大領
肥前国養父郡	筑紫火公貞直・筑紫火公貞雄	『続日本後紀』嘉祥元年（848）8月壬辰（6日）条	忠世宿禰を賜姓、左京に移貫
肥前国松浦郡	火君	『日本霊異記』下巻第35縁	
肥後国益城郡	肥公馬長	延暦20年（801）浄水寺「燈籠銘」（豊野町教育委員会2004）	
（肥後国）八代郡	火君健緒組	『肥前国風土記』総記など	火国の地名起源および火君氏の祖先伝承
薩摩国（薩摩郡？）	肥君広龍	天平8年「薩摩国正税帳」（『大日本古文書』2-18頁／『正倉院文書』正集四十三）	主帳
薩摩国出水郡	肥君	天平8年「薩摩国正税帳」（『大日本古文書』2-20頁／『正倉院文書』正集四十三）	大領

表1　火君氏の分布

郡	人名・氏族名	典拠	備考
玉名	日置部	日置郷の郷名から復元	
	日置部公	「日置氏系譜」（松本1980年など）	権擬少領
山鹿			
山本			
菊池	秦人	鞠智城跡貯水池跡出土木簡（熊本県教育委員会2012）	郡名を記さないことから菊池郡の人と推定される
	大伴部鳥上・大伴部稲依	東大寺大仏殿廻廊西地区出土木簡1761（奈良県教育委員会2000）	子養郷の人、「薬院依仕奉人」としてみえる
阿蘇	阿蘇君	『古事記』神武段など	郡名との一致から推定
	阿蘇直	『異本阿蘇系図』（田中1986）	阿蘇君氏との同族関係から推定
	穴穂部直	『異本阿蘇系図』（田中1986）	阿蘇君氏との同族関係から推定
	宇治部公・宇治部宿祢	『異本阿蘇系図』（田中1986）	阿蘇君氏との同族関係から推定
合志	日下部辰吉	『日本三代実録』貞観18年（876）9月9日癸未条	擬大領
	壬生諸石	『日本書紀』持統10年4月戊戌（27日）条	
	鳥取部	鳥取郷の郷名から復元	
飽田	春日部	『日本書紀』安閑2年5月甲寅（9日）条	「火国春日部屯倉」の所在地として熊本市春日が比定されることから推定
	建部君馬□	平城宮木簡（『平城宮木簡』1-300）	天平三年、主政
	建部君虫麻呂	天平勝宝6年（754）『瑜伽師地論』巻38奥書（『大日本古文書』25-171頁／石山寺所蔵）	
	建部公弟益	『続日本後紀』承和14年3月丙申朔条	長統朝臣賜姓・左京三条に移貫
	建部公貞雄	『日本三代実録』貞観3年8月21日壬戌条	大領
	私部	私部郷の郷名から復元	
託麻	津守部（？）	津守郷の郷名から復元	
益城	山稲主	『続日本紀』宝亀元年（770）10月己丑朔条	旧の山部
	肥公馬長	延暦20年（801）浄水寺「燈籠銘」（豊野町教育委員会2004.）	
	真上日乙	延暦20年（801）浄水寺「燈籠銘」（熊本県豊野町教育委員会2004）	真上＝真髪部はもと白髪部
	大伴君熊凝	『万葉集』巻5-885	天平3年（731）相撲使の従人として上京
	当麻部（？）	当麻郷の郷名から復元	
	宅部	宅部郷の郷名から復元	
	益木采女	二条大路木簡（『平城宮発掘調査出土木簡概報』31-20下（248））	
宇土	額田部君得万呂・額田部真嶋	天平勝宝2年「仕丁送文」（『大日本古文書』25-145頁／正倉院丹裹文書第94号）	大宅郷
八代	火君健緒組	『肥前国風土記』総記、『釈日本紀』所引「肥後国風土記」逸文	火国の地名起源および火君氏の祖先伝承
	火国造	「国造本紀」	八代郡火邑の地名から推定
	高分部福那理	『続日本紀』宝亀3年（772）10月戊午（11日）条	
	豊服広公	『日本霊異記』下巻第19縁	豊服郷の人、宝亀2年の説話
天草	天草国造	「国造本紀」	郡名との一致から推定
葦北	火葦北国造刑部靫部阿利斯登	『日本書紀』敏達12年10月是歳条	
	葦分国造	「国造本紀」	郡名との一致から推定
	日奉部広主売	『続日本紀』宝亀元年（770）10月己丑朔条	『続日本紀』宝亀3年10月丁酉（9日）条では「日奉公広主売女」とみえる
	家部嶋吉	『続日本紀』宝亀3年（772）10月戊午（11日）条	
	刑部広瀬女	『続日本紀』神護景雲2年（768）9月辛巳（11日）条	
	他田継道	『続日本後紀』天長10年（833）3月丙申（9日）条	少領
	真髪部福益	『続日本後紀』天長10年（833）3月丙申（9日）条	真髪部はもと白髪部
	大伴部	伴郷の郷名から復元	
球磨	久米部	久米郷の郷名から復元	

表２　肥後国の氏族分布

えてはどうかと、私は考えています。なお菊池地域なんですが、国造氏族の分布という点から見ると、分布からはずれている。火国の様々な国造たち、8つほどいるという話でしたけれども、こういった豪族たちと菊池の関係というのはいまいち、明確には見えてこないということが指摘できるかと思います。

（二）肥後国の氏族

次に、肥後国の氏族分布の特徴を簡単に見ておきます（表2）。一つ指摘できるのは、君の姓を持つ氏族が多いということです。これは国造など、地域の有力な豪族を中心にして、それと政治的な関係を結んでいる豪族たちが同じ姓を持つ、そういうことだと考えられます。例えば、火君という豪族は君の姓を持っているので、それと関係を持っている豪族も同じく君の姓を持っている、こういったことです。

詳しいことは後程お話ししたいと思いますが、肥後国の北部の豪族の場合は火君氏よりも、むしろどちらかというと筑紫君氏との結びつきの方が強いのではないかと考えています。筑紫君氏は筑後を拠点とする豪族だと考えられますが、どちらも君の姓を持っています。おそらく、肥後の北部の豪族はそっちとの関係を築いて君の姓を持っている、そう考えたほうがいいんじゃないかという気がしています。なお、鞠智城が所在する菊池郡あたりには、久々智、大伴部、秦人、この3つの氏族の分布を復原することができます。

二　鞠智城周辺の氏族

（一）久々智氏

次に、鞠智城周辺の氏族について具体的に見ていきたいと思います。まず取り上げますのが、郡名。今は菊池というふうに言いますけれども、もともとは久々智と呼んでいたようです。郡の名前と同じ久々智という名を持つ久々智氏を取り上げてみたいと思います。

この久々智氏ですが、文献史料では、畿内で活動が見られるのみなんです。地名からすると、今の兵庫県の尼崎市に久々知という地名がありますので、おそらくそのあたりを拠点としていたと考えられます。もともと菊池地域を拠点としていた氏族と見て差し支えないだろうと思います。この久々智氏ですが、九世紀の初めごろに編纂された『新撰姓氏録』という書物に系譜が載っておりまして、それによれば、久々智氏は、大彦命の子孫ということになっています。

実は筑紫国の筑紫君氏、この豪族も大彦命の子孫だという系譜を持っている。そうしますと、同じ先祖の子孫であるという意識を持っていた。こういうものを同祖関係と言います。菊池郡には大伴部という氏族がいます。おそらくこの大伴部氏も大彦命の後裔氏族だろうと、つまり、同祖関係にある可能性が高いというふうに考えられます。

（二）大伴部氏

次に、大伴部氏を取り上げていきたいと思います。図3は、東大寺の大仏鋳造に関わる八世紀半ば

頃の木簡です。薬院、つまり施薬院に所属する大伴部鳥上や大伴部稲依という人が大仏鋳造の場に入る時の通行証か、あるいは、二人の勤務をチェックする札ではないかというふうに考えられています。この木簡によって、大伴部を称する人が菊池郡の子養郷に属していた、ということが分かるわけです。ここで考えなければならないのが、大伴部の性格だと思います。大伴部というと大伴連氏、この大伴氏との関係というのが真っ先に想起されるかもしれないのですが、そうとも限らないと。実はこの大伴部というのは、大伴連氏に連なる大伴部もいますけれども、膳臣氏につながる大伴部もいます。仕事の内容が違っていて、大伴連氏に連なるほうは王宮の警護とか、そういった仕事に関わる。それに対して、膳臣氏に連なる系統の大伴部は、大王への食膳奉仕などに関係してくる。では、菊池郡の大伴部はどちらなのか、ということが問題になってくるわけですけれども、同じ菊池郡にゆかりある久々智氏は、大彦命の後裔氏族でした。それを踏まえると、菊池郡の大伴部も大彦命の後裔氏族、つまり、膳臣氏に連なる大伴部と見たほうがいいのではないかと思います。

図3
東大寺大仏殿回廊
西地区出土木簡
（奈良県教育委員会編2000）

（三）菊池地域と筑紫君氏

ここまで考えてきたところによると、菊池郡に分布が復原できる久々智氏、それから大伴部氏というのは、いずれも大彦命の後裔氏族ということになります。ここで注目したいのは北部九州の有力豪族である筑紫君氏、これも大彦命の後裔氏族であるということです。大彦命の氏族は日本列島の各地に広く分布しているわけですけれども、北部九州における中心というのは筑紫国造、すなわち筑紫君氏です。おそらく久々智氏や大伴部氏は、筑紫君氏の勢力下にあったことを背景として大彦命を先祖とする系譜、すなわち、筑紫君氏との同祖関係というのを持つに至った、と考えるのがいいだろうと思います。

（四）秦人氏

次は、菊池郡に分布する氏族として最後に取り上げることになる秦人氏です。図4は鞠智城跡の貯水池跡から出土した木簡です。これは秦人忍という人が負担した米の荷札木簡で、一緒に出てきた遺物の年代観から、七世紀後半から八世紀後半頃のものだというふうに見られています。この木簡の記載内容について留意されるのは、米を負担した人物が所属する郡と

図4　鞠智城跡貯水池跡出土木簡
（熊本県教育委員会編2012）

か郷、そういったものの記載がないということです。このことにつきましては、すでに指摘がありますように、鞠智城が所在する肥後国の菊池郡に属する人物からの貢進だったことを示す、そういうふうに言われているわけです。つまり、この秦人忍という人は、菊池郡の人だったということになるわけです。

この秦人につきましては、かつて様々な豪族の配下にあった渡来系の人々、そしてそれが王権直属の民として割き取られて、それから中央の秦氏のもとに編成された、そういう渡来人集団、渡来系の人々の集団であるというふうに言われています。

そうしますと、菊池郡の秦人につながっていく渡来人、こういった人々を連れてきた、招来した勢力は一体誰なのか、というところが問題になってくるわけです。これまでの考察を踏まえると、菊池地域の秦人につながっていく渡来人、これを招来した豪族としては、筑紫君氏がもっともふさわしいのではないか、というふうに思います。

これは可能性ですが、磐井の乱を契機として、筑紫君氏の配下にあったような渡来人集団が中央の秦氏のもとに再編成された、そういう可能性もあるのではないかというふうに思います。

おわりに

以上の考察結果をまとめつつ、鞠智城の成立と地方豪族のかかわりについて考えていきたいと思います。

第一に、国造クラスの豪族から見た場合、菊池地域は空白地帯と言ってもいいんじゃないかなと思います。ただし、豪族がいなかったわけではないというところは留意が必要かと思います。これまで、古代山城は在地勢力の主導によって作られたものではないという指摘がありますけれども、そういった指摘とも親和的かなと思います。

第二に、菊池地域というのは、筑紫国造の配下にあった久々智氏、それから大伴部氏の勢力圏であるということが言えます。こうした点からしますと、かつて、筑紫国造の配下にあった有力者、こういった人々が鞠智城を擁する評の官人に編成された可能性が高いと思います。白村江の敗戦後、特段こうした勢力に対して牽制が必要になったかと言われると、それは想定しにくいのかなというふうに思っております。むしろ、こうした勢力と鞠智城の築城の関係を考えるとすれば、築城を契機とした倭王権による地方豪族の編成、こういった意味を見出せるのではないかというふうに思います。

鞠智城を造るにあたって、倭王権、それから筑紫大宰が、国造を介さずに、現地の中小豪族に協力させると。そうしますと、それによって結果的に、倭王権、筑紫大宰による地域社会の掌握が進んでいったのではないか、そういう意義を見出せるのかな、というふうに思います。

第三点ですけれども、菊池地域は、筑紫国造のもとから倭王権の直接的な配下に再編成された秦人が居住する地域であるということ。ここからどういうことが考えられるのか、ということですけれど

も、秦人は国造のような地方豪族を介さずに、中央の王権が直接的に把握していたと言われておりますので、鞠智城を造るにあたって、倭王権、それから筑紫の大宰による労働力編成が比較的容易であったのだろうというふうに考えられます。

また秦氏といいますと、土木とか建築との関わりというのが注目されます。そうした点からすると、技術的な面から鞠智城の造営に関与した、そういう可能性も考えられるかもしれません。

以上、主に文字史料の分析によって、肥後国、特に菊池地域における豪族の動向を探り、鞠智城が築かれた背景を考えてきました。私の報告は以上です。

【図版出典】

熊本県教育委員会編　2012「鞠智城跡Ⅱ」

奈良県教育委員会編　2000「東大寺防災施設工事・発掘調査報告書　発掘調査篇」東大寺

報告4
鞠智城と菊池川流域の古墳・古代遺跡

報告者紹介

亀田 学（かめだ まなぶ）
熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県教育庁文化課を経て、現在熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」勤務。

鞠智城と菊池川流域の古墳・古代遺跡

歴史公園鞠智城・温故創生館　亀田学

はじめに

この度私に与えられましたテーマは、菊池川流域の古墳時代と古代遺跡というものです。対象とする地域は有明海を流域にする菊池川下流域、それから中流域、それから上流域。このあたりを中流域と設定する人もいるんですけれども、便宜的に上流域と考えさせていただきたいと思います。

一　菊池川流域の古墳

まず、古墳時代前期には、中流域に、竪穴式石室を持つ竜王山古墳が現れます（図1）（図2）。その後有明海流域に近いところに、舟形石棺を擁します。また壺形埴輪を持つ首長墓が造営されます。中期になると舟形石棺を主体とする古墳が、菊池川下流域・中流域に顕著に分布します。これは、菊池川流域の舟形石棺の形式を表したものです。高木恭二氏が設定された北肥後型というものは、屋根形、棺蓋が家形をしたものです。

舟形石棺の分布は中下流域に分布の中心があります。菊池郡衙、郡衙推定の上流域の深川古墳まで舟形石棺が採用されます（図3）。菊池川流域の古式な舟形石棺をのぞくと、上流域西部に前方後円墳が見られます。

北肥後型、先ほど屋根型をした舟形石棺の分布なんですけど、菊池川流域に顕著なんですけど、筑後川流域にも顕著に分布していることが分かり、密接に関係があったことが分かります。

肥後地域では、横穴式石室の玄室の奥に、開かれた棺の石屋形というものが据えられます（図5）。石屋形、家形の棺蓋を持つ2つの

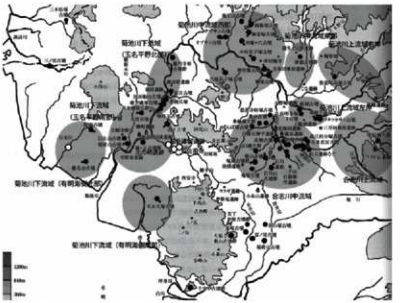


図1　菊池川流域を中心とした遺跡分布図
（国立歴史民俗博物館研究報告第173集第23図2012を改変）

類型に分かれ、平天井A類、家形B類に分けると、B類の分布が菊池川流域と宇土半島の基部に顕著であることは、在地勢力が力強く結びついている可能性があり、筑後川地方の有力な古墳にも採用されています。菊池川上流域にも袈裟尾高塚古墳などがあるんですけれども、石屋形です。石屋形が平天井であることは、在地勢力の部分と接点である考えられます（図5）。

二　菊池川流域の古墳時代の集落

古墳時代の有力な集落は、下流域では柳町遺跡や古代に鉄生産遺跡を背後に持つ山田松尾平遺跡など。それから、中期では方保田東原遺跡周辺、御宇田台地に

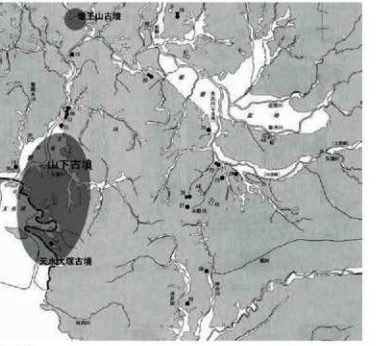


図2　前期古墳の分布

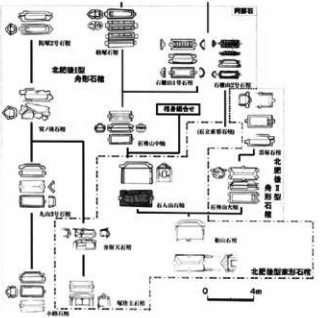


図3　菊池川流域の石棺の系譜（高木恭二）

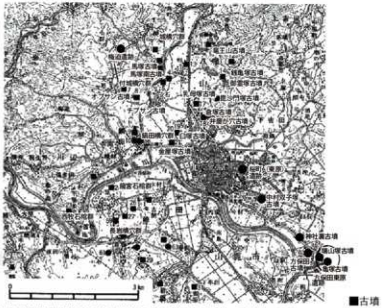


図3-1　山鹿周辺古墳分布図（山鹿東部の古墳群は未記入）（玉名市 2005）

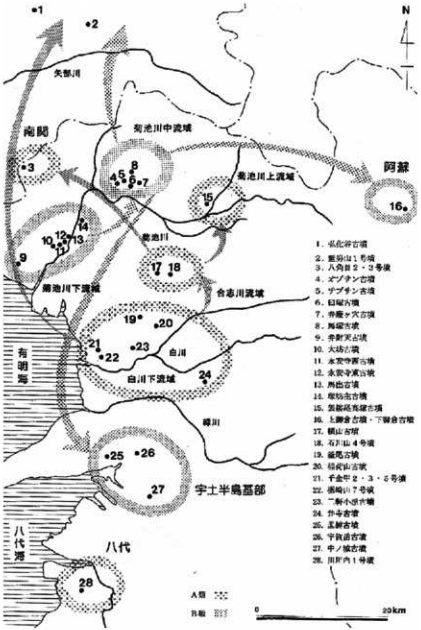


図5　肥後　主要な石屋形を有する古墳分布図　（宇野慎敏 2010）

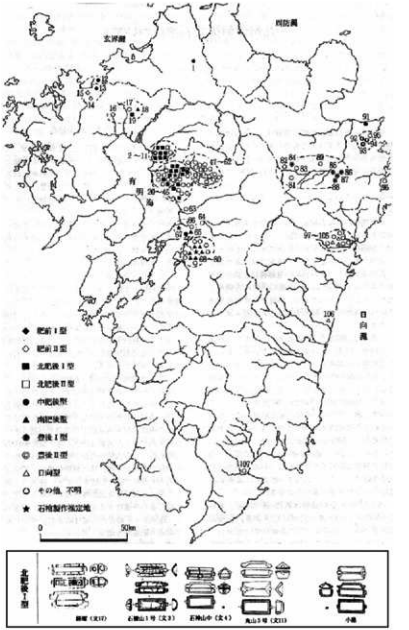


図4　九州の舟形石棺分布図　（高木恭二 1994 古代學協会）

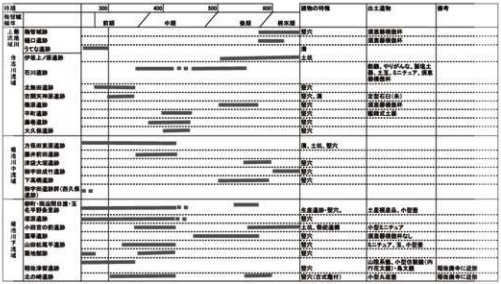


表2　菊池川流域古墳時代集落消長表

遺跡が分布します（表2）。中期になると、合志川流域の平町遺跡で早くから竈が採用されるなど、渡来系の要素と畿内系政権の関与する武器、武具等を持つ古墳の周辺に集落が営まれます。

古墳時代の鞠智城周辺には切石積みの石室は存在しませんが、後期の横穴式石室、横穴群が多数存在します（図9）。このように、在地の集落は鞠智城を囲むように存在し、鞠智城には六世紀後半から七世紀にはすでに集落が見つかっている状況です。在地の有力な首長は存在しませんが、在地の勢力をけん制するためにヤマト政権が勢力を置くには適した地域であったと考えられます。

表4は古代の官衙関連遺跡やその他の集落の消長をまとめたものです。鉄の生産は流域の特定の地域に存在し、墨書土器の出土している遺跡はかなり多いことが分かります。下流域の玉名平野には玉名郡

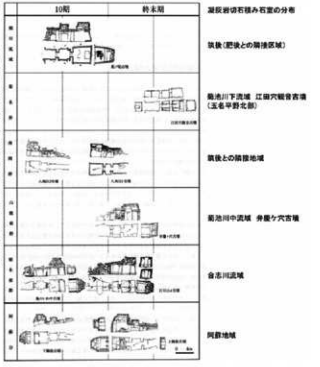


図9-1　切石造り複室室構造横穴石室編年図（高木恭二）

図9-2　鞠智城周辺古墳・横穴分布地図

衙や立願寺廃寺を中心に、七世紀以降、古代を通じて見られます。

全体的には、八世紀後半以降、集落の増加は顕著ですが、丁寧に見ると七世紀代の遺物も出土しています。中下流域の、古墳時代以来の集落が古くから存在し、合志川流域は合志郡から山本郡が分離

表３　菊池川流域古墳時代集落消長表

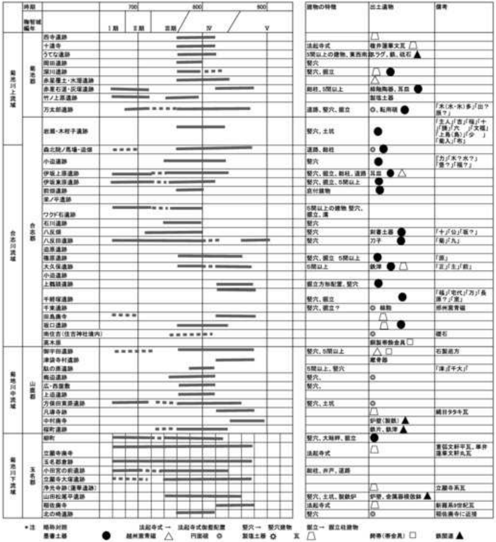


表４　菊池川流域古代集落消長表

した頃の地域の移動が見られることが分かります。古墳時代以来の渡来系の人の増加が見られると考えられます。

三　菊池川流域の古墳文化

ヤマト政権に関わる遺物として、埴輪を取り上げてみたいと思います（図6）。畿内地域の川西編年V期併行期、いわゆる古墳時代の後期になるんですけれど、特徴的な最下段の突帯の部分に、押し付けたような技法を取る古墳が、菊池川の塚坊主古墳、中流域の金屋塚古墳、チブサン古墳等にも見られ、その分布が筑後地方にも顕著になり、筑後地方との密接な関係があることがうかがわれます。

また、この地域で埴輪に変わるものとして石製表飾があげられます。（図7）筑後の岩戸山古墳が有名ですが、石製表飾を中心に分布していますが、肥後地域でも、北部の菊池川流域と南部の氷川流域を中心に分布しています。筑後地域との関連が見られ、石人は筑後川流域の北部に、器材形の石製表飾は南側に分布するのですが、木柑子フタツカサン古墳ですとか、袈裟尾高塚古墳の石室材構成する靱の石製表飾などが見られ、両地方、肥後の上でも南北の接点にもあたるというふうに考えられると思います。

あと、垂飾付耳飾なんですけれど、五世紀後半から六世紀前半の百済系の耳飾りが見られます。江田船山古墳や大坊古墳などに見られ、百済との関係が密接なことが分かります（図8）。

畿内系終末期古墳に類似する凝灰岩の切石積石室の分布

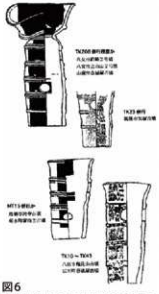


図6
押圧技法を有する円筒埴輪の編年
（岸本圭　2000　九州前方墳研究会）

図7　肥前肥後の石製品分布図
（高木恭二　1994　岩戸山歴史資料館）

1：半田・宮の上古墳　2：陣内古墳　3：日拝塚古墳　4：長畑1号墳　5：立山山8号墳　6：大坊古墳　7：江田船山古墳（追葬段階）　8：物見櫓古墳
○：大加耶系　●：百済系　▲：新羅系

図8　中・北部九州地域における垂飾付耳飾の分布（6世紀前半）
（高田貴太　2014）

を見ると、菊池川流域には見られないんですけれど、筑後、それから阿蘇地域にもありまして、そういった地域の経由となっているという考えもできます。

四 菊池川流域の古代の集落・官衙関連遺跡・寺跡

菊池川流域の古代官衙関連遺跡として、詳細が比較的判明して中心になるのは、下流域の玉名郡衙、立願寺廃寺を中心とする古代の遺跡群です（図10）。周辺には柳町遺跡が存在し、八世紀後半の敷粗朶技法を用いた大畦畔も見つかっており、条里制の施行時期を考える上でも貴重な資料となっております。

菊池川中流域は古代遺跡の中心部です（図11）。左端に、山鹿郡衙推定地の桜町遺跡、中央に、弥生時代後期以来の拠点集落である方保田東原遺跡があり、古代にも続いていると考えられます。北東には、官衙関連遺跡の御宇田遺跡群が分布しており、中村廃寺などでは鉄関連の遺物が出土しております（図12）。

主要な官道関連遺跡。定義するのは難しいんですけれども、五間以上の建物を持つ、墨書土器、硯、陶磁器、鉄関連などの要素が一つでもある遺跡を丸で囲むと、官道周辺の二～四km以内に集落跡、さらにその南側にも大規模な古代の集落が存在しております。

図10　玉名市条理図（玉名市2005第9図改変）

1 玉名郡家　2 玉名郡寺　3 玉名郡倉　4 疋野神社　5 稲荷山古墳墳頂部（立願寺瓦出土地）
6 蓮花遺跡　7 磐座（金比羅山）　8 大池　9 日置氏の最初の拠点
10 柳町・両迫間日渡遺跡・玉名平野条里跡　11 上小田宮の前遺跡　12 山田松尾平遺跡
13 北の崎遺跡　14 稲佐津留遺跡　15 稲佐廃寺　16 城ヶ辻古墳群　17 寺田古墳群
18 保田地窯跡群　19 蛇ケ谷製鉄跡　20 立願寺大塚遺跡　21 大坊古墳　22 永安寺東・西古墳
23 馬出古墳　24 小路古墳　25 松林寺山古墳　26 石貫ナギノ横穴群　27 石貫穴観音横穴群
28 三ツ川六反製鉄跡　29 広福寺裏製鉄跡
30 清原古墳群（江田船山・京塚・虚空蔵塚・塚坊主古墳）　31 姫塚古墳　32 前田古墳
33 宮の後古墳　34 真福寺東古墳　35 富尾原横穴群A　36 富尾浦谷横穴群　37 田崎横穴群

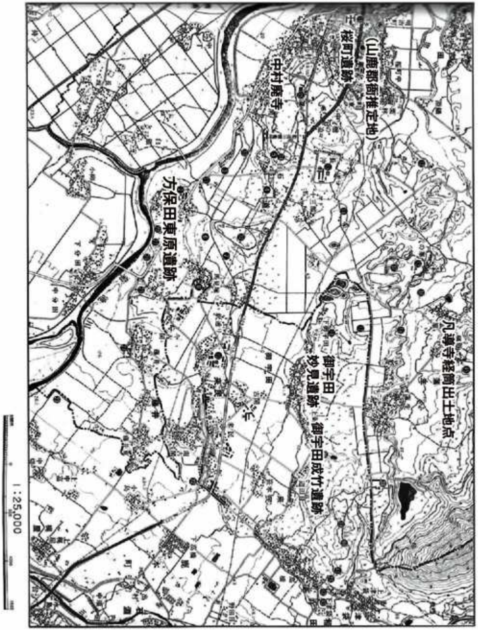
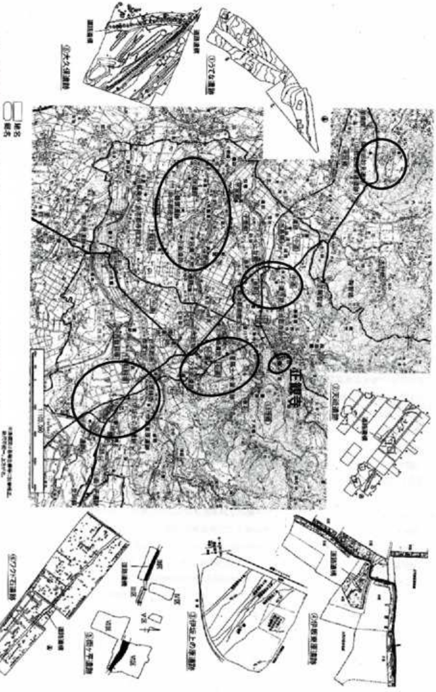


図11　方保田東原周辺古代遺跡（山鹿市）

図12　鞠智城周辺古代遺跡等分布図（菊池市教育委員会　菊池市文化財調査報告第6集を一部改変）



おわりに

鞠智城は肥後国府や大宰府、阿蘇、東九州への中継地点として、大宰府の出先機関として機能し、やがて菊池郡の郡衙機能も補完する機関としても機能していると考えられます。

菊池川中流域・下流域に在地勢力の中心があり、合志川から菊池川上流域左岸地域も連携して地域社会を形成していたと考えられます。

それらの背後に大和（倭）政権が整備した鞠智城が存在すると考えられます。

以上で、私の発表を終わりたいと思います。

座談会

コーディネーター

佐藤 信（東京大学名誉教授）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授を経て、東京大学大学院人文社会系研究科教授。のち、大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事。現在、東京大学名誉教授。著書は『日本古代の官都と木簡』『出土史料の古代史』『古代の地方官衙と社会』『列島の古代』（『日本古代の歴史6』）『古代史講義』など多数。専門は日本古代史。博士（文学）。

参加者

吉村 武彦（明治大学名誉教授）

亀田 修一（岡山理科大学生物地球学部教授）

濱口 優樹（中京大学教養教育研究院講師）

村崎 孝宏（熊本県立装飾古墳館長）

熊本大学大学院文学研究科博士課程修了。熊本県教育庁文化課課長補佐、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」館長を経て、現在熊本県立装飾古墳館長。

亀田 学（歴史公園鞠智城・温故創生館）

佐藤

第一部で、4人の報告者の方の大変要を得たお話を伺っていて、話がなかなかうまくかみ合ってきているのではないかと思いました。このあとの座談会も期待しております。

これから1時間くらい、討議をさせていただきたいと思います。

話の一つは「考古学からみた古代山城・鞠智城と地域社会」のお話。二つ目のテーマは「古代史からみた古代山城・鞠智城と地域社会」という話を討議していただきます。三つ目は、「鞠智城と肥後の地域社会」ということで、これからの調査研究の課題のようなお話にまで進みたいと思っています。

ここからは、最初にご挨拶していただいた、熊本県装飾古墳館長の村崎さんにも参加していただきますので、自己紹介をお願いします。

村崎

こんにちは。熊本県立装飾古墳館の村崎です。冒頭でもご挨拶させていただきましたが、二部にも参加させていただきます。今回、「地域社会からさぐる古代山城・鞠智城」というテーマを設けさせていただきました。鞠智城のこれまでのシンポジウムでは、発掘調査で何が分かったかを発表させていただいておりました。具体的に菊池川流域ですとか、肥後国ですとか、そういう地域の中で鞠智城がどのような役割を果たしたのか、あるいは大宰府とどうつながっていたのかをより具体的に探っていくためには、もう少し身近なところもテーマとして明らかにするべきではないか、ということを考えまして、今回、佐藤信先生とご相談をさせていただいたところです。

築城に関する考え方としては、いくつかこういう理由があるんじゃない、ということを、これまで多くの先輩方が発表されています。今回、吉村先生のお話をお聞きし、目からうろこと言いますか、なるほどそう考えれば理解できるのかと、少し光が見えたように思います。鞠智城の調査成果は、5期に時期区分をしております。その中で土器の出土量の増減や、遺構の変遷など、いろんなところが少しずつ分かってきたんですが、それがどのように歴史の中で位置づけられるのか、見ることができるのか、ということろまでは具体的な整理ができていなかったように思います。その中で、時代の変遷、流れとともに役割が徐々に改変していく。当初言われていた考え方も、それぞれの面で考えると正しいということも言えるのかもしれないと。

それから、亀田修一先生のご発表の中の、鬼ノ城の築城にかかる技術や、直接それに関わる集団のお話なども、今後、鞠智城の中でしっかりと見ていかないといけないということを痛感しました。勉強させていただければと思います。今日は短い時間ですが、よろしくお願いいたします。

佐藤

ありがとうございました。それでは、これから座談会に入りたいと思います。

今、村崎さんのお話にありましたように、第一のテーマは考古学から見たというところに焦点を当

てております。全体としては、考古学・古代史の両方から鞠智城の歴史的な意義について、連携しながら迫りたいというのが今日の座談会の主旨です。

最初に「考古学からみた古代の山城・鞠智城と地域社会について」です。今日は主に、亀田修一さん、亀田学さんからお話をいただいたわけですけれども、これについて古代史の方から質問などありましたら最初にお願いしたいと思います。

吉村

配布されている資料にあるのですが（資料編2ページ）、今回期せずして、筑紫との関係で鞠智城を考えようということで、私もそれに賛成なんです。ここで一つ問題になるのは、肥後国がいつできたのか、建国された時期です。これは難しい問題で、早く考える人では孝徳朝の大化改新時を想定する人もいるかもしれない。遅い人は天智朝くらいですかね。あるいは、もう少し下がって天武朝ですか。その場合、鞠智城の方が早く造られたということになるかもしれない。

肥後国と鞠智城が、どちらが先に造られたのか、それなりに問題になります。それはともかくとして、肥後国において、大宰府・筑紫城という防衛体制の中で、どのように立地させるのか。鞠智城をどこに設置するのか。また防衛の観点からしますと、国府は別の箇所に造らないと、同じ場所だと同時にやられてしまいますよね。そういう意味では、肥後国府は変遷がありますけれども、かなり離れていることは、いい配置かと思うんです。

亀田修一さんがに書かれているのは（資料編2ページ）、白村江以前に渡来してきた人たちと、古代山城との築造の関係を説いておられますね。これを読ませていただいて、こういうことであれば、防衛体制の建設はよく理解できると思ったんですが。

要旨のところにはあまり出てこなかったのですが、ミヤケがヤマト王権直轄の施設かどうか、そこまで言い切れるかどうかは疑問なんです。非常に関係が深いことは事実です。溝口さんも言われたような、筑紫国造と鞠智城の場所との関係とかは、少し考える必要があります。いずれにしても大宰府の関係で、鞠智城の立地が考えられたということは、非常に説明しやすいと思います。もう少し詳しくお話しいただければと思いました。

佐藤

今のお話では、六世紀前半の筑紫君磐井の戦いの時代は、肥前、肥後には分かれていなくて火国だったということになると思います。お隣は筑紫国だった。それが律令制的な国制が敷かれる段階で肥前、肥後に分かれる。その時期は、一般的には七世紀後半と考えられているわけです。それが鞠智城の築城期、六六三年の白村江の敗戦の直後に作られたとした場合は微妙な関係になるということです。火国だったかどうかということも含めてですけれども。

その場合、今日のお話は肥後を中心としておられたのですけれども、肥前も火国という形で一体だった可能性もあるかなと思います。その点について、お考えがあれば亀田学さん、いかがでしょう

か。

亀田（学）

肥前地域についてはあまり詳しくないので言えないんですけれど、私が、七世紀後半の白村江以前と言ったのは、文献史料に築城記事がないということと、古墳時代の前半から後半にかけて、中心地域の背後になるので、古墳時代の資料の分布から、それ以前にあってもいいんじゃないかと考えたからです。鞠智城をなぜここにしたのか、その辺に関わる資料かと思いました。先ほど、吉村先生からご指摘いただいた、いろんな考古資料を使って、どこまで遡れるかという点なんですが、なかなか難しいところです。六世紀後半から七世紀後半までのいい資料がなく、その間、なるべく古くできないかと個人的には考えています。

佐藤

今日の溝口さんの話にもあったように、火君という氏族自身もいくつかの地方豪族の連合体のような形で考えたほうがいいということになります。おそらく火君が火国の代表的な地方豪族という形ですが、その中身は連合体的だったということで、私も勉強させていただきました。そうすると、肥前と肥後にどう分かれていくかということも含めて、肥後国がどういう勢力から形成されるかということもあります。この点について、考古学のお二人、亀田修一さんと村崎さんは、お考えは何かありますでしょうか。じゃあ、村崎さん。

村崎

肥後国が成立する前にどういう形で、ということになると、なかなか答えとして難しいです。ただ、亀田（学）が言いましたように白村江の戦いの前からあったのではないかという考え方は、これまでも言われた方がいらっしゃったと思うんです。遺物の中に、貯水池跡からだったと思いますが、七世紀の第2四半期後半くらいの遺物が出ているんです。そういうこともあって、築城期を第3四半期の半ばくらいにもってくるのは少し難しいのではないか、もう少し早くからあるんじゃないかという意見を言われていた方もいらっしゃいます。それは物からの話です。その関係で築城の記録が抜けているのではないか、といった解釈をする方がいらっしゃったのも事実です。ただ、それ以外に、確実に考古資料の中から築城時期に関わる資料は現在のところ見つかっていません。傍証程度の話ということになります。

佐藤

九州におけるヤマト王権の勢力を代表する筑紫大宰の在り方自身も、まだよく分かっていないこともあります。さらにそのもとでの、火国、あるいは肥後国の様子というも、考古学的にも古代史的にもまだまだ課題だと思います。

続きまして、肥後の勢力を古墳のほうから亀田学さんに説明いただいたんですけれども、もうちょっとご説明いただけないでしょうか。お話の中では、鞠智城の須城、菊池郡地域にはなかなか有力な

古墳、地方豪族勢力はなくて、むしろ筑後の筑紫君の勢力だとか、あるいはヤマト王権の直接的な関係がそのすき間に入ってきているのではないか、と私は何ったのですが、どうでしょうか。

亀田（学）

はい、そういうふうに考えております。木柑子フタッカサン古墳とか、そういう有力な古墳が六世紀後半にあるんですけれども、菊池川の左岸にあります。そういうことも考えると、鞠智城の地域にはそれほど有力な勢力はなかったというふうに考えています。

佐藤

菊池川の右岸には、そういう有力な古墳を営む勢力はなかった、ということでしょうか。

亀田（学）

全くないわけではないんですが、中流域、下流域などの他の地域に比べてには、有力な古墳がない。製瓷尾高塚古墳の時期にはやはり中流域、下流域にもっと有力な古墳がありますし、石屋形を採用する古墳でも家形を採用するような有力な古墳があります。それでもやはり円墳です。

佐藤

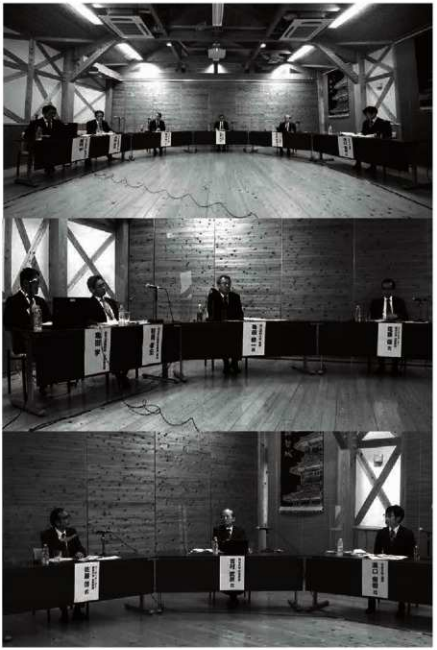
私は、菊池川の河口部はラグーンがすごく発達していて、当時の海岸線はもっと内陸まで来ていて、鞠智城にかなり近いところまで来ていた。例えば、江田船山古墳とか、あのあたりの古墳群も割と近接した場所ではないかというイメージがありましたが、そこまでは言えないということでしょうか。

もう一つ言ってしまうと、八世紀の奈良時代でも、筑後川流域というのは九州を代表する穀倉地帯で、もっとも生産力が高かった。九州の中でも、肥後国が一番生産力が高いことは史料的にも確実なのですけれども、それを支えた生産基盤として、菊池川流域の重みはすごく大きくて、これは江戸時代でもそうだと思いますが、その地域を握った在地の勢力が強いのではという気がするのです。そのへんはいかがでしょうか。

村﨑

答えになるかどうか分からないんですが、江田船山古墳の石棺の形式、横口式家形石棺を直葬しているんです。この横口式家形石棺が、この地域に突如として出現するんです。同様の形態、形式のものとしては、福岡県の石人山古墳の石室の中に置かれた横口式家形石棺があるんです。それと同形のものということになります。清原古墳群の中で、江田船山古墳の次に作られる前方後円墳が塚坊主古墳です。その塚坊主古墳の中には横口式家形石棺を平入にした石屋形を安置する形になります。家形石棺が、石屋形に変化をしながら、三角文ですとか円文、菱形文、いわゆる直弧文の崩れたような装飾を持つものがそこに新たに作られてくるんです。ですから筑後地方との関係性もありながら、宇土半島基部で見られた直弧文の影響も見られ、それが、菊池川流域の上流に移っていくと考えたときに、首長的な勢力が存在しないということでは、多分ないんだろうと思います。

江田船山の副葬品にも冠や、靴、耳飾など、大陸系の遺物の存在も、他の地域との関係性を十分に



伺える資料です。そういう意味での古墳文化が、下流域からどんどん上流域の方へと動いていくということなのかなと思っています。ただ、亀田（学）が言ったように、鞠智城周辺に大規模な前方後円墳が存在しない、造られていないというのも事実です。

佐藤

今日は、亀田学さんや溝口さんで、筑紫君と肥後の地方豪族が結構密接につながっていたのではないかというお話がありました。私は江田船山古墳の副葬品に百済の遺物が直接入ってくるような密接な関係を持っているということと、磐井の戦いの筑紫君磐井のほうは、新羅と密接な関係を持っているというのが文献に書かれているので、割と、磐井の戦いの時には少し対立があったのではないかと。筑紫君の勢力と火君の勢力は、百済と新羅との関係上スタンスが違うのではないのか、というイメージを持っていました。そのへんは、考古学的には必ずしもそうではないと思ってよろしいでしょうか。これは、亀田修一さん、いかがでしょうか。

亀田（修）

まず、磐井が新羅と関係があるということは記録に出てきます。僕個人としては当時の北部九州、熊本も含めて、別に、新羅と仲がいいから百済と悪いというわけではなくて、いろんなところとお付き合いをしていると思っております。

先ほど、亀田学さんが出された資料の中に、国立歴史民俗博物館の高田貫太さんが以前書かれた耳

飾の論文の図（資料編 62ページ図9）が出ています。白い丸と黒い丸と、それから三角があります。これを見ますと、白丸は大加耶系、黒に塗りつぶしている丸は百済系で、三角が新羅系です。ご覧の通り、新羅が入っていますのは2番と4番ですね。福岡県糸島市の陣内古墳と田川郡香春町の長畑1号墳ですね。それから、白い丸が大加耶系ですが、これが一番多い感じですね。そして地元熊本県の江田船山古墳と大坊古墳で百済系と言っているものが出ています。このような在り方をしていますので、きれいに割り切れる状況では、福岡も熊本もないのかな、と僕は思っております。ですから、先ほどのいろいろな関係に関しても、重層的で多様な関係を意識するほうがいいのかなと思っています。

佐藤

考えてみると、『日本書紀』筑紫君磐井の記事の中でも、高句麗、百済、新羅、加耶の諸国からの使者を全部自分のところに誘致したという記事があります。外交関係というのは単線の関係ではなくて複線の関係であった。

その場合、亀田修一さんにお伺いしたいのは、熊本の地方豪族の場合、百済の遺物がそのままやってくるような関係というのは、有明海経由の交流と考えてよろしいのでしょうか。

亀田（修）

それは素直にそう思っております。佐賀県のおつぼ山神籠石や福岡県の女山神籠石などの古代山城の話をする時に、有明海ルートを無視することはできないと思っています。佐賀県南部地域は古墳時代からずっと有明海ルートが生きているんだというふうに思っております。

佐藤

今日亀田学さんのお話にもありましたが、磐井の勢力圏では石人・石馬文化があって、ある時期だけ、それが阿蘇の溶結凝灰岩を使っているという意味では肥後国と深い関係があると私は思っています。一方で、磐井の戦いが収束した後は、畿内由来の埴輪の文化になっていくと理解しています。考古学の方に伺いたいのは、今日のお話の中での埴輪のご説明というのは、そういう、私が思っているようなことは、単純にそうじゃないということになりましょうか。関係を教えていただけますか。

亀田（学）

磐井の乱と考古資料の関係は非常に微妙なんです。石製表飾というのは木柑子フタツカサン古墳でも六世紀後半ぐらいまで残りますので、一概に磐井の乱から画期になるというだけではないと思うんです。六世紀前半の時期だと中村双子塚古墳という多様な埴輪が出土するものもありますし、石製表飾しかないという古墳もありますので、磐井の乱で一気に区分されるというような感じの出土状況や時期ではないというふうに考えていただけたらと思います。

佐藤

磐井の、六世紀前半の戦いの後、だいぶ九州の豪族間の力関係が変わる可能性がないか、というような意見については溝口さいかがでしょうか。

溝口
葛子なんかも史料に出てきますけど、案外、勢力図が変わるというほどでもないのかな、という気はしています。ただ、今回の要旨報告からいくと、配下においていた渡来人集団なんかは、取られるというか、王権のほうに割き取られてしまったのかな、という気はしています。

佐藤
外交権なんかも取られるわけですよね、ヤマト王権にね。

溝口
そうです。屯倉を献上することによって、拠点はかなり少なくなっていくということです。

佐藤
磐井君も、単純な一元的な存在じゃなくて、いろんな勢力の集合体と見れば、それがすべて潰え去るわけでもない、というわけでしょうかね。

溝口
だと思います。

佐藤
分かりました。ありがとうございます。今のようなお話について、吉村さん、いかがでしょうか。

吉村
考古学の方は、たとえば古墳があると、氏族の政治的拠点と考える方がいます。はたして政治的拠点や氏族の本拠地でしょうか。僕は、奥津城といいますか、葬送の地だと思っています。本拠地は王宮ですので、古墳の立地とは完全に区別すべきです。

たとえば国府が、どこに設置されるのかという問題を考えます。房総地域は、小国造が支配する地域と言われています。そして国造の褒葬地である古墳の場所が分かっています。下総の国府は市川市にありますが、なぜ市川なのか少し考えました。下総地域では、下海上国造、印波国造、そして千葉国造の3国造がいます。それぞれ墓域があります。国造が生存した政治的拠点ではなく、あくまで墓地です。

ところで、下総国の中心地はどこかというと、この市川です。国府台の南端の方に位置しています。おそらく武蔵国との交通を配慮して、今の市川市に国府も国分寺もできたかと思います。

武蔵国の場合は、秩父国造を別にしますと、武蔵国造は大国造と言われています。北の方には、埼玉県行田市に稲荷山古墳がある埼玉古墳群があります。古い時期の荒川の流域にあたります。南の方は多摩川と、鶴見川の流域に古墳群があります。古くは東山道に所属するので、北の方の毛野の影響が強いところです。国府はどこにつくられたかというと、いわば中央にあたるというか、今は府中市という府中の名前が残っている場所にあります。国分寺は、日本の中で唯一国分寺市という市名を名のっているところです。

意外と、それ以前の政治的拠点である場所に、国府や国分寺が造られるわけでは必ずしもありません。下総国の場合は、3国造ですが、それぞれの国造の拠点から離れたところに造るという現象がありました。

鞠智城の場合、鞠智城が早いか、肥後国の建国が早いかの問題があります。そして肥後国では、鞠智城と国府の建設をどこにするのかが、問題になります。これは考古学による発掘調査を待たなければなりません。鞠智城の立地としては、大宰府と筑紫城との関係からいえば、鞠智城は大宰府の近くの北の方にしますね。北部といっても、海寄りではないのですが、交通の要所にはなります。

今日は亀田学さんから、古墳の在り方と集落などについて報告がありました。しかし結局のところ、いわゆる豪族居館についてはなかなか難しいですね。豪族居館が見つかって、その近辺に鞠智城ができるのなら分かりやすいのですが。むしろ、それ以前の政治的拠点がある場所に造られるのも分かりやすいです。しかし、国府などは、下総や武蔵国もどうも拠点とは無関係です。

今日はまた、古墳の所在地と集落の話がありました。豪族居館は、いずれ見つかりませんかね。古い寺院についても、まだよくわかりませんね。福岡の小郡市では、初期の評衙遺跡や寺院跡が見つかっています。鞠智城周辺でも、寺院が見つかれば政治的拠点に近いと想定できるんですが。ただし、古墳の分布だけからは、どうも拠点とは関係しないのではと思います。

佐藤

国府の下の郡レベルでの郡家、郡衙みたいな存在もちょっと間に入れて考える必要があるかもしれませんね。これは、地域社会の考古学的な解明が進めば分かってくるだろう、ということだと思うのですが。

吉村

ただ、郡家の推定地は、ちょっと南の方ですよね。それから郡名寺院、この名称は郡寺とか色々ありますが、郡名寺院もあります。

佐藤

郡家については、菊池郡の郡家について亀田学さん、いかがでしょうか。

亀田（学）

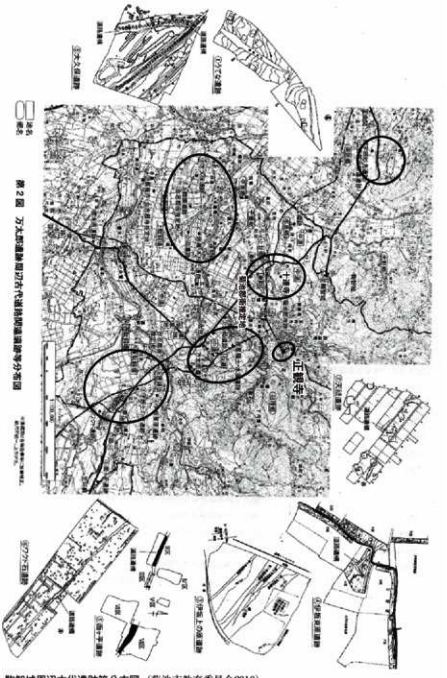
南側に、菊池川流域にありまして、過去の調査で一部確認されているのですが、土塁状に少し残っているところが、推定地域になっているんです。瓦も出土しています。

佐藤

郡の寺は確実ですよね。

亀田（学）

これが鞠智城で。菊池川があって、流れているんですけど、西側に西寺遺跡という郡衙の、郡家推定地、郡衙推定地があって、その北側にと十蓮寺（じゅうれんじ）という郡寺推定地があります。



第2図　万大寺遺跡周辺古代遺跡等分布図

鞠智城周辺古代遺跡等分布図（菊池市教育委員会2010）

佐藤

塔心礎でしたか、残っているのは。

亀田（学）

現在、心礎だけ残っていまして、伽藍も推定はされるんですけど、不確かなところもあります。西原道はさっき言いましたけれども、土塁状の部分が残っているところがあって、瓦の散らばり方から見ると、少し南側まで、その推定地よりひろがっていますので、中世の居館に（再）利用されているかもしれません。なんとも言えないんですけど。古代の瓦がたくさん出ていますので、周辺を含めて菊池の郡衙推定地としていいと考えています。

吉村

土塁といわれましたが、中世になるわけですか、古代ですか？

亀田（学）

そこがちょっと分からないんですよね。

吉村

古代で土塁があるのは、珍しいですね。

佐藤

土塁状の高まりが残っているという・・・。

亀田（学）
土塁状の高まりですね。

佐藤
これは、地図で見ると、陸上交通路と菊池川の水上交通の交点みたいな場所だと思ってよろしいのですよね。

亀田（学）
そうですね。ここら辺は官道とかいろいろ出てくるんですけれども、ずっと大宰府の方へ向かう車路とかの推定地には近接していますね。

佐藤
菊池川か、その支流が近くにありましたよね。

亀田（学）
菊池川ですね。

佐藤
菊池川の水運との関係もあるかなと。こういう地図でだんだんと地域社会の姿がわかってくると大変ありがたい。特に、豪族居館が分かってくると大変ありがたいと思います。
さて、時間が経ってしまいましたので、次の章、第二のテーマ「古代史からみた古代山城・鞠智城と地域社会」に移りたいと思います。これについては、考古のご報告の方から古代史の方に質問はございませんでしょうか。じゃあ、亀田修一さん。

亀田（修）
溝口さんにお聞きしたいと思います。先ほど、この地域の人々の名前、数はさほど多くはないのですが、鞠智城周辺域、菊池郡などのグループは、筑紫君グループの可能性があるというお話だったと思います。つまり火君といっているのは熊本県の南部地域で、こちらは別のグループという見方ができるということでよろしいんでしょうか。

溝口
氏族の分布のあり方みたいなものも、領域的に、ここからここまでがこのグループ、というようなあり方ではなくて、例えば、火君と結びついているグループとか、筑紫君と結びついているグループが、モザイク状にバラバラと点在しているような、そういうあり方もあるかとは思うんです。現在確認できる史料から見る限りでは、という限定付きですけれども、どちらかというと、鞠智城の周辺地域の氏族の系譜を見ると、筑紫君氏との結びつきというのが見えてきます。それに対して、火君氏とのつながりが見えてくる氏族が果たしているのか、というと、これは史料の少なさから何とも言えないところなんですが、火君氏の分布はどちらかというともう少し南の方に、八代郡のほうに下るということになります。

亀田（修）

そうしますと、先ほど亀田学さんの話と、佐藤さんの話、考古資料と文献史料のお話が、それなりに整合性も持ってきますね。そうしますと、鞠智城の見方って変わってきますよね。

佐藤

大伴部氏については、溝口さんは大伴連氏、のちの大伴宿禰、ヤマト王権を構成する有力な大伴氏の系統ではなくて、膳臣大伴氏の系統だと言われた。これは祖先伝承から言われたと思います。これについては、大伴連氏系ということはまったく考えられないかということを、先ほど吉村さんとも話したのですけれども、いかがでしょうか。

溝口

肥後国には、実は両方の大伴部がいまして、火葦北国造、これは靱部というのが姓に付いていると思うんですが、おそらく、中央の大伴連氏につながる。我が君大伴連ってありますよね。金村のことを我が君っていうふうに呼んでいますので、明らかに大伴連氏の配下にあるということが言えると思います。なので、菊池郡の大伴部がどっちか考えないといけないんですけれども、いろんな傍証を見ていくと、どちらかというと、膳臣系の可能性が高いと。傍証とは何かというと、発表の方では少し省略したんですけれども、例えば日本書紀の持統四年の記事で、百済を救援に行った時の役で、捕虜になった大伴部博麻という人がいまして、その博麻は唐の人の計画を報告するために倭国に帰ろうとするんです。お金がなくて、着るものや食べるものがないということで、大伴部博麻は自分の身を売って着るものや食べるものに変えて、土師連富杼や氷連老とかを倭国に帰したという人です。一緒に帰った中に、筑紫君薩夜麻という人がいます。これはすでに指摘されていることなんですけれども、おそらく、この大伴部博麻という人は、筑紫君薩夜麻の配下にあった。だからこそ、自分の身を売ってまで彼らを倭国に帰した、ということが言われています。そういう史料からすると、筑紫君氏の配下に大伴部氏がいる、ということが言えると。

それからもう一つおもしろいのは、風土記なんですけれども、築後国風土記の逸文ですかね。磐井が、乱の後に、豊前国の、上膳郡に逃げたという話もあります。実はその上膳郡というところも、「みけ」という郡の名前から察せられる通り、膳臣大伴部に関わる地域で、実際戸籍なんかを見てみると膳臣大伴部姓の人なんかが見られます。おそらく、その地域も、磐井、というか、筑紫君氏の配下にあるような地域で、だからこそ、そういうところに逃げた、本当に逃げたのかどうか分かりませんけれども、そういう話が出てきたんだろうというふうに思うんですね。おそらくこの菊池郡のあたりというのも、そういう筑紫君氏の影響が及ぶエリアの中に収まってくるんじゃないかと、そういうふうに考えております。

吉村

ちょっといいですか。火葦北国造刑部靱部阿利斯登といっているわけで、大伴部は名のっていない

のです。半島に出かけていくのは、大伴金村による半島政策の中で、指示されて行くのですね。金村を「我が君」と呼んでいるので、ある種の君臣関係ができているわけです。でも、けっして大伴一族ではないです。刑部靫部ですから。このあたりが、どのようになっているのでしょうか。

この時期は、配下の豪族に指示して行かせることができますね。確か宣化紀に、那津官家を整備する際、各地の屯倉から米穀を運ばせますね。天皇だけではなく、蘇我氏らが配下の豪族を使って運ばせる記事があります。そういう意味で言うと、火葦北国造と大伴大連とが強い関係にあることは間違いない。氏族的にどういう関係なのか、もう一つワンクッションがほしいと思います。

佐藤

大伴連金村は、朝鮮半島との交渉に活躍するヤマト王権の有力豪族ですので、その過程で火葦北国造がそのもとで活躍しているということがある。また、日羅という、火葦北君の豪族は、百済王の外交顧問にまでなるということで、火葦北君が国際交流の中で活躍したということもあるので、大友氏の影響力があってもいいのかな、という気はするんですが。

大伴部をどう考えるか。実は関東地方にも大伴部はいっぱいいて、これが膳臣系の大伴部なのか大伴連系なのかということは議論になる。両説がありうる、という場合もあるのですけれども。一時期は、物部氏の前には、大友氏がヤマト王権の中で最も有力な氏族だったわけですので、そういう時代に影響力があってもいいのかな。また、膳臣氏も一時期、北陸の高句麗関係の記事の中で、膳臣氏が活躍する。大王から派遣されて活躍する記事が『日本書紀』にありますので、必ずしも食膳を担当するというだけではなくて、外交関係で活躍してもいいのかもしれません。いずれにしても、ヤマト王権を構成する有力な中央豪族の勢力がこの地に及んでいたということは間違いないのかなと。それを厳密にどう見ていくのかということかと思います。

ただ、今日のお話だと、亀田学さんの考古学的な検討で、少なくとも熊本県北部地域が筑紫君とかなり連携した関係にあるというお話と、溝口さんのお話がリンクしたというのは、大変おもしろいのではないかと思います。それをもうちょっと証明できる形で調査や研究が進むとまた違ってくるのかな、と思いました。

ほかにいかがでしょうか。古代史のことについて、考古学的な知見とつきあわせて、それをどう認識するか。今の、膳臣氏大伴部と見るか、大伴連氏の大伴部と見るかというのも、ちょっとした傍証から詰めていかなくてはならないわけですけれども。なかなか、古代史の方も苦しいし、考古学のほうも、モノだけでは言えない面もあるかと思います。ただ、今日のお話で一番おもしろかったのは、それがつながっていきそうな予感がする、というところでした。そういう点で村﨑さん、いかがでしょうか。

村﨑

磐井の勢力とつながる傍証がほかにないか、と言われると、繰り返しになりますが、江田船山古

墳の横口式家形石棺の形態が、石人山古墳の石棺と同系なんです。その石人山古墳の被葬者は、磐井の祖父にあたるという推定がなされていますので、そういう意味では、筑紫君の勢力が磐井の二代前の段階に、菊池川の下流域に厳然とあったということの証明になるのではないかと思います。

佐藤　今のお話で言うと、江田船山の主というのは、磐井、筑紫君とも密接な関係を持っていたけれども、一方で、典曹人として大王と非常に密接な関係を持っているわけですよね。そうすると、今日亀田修一さんからお話がありましたけれども、各豪族が、対外的に新羅と関係があるだけではなくて百済とも、高句麗とも、加那とも、それぞれ対外的に連携していた。有明海に面したところはどこもそうだと。それと同時に、ヤマト王権ともリンクするし、お隣の、九州を代表する強大な筑紫君ともリンクするということで。そういう意味で二元的に見てしまうとまずいのかなという気もしました。それは、吉村さんいかがでしょうか。

吉村　筑紫君磐井の時に、筑後国風土記は別ですが、日本書紀によると近江毛野が、新羅に侵略された任那の国を復興するため、筑紫に来ます。磐井が言うには、かつてお前と一緒に同じ器で食べたじゃないか、と言っていますね。つまり毛野とは同等でも、天皇とは同格とは言っていないんです。筑紫君磐井は、ヤマト王権に出仕していたのです。

そういう意味では、江田船山古墳出土の大刀銘にある典曹人も、天皇に仕え奉る関係です。対等な関係ではありません。磐井も、毛野に対しては対等であるので、命令するのはしかられ、というわけです。毛野の方は、天皇の命令で筑紫に来るわけです。かつては同等であっても、天皇の命令を代言するわけだから、上下関係になります。そして、戦いが始まるというように展開します。

こうしたことは、その通りではないかと思います。たとえば、前方後円墳を造る際も、天皇とは対等の関係ではないでしょう。「磐井の戦争」と呼ぶ人もいますが、戦争は対等だといえますが、磐井は中央に対して反乱の意志を持っていたでしょう。毛野が将軍として筑紫に来るのは、天皇の代理でしょう。

五世紀後半になると、典曹人とか杖刀人として中央に出仕します。僕は、これらを「人制（ひとせい）」と呼んでいます。その後、部民制にかわりますが、もう少し隷属度が強まっているのではないでしょうか。ヤマト王権における分業の一部を氏の名として名のるのが「部（べ）」ですから。そこから、後の律令制の下級官人、品部・雑戸になるような人たちが出てきます。部は、欽明朝には存在しています。

佐藤　一点、吉村さんにお尋ねしたいのですが、磐井の戦いの時に、磐井は、高句麗、百済、新羅、加耶からの外交使節を、瀬戸内海から向こうに行かさないで、自分のところで全部受け止めてしまったと日本書紀には書いてあります。

佐藤 信

吉村 武彦

清口 優樹

吉村

そうですね。新羅からの働きかけで、賄賂を受け取っています。五、六世紀においては、半島諸国と中央との外交関係があっても、地方豪族が半島とのルートを持っていてもおかしくないですね。中国は別にしまして。そうでないと、たとえば日本海側で半島産のいろんな遺物が出てくるのは理解しづらいですね。すべて中央のヤマトを介して入ってくるとも、考えにくい。考古学的には。

亀田（修）

まさに、おっしゃっている通りだと思います。特に、岡山は五世紀前半に造山古墳が築かれます。一応、日本の前方後円墳の中ではナンバー4の大きさで、造られた時代に限ると、2番目の大きさになります。その造山の周辺には、実は熊本の宇土半島の石棺が行っているんですよね（造山古墳前方部におかれた石棺）。その横に千足古墳があるんですけれども、そこの文様を描いている石は、天草の砂岩であるという分析結果も出ています。それから石室の構造も宇土半島の付け根のものとよく似ています。

その中でよく言っていますのは、造山古墳の前方後円墳という形は当然ヤマトの王権との関わりの中で存在するということです。一方で、熊本との関係をすべて王権の下での動きと見るのか、というとそうではなくて、やっぱり熊本とそれなりの独自の関係を持っているのではないでしょうか。

さらに、造山古墳のすぐ横に榊山古墳という、馬形帯飾とか、朝鮮半島と関わるものをたくさん持っている古墳があります。四世紀の終わりから五世紀初めの頃の、朝鮮半島南部地域の混乱にヤマトの王権が関与し、地方の豪族たちも関与したと思っています。吉備もその一連の動きの中で朝鮮半島

亀田 修一

村崎 孝宏

亀田 学

に行き、加耶の人たちを受け入れたと思っています。このような動きは北部九州でもあったと思います。

ただ、岡山には造山古墳、作山古墳、両宮山古墳といって、二〇〇mを超える巨大な前方後円墳が3つあるんですが、ちょうどその後くらいの、四六三年に、吉備の反乱伝承が記録に出てきます。これにつきましては、やはり吉備は力を持ち過ぎたので、王権側から睨まれたのではないかと思っています。そうして王権に抑え込まれていって、六世紀半ばの白猪屯倉・児島屯倉設置に至ると思っています。同じことが筑紫君磐井にも起こったのではないかと考えています。つまり五世紀の後半段階にようやくヤマト王権は、吉備まではかなり抑え込める状況になり、六世紀の前半になる頃までは、筑紫までは完全に抑え込めてない状況だったんじゃないかと思っています。

佐藤

九州でも、ヤマト王権とほとんど結び付くと言えば、宗像氏もそうだと思います。そういう勢力もいるし、ヤマト王権と対抗的な立場に立つものもいて、それを制圧しながら集権的な体制が営まれていったということかな、と私も思います。

その場合、各地方豪族の在り方というのは一元的ではない、多元的な、多方向との交流の中で、それぞれ、自らの統ぶるところを確実に把握するということを目指していた。これは江田船山の大刀銘文です。あとは、子孫の繁栄とか、そういう目的が書いてあるわけです。大王権力との関係とか、あるいは隣の強力な勢力との関係とか、あるいは朝鮮半島との関係とか、多元的に見なくてはいけないのではということが、今のお話を伺っていてしました。

それでは三番目のテーマで、「鞠智城と肥後の地域社会」ということを最後に考えたいと思います。今回のテーマは「地域社会からさぐる古代山城・鞠智城」ということでありまして、私、今日はご報告を伺って本当におもしろく、いろいろなことを学ばせていただきました。ただ、まとめとしては、やはり「多元的です」ということで、すっきりとした結論にはなかなかいけません。これからは、もう少しこういうところを抑えたほうがいい、という点、あるいは今日、吉村さんから豪族居館はなかったのか、というお話があったわけです。そういう意味で言うと、地域社会と鞠智城の関係について、こういうところがもっと分かってくれば全体的な姿が見えてくるのではないか、ということについてお聞かせください。まずは亀田学さん、お願いします。

亀田（学）

今日発表をさせていただいて、溝口先生の文献からの地域史と整合することがあるということを指摘いただきました。それが成果だと思います。発表するにあたっては、近隣の集落とかというのを調べたけどなかなかよく分からないこともありました。古墳時代も含め、特に七世紀後半から八世紀の中くらいまでの様相がちょっと分かりにくいので、過去に調査したものもあるので、改めてご報告させていただければと思います。

佐藤

ちょっと質問なのですが、鞠智城の南の台台地に、私はそれくらいの時代の集落とか、あるいは、周辺の斜面に横穴があると思っていたのですが、ちょっとずれる、ということでしょうか。

亀田（学）

横穴はだいたい七世紀中ごろまではいくんですが、それ以降はどうなのかなというところもあります。集落の消長表もあったんですけど、八世紀後半くらいの遺構では、土器は少し出土しているのですが、それ以前の遺構があまり見つかっていないんです。一部、菊池川下流域に小田宮の前遺跡とか、いろんな遺跡はあるんですけども。調査例や土器などを細かく見ていかないといけないというふうに思っています。

佐藤

土器がたくさん出土する鞠智城の造営期も含めて、その時代に、周辺の人々がどこに住んでいたかは、まだなかなか分かっていないのですか。

亀田（学）

鞠智城の時代の集落というか、たくさん出るところはほとんどなくて。立願寺廃寺とかはもちろん重なってくると思うんですけど、他にあまりいい例がないんですよね。それと、六世紀後半に集落がありますが、それを支える時期の周辺の集落は分からない状況です。クニの成立ということを考えると古墳を含めて七世紀代の遺跡がわかればいいと考えています。古墳も、横穴式石室や横穴群だと、遺物が出土するのは限られてくるので、時期を推定するのは難しいです。佐藤先生がおっしゃったように、八世紀まで使われている横穴もあるとは思うんですが、それが具体的にどの地域かというのはなかなか分からないところがあります。今後の鞠智城の中の調査もそうなんですけど、もちろん、鞠智城の時代に墓がないというわけじゃないと思いますので、周辺の横穴墓なども、遺物がなければ形態的に分類できるのか、再利用した痕跡が残っているのかも含めて考えなければと思います。

佐藤

鞠智城から西南にかけて条里制の区画がずいぶん展開していますが、あれも、鞠智城が機能している時と並行していると私は思っていたのですけれども、そのへんもあまり分かっていない？

亀田（学）

ほとんど調査をしていませんので、条里の方向が一部変わっているところはあるので時期差はもちろんあると思うんですけれども。水田の調査が、菊池川下流域の新玉名駅の周辺で一部あるくらいです。今後どこまで低湿地のところで開発できたか、いつの時代なのか。やっぱり八世紀後半くらいには画期があるので、それ以前がどうだったのかが課題です。また水田がどこまで広がるのか、丘陵のすぐ下の部分については米は作られていると思うんですけれども、条里の中央部というか、一番低湿地の部分にどこまで開発されたかというのは、なかなか現状では難しいと考えています。

佐藤

次に、村崎さん。

村崎

鞠智城の築城に関わった集落がどこにあるのかという問題になると、なかなか難しい部分があります。先ほどから話に出ているような遺跡が、もっとも南側、大地の裾部にありますので可能性としては高いんだろうと思うんです。ただ、うてな遺跡の舌状に伸びた台地の縁を、一万五千平米ほど、圃場整備で調査をしています。その調査区の中ほどで道路跡が見つかっていますが、それよりも東側に関してはほぼ分からないという状態です。ですから、そこに集落がさらに広がっているのかどうかということも今後の課題でしょうし、台地の裾にある瀬戸口横穴群に関しても、現状、調査が行われた部分だけでいくと、新しいものでも七世紀の中ごろまでいかないくらいだろうと思うんですね。前半くらいで終わってしまう。ですから、築城の時期まで少し届かない。ただ瀬戸口横穴群をすべて掘りつくしているわけではないので、今後さらに見つかるもの、あるいは消滅してしまったものの中にそういうものがないかどうか、というのが一つの課題になってくるのかな、と考えています。

ただ、そういうところだけではなくて、鞠智城そのものの築城の技術を、鬼ノ城の調査事例の中で、大陸系の技術がどんどん改変をされていきながら見えてくる、ということはすごく参考になると思います。鞠智城の場合、築城時期は分からないんですが、繕治の記事は『続日本紀』に出てきます。その繕治した段階の技術って何だろう、その前の段階の技術とどう違うのか。さらにその後三〇〇年続く中でどういうふうに改変されていくのか、というのがなかなか見えてこない。建造物そのものの変遷としては、こういうふうに存在しますよ、というのが大まかには示されていますが、城全体の中での土塁だとか門だとか、そういう部分での技術の変遷というのはなかなか追えていない。残りが悪い、というのも一つはあるのかもしれませんが、今後、土塁線の中で、修復の技術、痕跡が見つからないか、そういうところも含めてしっかりと見ていけたらなと思っています。そうすることで、他の古代山城との比較がより明確にできていくんじゃないかなと思いますので、その点は今後の課題かなと思います。

佐藤

ありがとうございました。では、亀田修一さん。

亀田（修）

今回の場合、地域社会との関係ですが、亀田学さんもおっしゃっていましたが、これまで放っていた資料の再検討をやっていただくと、特に遺物で、当時は気が付かなかったけれど、改めて見直すとかなり興味深いものがあるんじゃないか、ということはあろうかと思います。

あとは年代観の問題です。例えば、三〇年前に掘った時はこう思っていたけど、今なら年代がちょっとあがるとか下がるとか、そういうことも当然ございます。それから、遺構の見方に関しても、当

時は気付かなかったけどこの建物はつながるんじゃないかとか。これまでの成果の再検討は必要かと思います。それから、もし新しく掘れるのなら、鞠智城跡周辺の関連しそうな横穴墓やお寺の横など、機会があって、そのような意識をもって調査研究していただくと、何か新しく見えてくるのかなという気はいたしております。

それともう一つ、これは村崎さんもおっしゃっていますが、僕は鞠智城に関してもまだまだ調査は足りないと思います。分からないことが多いと思っています。今日見せていただいた部分で、石が並んでいて、版築の仕方に関しても上と下が違っていましたよね。ああいうのもちゃんと出ていますので、やはり、地味なことなんですけどきちっと調査をやっていけば、また新しい情報が提示できるんじゃないかと思っています。特に貯水施設をもう一度掘ってほしい。新たな文字史料が出たら、もう少し違った話ができると思うんです。ぜひとも。土手の作り方に関しましても、おそらく敷粗朶技法などが入っている可能性は十分あると思います。そういうのも意図的に掘られて、探し出すということは必要なのかなと思います。門も当然大事ですし、土塁もそうなんですけれども、やっぱりポイントとなるところはぜひとも今後視野に入れて調査してほしいと思います。それで年代に関わるものが出るとか、そういうことになれば、今、熊本県の方々が期待されている話も動くんだと、僕は思っています。そういう意味で、ぜひとも池の中をお願いします。

佐藤

貯水池からは、木簡とか、百済の金銅仏がこれまでも出土しているということで。文字史料が出てくればずいぶん変わってくるかなと思います。では吉村さんお願いします。

吉村

朝鮮式山城を考えると、どうしても白村江の敗戦を起点として考えていました。そうすると、鞠智城の場合は、他の山城が廃止されても残るわけですね。それが一体どういうことなのか、と考え直しました。もともと日本列島では、夷狄や蕃国に対してどういう政策を持っていたのか、ということです。そこで原理原則というか、律令法でどうなっているのか。律令法にいう「辺要」という概念で、整理し直したのです。

また、九州国立博物館の小嶋篤さんが、『大宰府の軍備に関する考古学的研究』（九州国立博物館）を発表されています。読みますと、七世紀後半の時期なのですが、九州北部には東北地方の製鉄工房と共通するような遺跡があると指摘されています。つまり東北と北部九州で、製鉄工房が同じだという。

小嶋説によれば、防御対策ということになると思いますが、蝦夷に対して武器製作と関連する製鉄工房の整備が必要だということでしょう。そうすると、九州北部でも蝦夷対策と同じように、蕃国や隼人対策において、東北と同じ製鉄工房が造られたことになります。製鉄工房が共通することを明らかにされたことは、蕃国・隼人対策において重要なことです。七世紀後半という指摘で、あまり細か

い時期は区分されていませんが、もし成立すれば、蕃国・夷狄に対して共通の政策となります。

七世紀半ばの大化改新の時は、史料の残り方の問題があって、東北では日本海側の磐舟柵と淳足柵の記事はありますが、太平洋側は出てこない。しかしながら、考古学の発掘調査で、郡山遺跡が出てきています。九州の場合も何も残っていませんが、残っていないということは何もなかったということでしょうか。蝦夷の場合は、『書紀』に「東国国司の詔」がありまして、対蝦夷策は武器収公との関係で蝦夷のことが少しわかります。

井上光貞さんは、東国に越は入っていないという考えです。しかし、越が東国でなくても、『書紀』には淳足柵や磐舟柵の記述があります。それでは、九州の筑紫ではどうなのか、ということが気になりました。九州では、筑紫大宰のことが『書紀』孝徳紀に出てきます。

大化改新時から、律令制的政策をやっているとは考えられませんが、やはり七世紀半ばになると、対蝦夷策や隼人策、あるいは大陸や半島との外交政策が出されてもおかしくないと思います。孝徳朝の施策が、まだよく分からないということは事実です。

さらに西日本防衛ラインは、八世紀初めになくなります。亀田修一さんは、山城が全部完成したとは限らないと指摘されています。史料で山城を築くと書いてあれば、完成したと思い込むことが多いのですが、完成していなくてもおかしくありません。

ということは、鞠智城が残っているということは、それなりの理由があるわけです。しかも、性格が変わることもありえます。そのため隼人研究をやることにしました。隼人関係の史料は、令集解や日本書紀・続日本紀のデータベースを調べますと、ある程度わかります。それらを見ますと、皆さんやられていますが、確かに隼人政策に変化があることがわかりました。ある時期に変わったということですね。

また、鞠智城は誰が維持するのかということを考えると、兵士や防人の参加が問題になります。ただし、意外にも防人や兵士の制度自体の研究はされていますが、地域に根ざした研究は少ないのです。確かに難しい問題です。鞠智城では、兵士がどこまで関係しているのか、史料がないので何とも言いようがありません。

ただし、軍防令を見る限り、兵士がいないと城柵関係の維持はできないですね。そういう意味では、兵士とか防人も地域に根ざした研究が必要です。肥後国では益城軍団しか史料はありませんが。鞠智城では、池の遺構を調査すると、新史料が出てくるかもしれません。何か新しい文字史料が欲しいですね。

さらにもう一つ。鞠智城を造る問題です。「古代山城築城の技術的基礎」とレジュメに書きましたが、百済から技術者が来ないと築城できないということはあると思いますが、それまでの古墳を造る技術とか、あるいは豪族居館にともなう技術もあるわけですね。そういう技術を前提にして、渡来系の技術者が指導するということになると思います。そのあたりも注意したいんです。

考古学は素人ですが、朝鮮式山城の水門などを見ますと、古墳との共通した技術も分かります。そういう意味では、ぜひ豪族居館も見つけていただきたい。国造居館になると、発見はもっと難しいでしょう。群馬では、三ツ寺Ⅰ遺跡が復元されています。そういうところを見ますと、政治的拠点との関係のほか、水の施設など共通する要素もあるのではないでしょうか。

古代山城の築城で、百済からの技術はどの部分に大きな役割があり、そうして山城ができたとか、具体的に述べてもらえば分かりやすいですね。すでに解明されているのかもしれませんが。

今日のお話を聞けば、できましたら肥後国だけではなく、肥前と肥後国を一緒に研究した方が、両国の共通性と差異がよく分かるかと思います。さらに築後の方もやっていただければおもしろい。ないものねだりが多くなりました。

佐藤

ありがとうございました。それでは、溝口さんお願いします。

溝口

地域の人々との関わりというのを考えてみたわけですけれども、やはり、秦人のことが気になっていて。秦氏や秦人というのは、例えば茨田堤を作るのに使われたとか、葛野大堰を作ったとか、あるいは、恭仁宮の垣を作ったとか、そういう話は伝承も含めてあるので、そういう関わりからすると、秦人が果たした役割もあるのかなという気がしています。何か考古学的に確かめられるとおもしろいなと思いました。

亀田修一さんのお話でも、鬼ノ城のほうは、どちらかというと漢人の分布が濃密な地域なんだけれども、秦も関わっていそうな感じがする、ということでしたので、別に秦に限らなくてもいいのかもしれませんけれども、考古学的に確かめられたらおもしろいな、というのが一つ。

それから、私の方法としては、分布氏族を復原して、なぜそういう氏族がそこにいるのか、その事情をひも解いていくというスタイルでやってみたわけですけれども、とにかく、分かる氏族が少ないというのが、なかなか大変なところです。考古学的な調査研究の成果を見ると、古墳の動態なんかはかなり詳しく分かっているみたいなので、もう少し氏族のあり方が分かってくると突き合せることができて、おもしろくなるのかなと思います。かと言って、文献史料が増えるとも思いませんけども、やはり出土資料、特に墨書土器なんかは見つかる可能性があるんじゃないかという気がしていますので、期待しています。

佐藤

お隣の玉名郡では、今は失われているけれど、郡司層の墓誌が出土していましたよね。今後の文字資料に期待したいな、と思います。

ありがとうございました。今日、皆さんのご報告とお話を承りながら、鞠智城の調査研究には、これから多くの成果を上げ得るテーマが、まだ前に広がっているなと思いました。特に今日のように、

考古学と古代史の両面から歴史的な意義づけに迫れるというのは、すごくいいテーマだと思いました。

また、今日、こういう調査もしていただきたいとか、ここも掘ってほしいという話もあったわけでして、あるいは、これまでの調査成果を再整理するということも確かに大きな課題です。こういった調査研究の豊かな課題は、前にたくさん広がっているので、それを今後とも一つずつ抑えていって、鞠智城の価値を明らかにするということが、鞠智城の価値を高めることにつながるのではないかと思います。

今後ともぜひ、熊本県では鞠智城の調査研究も積極的に進めていただければと思いました。

本日はお忙しいところ、また、コロナの状況のもとでこのような形になりましたけれども、お集まりいただいて大変有益な話をしていただきまして、どうもありがとうございました。

駒智城跡宮野礎石群（南から）

駒智城跡出土銅造菩薩立像

表1　菊池川流域古墳時代集落消長表

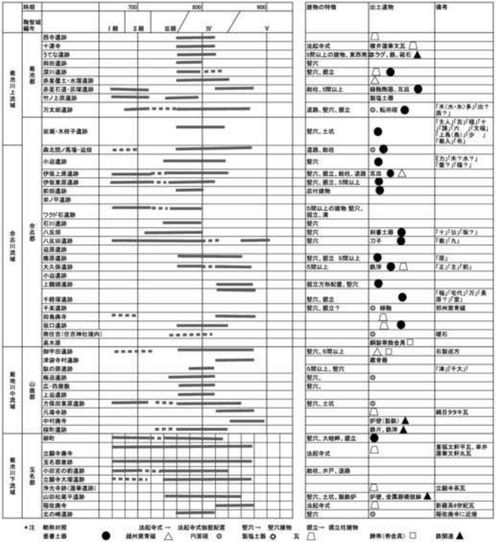


表2　菊池川流域古代集落消長表

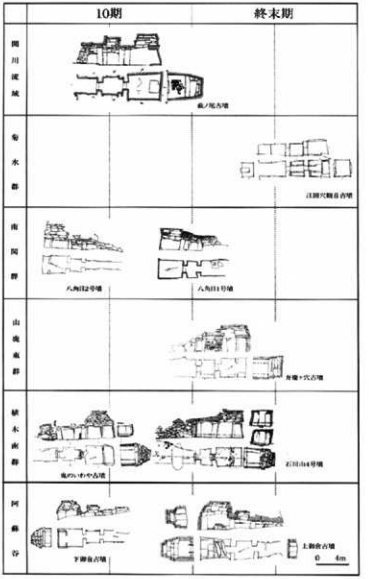


図11　切石造複室横穴式石室変遷図（高木恭二2012）

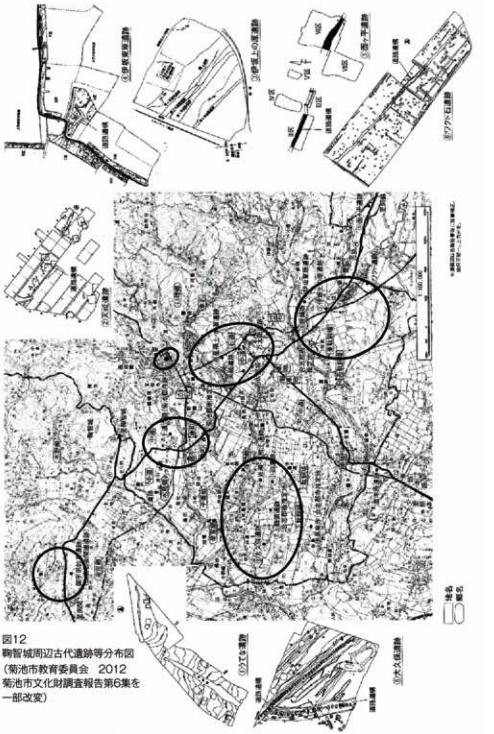


図12
駒智城周辺古代遺跡等分布図
（菊池市教育委員会　2012
菊池市文化財調査報告第6集を
一部改変）

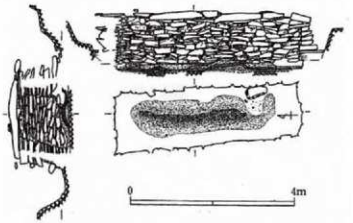


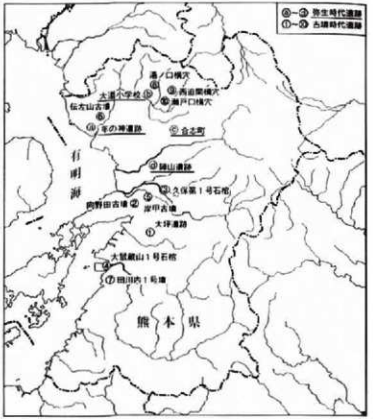
図8　山鹿市竜王山古墳竪穴式石室

第71図　中・北部九州地域における垂飾付耳飾の分布（統合Ⅲ期）

1：半田・宮の上古墳　2：舞内古墳　3：日拝塚古墳　4：長畑1号墳　5：立山田1号墳　6：大坊古墳　7：江田船山古墳（造墓段階）　8：物見櫓古墳

○：大加耶系　●：百済系　▲：新羅系

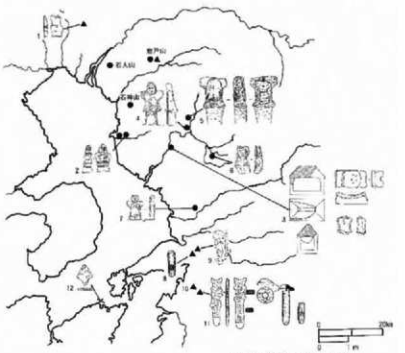
図9　中・北部九州地域における垂飾付耳飾の分布（6世紀前半）（高田貫太　2014）



[弥生時代]
⑧年の神（中期）ゴホウラ7
⑨大道小学校校庭（中期）イモガイ2
⑩合志町（中期）ゴホウラ1
⑫陣山（後期）ゴホウラ1

[古墳時代]
①大坪（弥生時代終末～古墳初頭）ゴホウラ4
②向野田古墳（4世紀末～5世紀初頭）イモガイ10以上
③久保遺跡第1号石棺（5世紀前葉）イモガイ1～2
④大鼠蔵山1号石棺（5世紀か）サラサバテイ1
⑤岸甲古墳（5世紀か）イモガイ4
⑥伝左山古墳（5世紀後葉～末）ゴホウラ3
⑦田川内1号墳（6世紀前葉～中ごろ）イモガイ5
⑧湯ノ口横穴（6世紀後葉）イモガイ2
⑨西直間横穴（6世紀末）イモガイ1か
⑩瀬戸口横穴（6世紀中ごろ～8世紀前葉）イモガイ1

図10　南海産貝製品出土分布図（木下尚子　2003）



No.	名称	所在地	墳丘形態	埋葬施設	石製品種別	文献
1	原古墳	佐賀県唐津市	前方後円墳	竪穴式石室	碧玉製石釧	(1)
2	三雲南小路	福岡県糸島	方形周溝	甕棺	貝輪	(2)
3	井原鑓溝	福岡県糸島市井原	不明	甕棺	貝輪・車輪石・鍬形石	(3)
4	平原1号墓	福岡県糸島	方形周溝	割竹式木棺	貝輪	(4)
5	二塚古墳	福岡県	円	竪穴式石室	石製腕飾	(5)
6	立山2号	福岡県糸島	円	甕棺	貝輪	(6)
7	釜ノ尾古墳	福岡県糸島市	前方後円	竪穴式石室	車輪石・鍬形石	(7)
8	七ツ塚古墳	福岡県糸島	円	竪穴系横口式石室	鍬形石	(8)
9	前原1号墓	福岡県糸島	円	竪穴系横口式石室	鍬形石	(9)
10	五反田古墳	福岡県糸島市	円	甕棺	車輪石	(10)
11	銚子塚古墳	福岡県糸島市	前方後円	竪穴式石室	車輪石・鍬形石	(11)
12	向出山1号	福岡県糸島	円	竪穴式石室	車輪石	(12)
A	小郡	福岡県小郡	円	甕棺	貝輪	(A)
B	高塚古墳	福岡県	円	竪穴式石室	碧玉製腕飾	(B)
C	今城古墳	大阪府高槻市	前方後円	竪穴式石室	石製腕飾	(C)

図6　肥前肥後の石製品分布図　（高木恭二　1994　岩戸山歴史資料館）

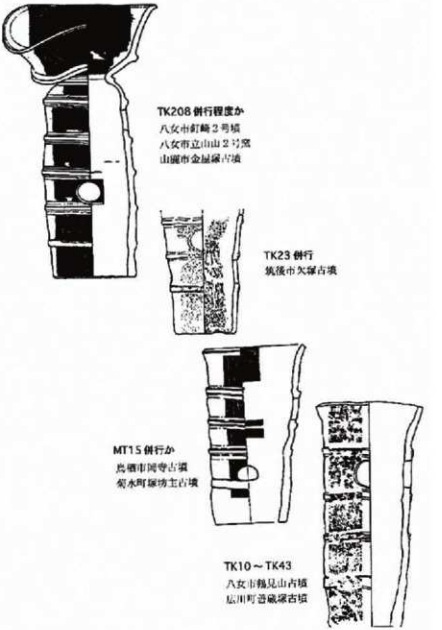


図7　押圧技法を有する円筒埴輪の編年　（岸本圭　2000　九州前方墳研究会）

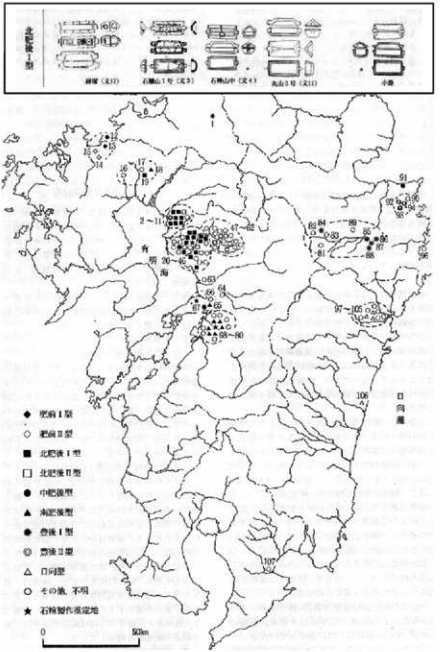


図4　九州の舟形石棺分布図　（高木恭二 1994 古代學協会）

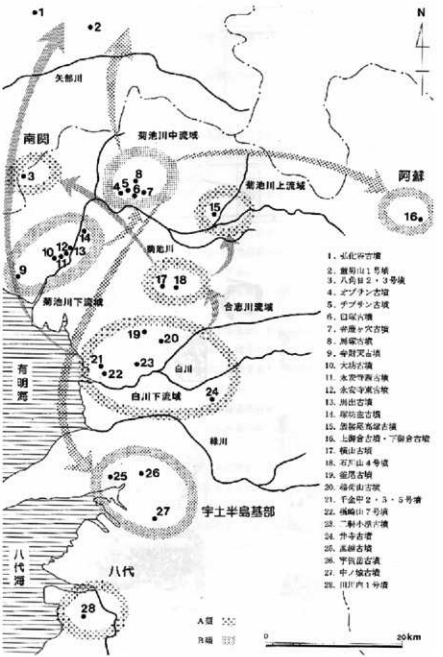


図5　肥後　主要な石屋形を有する古墳分布図　（宇野慎敏 2010）

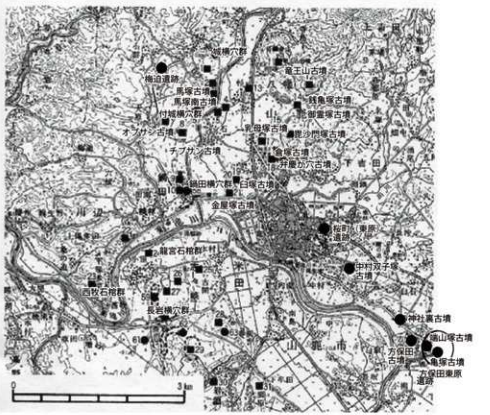


図3　山鹿周辺古墳分布図（山鹿東部の古墳群は未記入）　■古墳　●横穴
（玉名市 2005）

図2　玉名市条理図（玉名市2005第9図改変）

1 玉名郡家　2 玉名郡寺　3 玉名郡倉　4 疋野神社　5 稲荷山古墳墳頂部(立願寺瓦出土地)
6 蓮花遺跡　7 磐座(金見羅山)　8 大漁　9 日置氏の最初の拠点
10 柳町・両迫間日渡遺跡-玉名平野条里跡　11 上小田宮の前遺跡　12 山田松尾平遺跡
13 北の崎遺跡　14 稲佐津留遺跡　15 稲佐廃寺　16 城ヶ辻古墳群　17 寺田古墳群
18 保田地窯跡群　19 蛇ケ谷製鉄跡　20 立願寺大塚遺跡　21 大坊古墳　22 永安寺東・西古墳
23 馬出古墳　24 小路古墳　25 松林寺山古墳　26 石貫ナギノ横穴群　27 石貫穴観音横穴群
28 三ツ川六反製鉄跡　29 広福寺裏製鉄跡
30 清原古墳群(江田船山・京塚・虚空蔵塚・塚坊主古墳)　31 姫塚古墳　32 前田古墳
33 宮の後古墳　34 真福寺東古墳　35 富尾原横穴群A　36 富尾浦谷横穴群　37 田崎横穴群

（主要参考文献）
九州前方後円墳研究会「九州における首長墓系譜の再検討」2010
九州前方後円墳研究会「集落と古墳の動態Ⅰ」2018
九州前方後円墳研究会「九州の墳輪その変遷と地域性」2000
九州前方後円墳研究会「九州の横穴墓と地下式横穴」2001
国立歴史民俗博物館「国立歴史民俗博物館研究報告 173」2012
熊本古墳研究会「熊本古墳研究第３号」2010
松本　雅明「肥後の国府と古代寺院跡の研究」弘生書林　1987
山鹿市　「山鹿市史」1985　　西合志市「西合志町史資料編」　西合志町史　通史編」1995
西合志町菊鹿町「鹿本町史」鹿本町鹿央町「鹿央町史」鹿央町
山口　健剛「「６世紀前半の大量の埴輪 -中村双子塚古墳」　「季刊考古学第 84号」雄山閣　2003
玉名市　「玉名郡誌」　玉名市歴史資料修正第十二集　1994
古代学協会「古代文化第 46巻第５号」1994
高田　貫太「古墳時代の日朝関係」2014
「先人の暮らしと世界観」熊本歴史叢書２　古代下　熊本日日新聞社　2003
岩戸山歴史資料館　「石人・石馬」1994
「藤巻遺跡　第１次・第２次調査」菊池市教育委員会　2009
「万太郎遺跡　森北院ノ馬場・迫畑遺跡」菊池市教育委員会　2012
＊各遺跡の概要については、それぞれの教育委員会の報告書による。謝愛させていただいた。

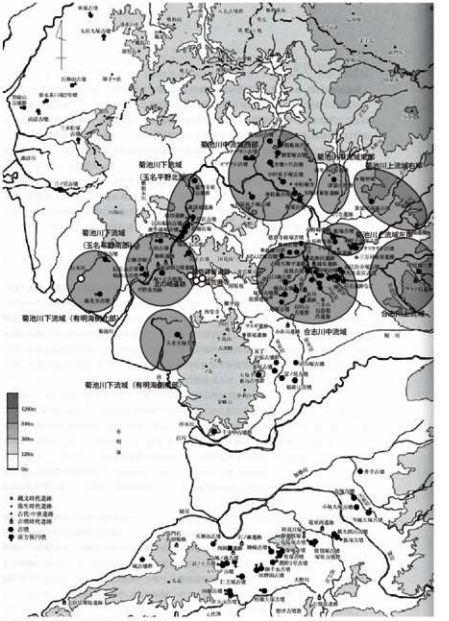


図1　菊池川流域を中心とした遺跡分布図
（国立歴史民俗博物館研究報告第173集第23図　2012を改変）

鞠智城跡の東南東の裳掛尾の竹ノ上原遺跡では、8世紀後葉以前の竪穴建物が5軒以上検出されている。また、7世紀後半にさかのぼる資料も表採されており、土器の状況から見て、その時期の集落が存在する。特殊な遺物としては、製塩土器が出土しており、塩が運ばれていたことが判明した。

うてな台地のうてな遺跡では、鍛石・鉄製品・スラグ・輪（ふいご）の羽口が出土している。小岱山製鉄群が9世紀以降であることを考えるとそれ以前から製鉄が行われたと考えられる。

合志川流域では、上鍋頭遺跡は、9世紀中葉を中心とする掘立柱建物群である。「コ」の字配置もしくは「ロ」の字の竪もの配置、5間以上の庇を持つ建物が存在する。遺物は、「西正」「大正」「生」「坂上」等の墨書土器も多数出土しており、官衙関連遺跡と考えられる。旧合志郡にあたり、山本郡ができる時に移された官衙と考えられる。それ以前は、東側5km程の南住吉遺跡にあったと考えられている。

南東へ1.6km離れた田島廃寺は、法起寺式配置と推定されていて、単弁八弁軒丸瓦偏行唐草文軒瓦で福岡県芦屋町浜口廃寺の瓦と同范品である可能性が指摘されている。9世紀前半から中葉の創建と考えられる。3.6kmの高木原遺跡では、帯飾金具が出土している。3.5～5km南東には、千束遺跡、千軒塚遺跡等9世紀前葉から中葉の集落が営まれている。千軒塚遺跡からは、多量の墨書土器が出土している。（「福　」「宅代？」「万」「長原？」「室」）　合志川上流域の伊坂上原遺跡では8世紀後半を中心とする竪穴建物や間以上の掘柱建物が検出されている。8世紀中葉以前の建物もありそうである。遺跡状遺構からは、7世紀後半の須恵器や金属器模倣杯や8世紀中葉以前の土器も量的に出土しており、墨書土器「馬　」等も出土していることから、伝路等に関係する施設があった可能性もある。両面庇の2間×3間の建物がある。

合志川中流域の大久保遺跡では、2間×5間の掘柱掘立柱建物が出土しており、9世紀中葉を主体とするが、8世紀中葉から後葉の遺物も含まれる。「正」「主」「前」等の墨書土器が含まれる。溝からであるが、鉄滓や布目瓦が出土している。交通路に関係する遺跡と考えられる。

（菊池川流域の古代の集落・官衙関連遺跡・寺跡の分布から）

玉名郡衙は、玉名平野からの低湿地から台地にあがるところの古墳時代の集落より台地にあがったところである。7世紀後半から9世紀にかけて立願寺廃寺ともに営まれた菊池川流域の中心官衙であったと考えられる。鉄や須恵器生産や有明海から入ってくる物資により、繁栄していたと考えられる。

中流域の中村廃寺には製鉄関連遺物があり、周辺の台地にかけて官衙関連遺跡が展開していたと考えられる。また、交通路には、御宇田遺跡群等に見られるように整然とした配置を持つ官衙関連遺跡も上流にかけて展開していったと考えられる。

7世紀後半から8世紀中葉にかけての様相は集落を含めて不明な点が多いが、8世紀後半以降の交通路周辺に分布する遺跡の増加は、官衙関連遺跡の整備と連動すると考え、それに伴って上流域の鞠智城の礎石建物群が整備される時期とすれば、地理的に見て、山鹿・菊池・合志を含めた官衙関連遺跡と連動する動きと考えたい。その背景には、鉄・塩・石材・米・特産品の交易・貯蔵等を背景としていた可能性がある。鞠智城周辺にも砂鉄が採集できる区域が近くにあり、石材は周辺から採取できるし、塩は近くの竹の上原遺跡で製塩土器も見つかっており、鞠智城跡からも古墳時代の製塩土器片も出土していることから伺える。

おわりに

古墳時代の石棺や石屋形や装飾古墳の分布範囲や墳輪の形式の分布等を見ていると菊池川上流域と中流域菊池川上流が中心だが、主な分布範囲の東と南に当たると見てよい。

（大宰府や）筑後地域との連携、塩・鉄・凝灰岩や花崗岩等の石材・米等が交易する範囲として、律令政府の勢力が直接及ぶ東・南の境界としてそれより東側の阿蘇地域や日田地域、合志川流域の白川流域及び八代海沿岸地域等南側の抑えとして鞠智城は機能していたと考えられまいか。その背景は古墳時代から見られると考えられる。

また、鞠智城は菊池郡に属していたが、交通路の要衝に墨書土器等が出土する遺跡や5間以上の掘立柱建物や庇を持つ建物の存在等を考えると要所要所に主要な古代の遺跡が分布して、ネットワークを組んでいたと考えたい。さらに菊池川流域の古墳の分布や官衙の状況を見ても下流域の玉名郡衙や菊池郡から分岐した合志郡衙、山本郡衙等と連携し、その背後に大和政権が整備した鞠智城が存在する状況と考えたい。

白村江の戦い以前に、九州中部以南を視野に筑紫（那津）官家ないし大宰府の出先として交通・交易のルート上の要衝であり、古墳時代以来の交易・文化交流地点の東・南の端である地域の首長の奇後の高所の地点に大和政権直轄の施設として備えた官衙施設として鞠智城が築城されたとは考えられまいか。菊鹿盆地を見渡せ、菊池川水系の水運を利用できる場所を押さえたと考えられる。途中に、古代山城の機能を加えて、官衙機能は9世紀中葉までは、機能し、菊池郡倉としては、さらに継続されたと考えられる。

土していることから小規模な集落が点在して広がって、ネットワークを構築していったと考えられる。古代に続く交通路に近接する集落周辺に後期の集落が営まれている様子がうかがえる。

後期の墳輪については、菊池川中流域の金屋塚古墳に押圧技法が見られ、筑後平野の古墳にも押圧技法が採用されていることや家形の石屋形が菊池川流域から筑後平野に多く分布していること、銭亀塚古墳等北の部九州系の初期横穴式室や墾穴系横口式石室が玉名平野や菊底盆地に分布することは、北部九州もしくは有明海ルートでの朝鮮半島からの影響等が窺える。

菊池川中流域の横穴式石室と横穴の変遷は連動し、複室の横穴も見られる。

菊池川上流域の伝左山古墳等で始まった複室墳は、菊池川中流域で複室の面積が増大し、他地域へ複室墳が波及したと考えられ、中流域はその拠点となったと考えられる。さらに、菊池川中流域に顕著な盾や靫等・弓・剣、刀子等の装飾古墳に描かれた武具と楽器の琴、ゴンドラの舟、馬、人等は葬送儀礼を考える上でも重要だが、北部九州等他地域に影響を与えたものと考えられ、文化の起点となっていたと考えられる。

菊池川上流域は、木柑子フタツカサンや木柑子高塚古墳、袈娑尾高塚古墳等が6世紀前葉・中葉に営まれるが、墳輪を持たない可能性が高く、石屋形も形式も異なる等在地の菊池川中・下流勢力よりも規制をうけた勢力であり、それ以降装飾古墳や切石積みの石室を持てなかった勢力ではないかと考える。切石積みの石室が阿蘇地域に存在することも併せて、交通路の交差点で交易の要衝の地域と考えられる。そのことは、木柑子フタツカサン古墳は、北の石人、南の武器・祭祀具の中間に位置するあり方を呈し、木柑子高塚古墳と日田市天満2号墳は周溝が2重に回り、石製表飾（石人）を持つという類似性からも窺えよう。

こうした勢力に影響を受けながら、輯智城の後期の集落は営まれていると考え、終末期の切石積石室は築造できなかったが、後期から終末期にかけての横穴式石室や横穴を築造した集団が輯智城周辺に居住していたことが窺える。

4.菊池川流域の古代の集落・官衙関連遺跡・寺跡(図12・3、表2)

菊池川下流域の立願寺廃寺は7世紀後半から建立で法起寺式伽藍配置と推定されている。軒瓦は、単弁の蓮華文に重弧文のセットである。鴟尾が伴う。瓦は6型式に分類され、平安時代前期まで継続する。土器からも同様である。鬼面文瓦も持つ。8世紀代の軒瓦は老司式軒瓦で、鬼瓦も大宰府式に類似する。郡家跡も調査されており、3間×4間総柱の掘立柱建物を検出し、漆に関わる遺構も検出されている。

稲荷山古墳の墳丘からも単弁蓮華文等立願寺系瓦が出土している。

菊池川下流域は小岱山の製鉄跡、三ノ岳製鉄遺跡群等近くにあり、鉄は、重要な資源である。

菊池川下流に流れ込む木の葉川流域では、稲荷廃寺がある。塔・金堂・中門等の配置（法起寺式伽藍配置）がわかり、塔心礎が残存する。奈良時代末期から平安時代で新羅系（立願寺廃寺終末期）の瓦が使用されている。9世紀後半を中心とする時期と考えられる。

菊池川下流域では、玉名平野の低湿地に囲まれた微高地上に、古墳時代から継続して柳町遺跡・両迫間日渡遺跡・玉名平野条里跡等に集落が営まれる。帯金状の金具・石帯も出土してい

る。また、截根染（しきそだ）技法を使った幅4m以上の大畦は、8世紀末から9世紀前半のものであり、その方向から条里制に関わる大畔畔と推定されており、奈良時代終末から平安時代前期から本格的に条里が施行されたと考えられる。上小田宮の前遺跡は、7世紀後半から9世紀にかけての掘立柱建物や井戸を検出している。建物は3間×4間の総柱建物、7世紀後半から8世紀代には道路状遺構を検出している。丘陵の突端に営まれている山田松尾平遺跡は8世紀中葉から9世紀前葉にかけての堅穴建物・土坑が検出されている。製鉄関連の炉跡・鉢埋等が出土しており、鉄滓が出土している。付近には蛇ヶ谷遺跡（製鉄炉等）があり、須恵器窯跡や製鉄関連の集落と考えられる。

稲佐廃寺が近い木の葉川流域の北の崎遺跡は、8世紀後半から9世紀前半までの集落である。

菊池川中流域の山鹿郡衙に比定されている桜町遺跡の詳細は不明だが、須恵器・土師器が表採されており、8世紀後半以前から営まれていたと考えられる。北西4km程の岩野川流域の権迫遺跡では、8世紀後半の竈付の堅穴建物が数軒碍修されており、硯に転用された須恵器杯蓋や円面硯が出土している。

周辺には方保田東原遺跡や駅の原遺跡等の集落が立地する。方保田東原遺跡にほど近い山鹿郡寺と推定される中村廃寺では、9世紀代の前半から後半の軒瓦や鬼瓦、鉄滓、炉壁も出土している。製鉄遺跡など生産遺跡を周辺にもつと考えられる。

菊池川中流域の菊底盆地東部の御宇田台地に広がる御宇田遺跡群は、主に7世紀から9世紀にかけての集落及び官衙関連遺跡と考えられる。越州窯青磁、石帯、円面硯が出土している。墨書土器は「日」の字が見えることから、日置氏との関わりを指摘する考えもある。三玉地区には蘭生山を背後に不動岩がそびえ、東に凡未尊寺跡があり、凸面疇目叩き、凹面布目叩きの平瓦等が多量に散布するが、方保田東原遺跡周辺が古墳時代に引き続き菊池川中流域の拠点集落になっていたが可能性があると考えている。

菊池川上流域の西寺遺跡は、菊池郡衙推定地で瓦等が散布している地点で周辺に土器が見られ、4町2町四方を取り囲む土塁があったとされている。土塁外側まで瓦が散布している点や中世の屋敷に利用されていた可能性もあるものの、南西の南関遺跡に多数遺物が散布しているところから考え、菊池郡衙があった可能性が高い。土塁の一部が古代にさかのぼれば、渡来系の技術で構築された可能性もある。さらに東側の隈府地域には、礎石の総柱を持つ9世紀後半頃と推定される正観時代石酢がある。寺跡とも見られるが、菊池郡衙の移転先の可能性も指摘される。隈府地域にも9世紀代には官衙関連施設があった可能性が高い。輯智城との距離も近くなり、相互の連携した機能も考えられよう。

南側の赤星水溜遺跡では越州窯青磁が2点出土している。赤星石遺遺跡では掘立柱建物群が検出されている。9世紀前葉から中葉を中心とする時期で、2間×3間の総柱建物4棟、無柱建物は、東西棟、南北棟が存在する。土器が廃棄された土坑が2基あり、柁が多数出土しており、金属器模倣杯や長頸壺等が出土している。耳杯（皿）や墨書土器「依麻ロ（呂）？」が出土している。越州窯青磁碗、緑釉陶器椀等も出土していることから官衙関連遺跡の可能性がある。1点7世紀後半の杯蓋も出土している。

側にスズメ迫横穴群（９基）が分布し、これらの横穴墓群には７世紀代まで埋葬された可能性が高い。

横穴式石室は西側の木野川流域に頭合古墳、北側に黄金塚古墳、北西側に徳塚古墳・銭亀塚古墳、等があり、巨石を用いた横穴式石室を含めて終末期と推定される古墳が集中している。

2.菊池川流域の古墳時代の集落(図１・２・３、表１)

菊池川下流域の玉名平野南部の古墳時代集落は、前期から柳町遺跡、両迫間日渡遺跡、玉名平野条里跡で、生産遺跡とともに集落が営まれている。低湿地に囲まれた微高地に竪穴建物・井戸・溝等の遺構で構成される集落で平地式住居も存在した可能性がある。古墳時代前半～中期中葉までの土坑ないし竪穴建物もある。大溝からは、古墳時代後期（６世紀中葉）の土師器・須恵器も数点出土しており、その時期の水田面も周辺でみつかっていることから古墳時代後期まで集落が営まれたことが判明している。玉名平野南部東側では、塚原遺跡が営まれる。山下遺跡では前期前葉の土器群の出土しており、前期の院塚、山下古墳等の首長墓が玉名平野南部の拠点集落を治めていたと考えられる。やや南側の菊池川支流の木の葉川流域の稲佐津留遺跡では、内行花文鏡や四乳細鳥文鏡、山陰系の甑や甕が出土している。北の崎遺跡でも、前期から中期前葉までの竪穴建物、6世紀後半の竈付竪穴建物を検出している。後に稲佐廃寺が造営される地域である。

山田松尾平遺跡は、低丘陵の突端に営まれた集落であり、古墳墳時代前期から中期初頭までの竪穴建物で、周辺の蓮華遺跡では、６世紀中葉から後半の竈付竪穴建物の集落が検出されている。

背後に古代の蛇ケ谷製鉄跡や須恵器窯跡の保多地窯跡群が営まれるところである。菊池川中流域で拠点集落となるのは、菊鹿盆地西部の方保田東原遺跡である。東側の藤井前田遺跡で採集された土器群は中期的な様相を示すことから、中期初頭まで集落が継続されていたと考えられる。

菊池川上流域の支流の河原川流域の低位段丘面に存在する東鶴遺跡から古墳時代前期末から中期中葉の炉跡を持つ竪穴建物４基・溝1条、土坑６基を検出している。菊池市赤星地区の東側の藤田上原遺跡では、古墳時代中期終りから後期初めの須恵器が出土している。鞠智城内の上原地区・長者原地区西部に古墳時代後期の集落が営まれる。北東側の樋ノ口遺跡でも古墳時代の遺物が出土しており、古墳が存在する周辺に集落も営まれていると考えられる。

合志川流域の平町遺跡は、中期前葉から後葉にかけて竈付の竪穴建物からなる集落である。出土遺物には小形丸底系土器や韓式土器と考えられる外面に格子叩きが残存する把手付鍋もしくは甑がある。すぐ近くの合志川上流の藤巻遺跡では、竈を持つ竪穴建物や溝が検出されている。高杯小形丸底類は及び高杯が多数出土している。この地域は、熊本市城南地域にある迎原西遺跡と同様に熊本県では竈が早く採用された地域である。上流の森北地区では須恵器把手付鉢が出土していることから、渡来人が関与する地域と考えられる。

合志川中流域支流の小野川流域の横山古墳や鬼のいわや古墳周辺の石川遺跡で、後期の竈付竪穴建物や土坑が検出されている。6世紀前葉から後葉が中心であるが、須恵器を伴わない時期の５世紀後半から出現するようである。彩色を施した須恵器模倣杯を多く含む。上流域の篠原遺跡で６世紀中葉から後葉の竈付き竪穴建物群とともに製塩土器が出土している。

3.菊池川流域の古墳文化

菊池川流域の古墳文化は、前期には、下流域の山下古墳、天水大塚古墳、院塚古墳と在地の九州型の舟形石棺を持つ前方後円墳が営まれるが、中流域の支流岩野川流域に竪穴式石室を持つ竜王山古墳が営まれる。菊池川中流域が大和政権にとっても重要な地域であったことが伺える。

中期になると屋根天井形の舟形石棺は、菊池川中・下流域から筑後まで分布しており、筑後地方との関係が密接であったこと窺える。

菊池川中流域では、初期横穴式石室の銭亀塚古墳や岩原古墳群等へ続く勢力は、菊池川下流域の勢力と拮抗していたと考えられる。合志川流域はそれらに次ぐ勢力が中期以降も続く有力な地域であり続け、高熊古墳・マロ塚古墳、上生上ノ原４号墳等では甲冑等の武器・武具や馬具等の出土がみられる。また埴輪の分布を見ると菊池川下流域玉名平野北部の清原台地の古墳群（京塚古墳、虚空蔵塚古墳、江田船山古墳、塚坊主古墳）と並んで中流域の岩野川流域から菊鹿盆地西部にかけての金屋塚古墳・臼塚古墳・チブサン古墳、中村双子塚古墳等が主要な分布地域である。その中でも特に中村双子塚は多様な埴輪群が周溝から出土しており、畿内の埴輪文化の影響がみられる。

古墳時代前期の菊池川下流域の集落は、柳町遺跡等玉名平野の微高地上から小河川の近くの低位段丘に営まれている。玉名平野東側の塚原遺跡でも大規模な集落が営まれ、中期の石棺系石室が営まれていることから中期まで集落が存在していたと考えられる。中期は、蓮華遺跡でみられるが、様相ははっきりしない。後期も前期以来の集落から、少量であるが、土器の出土がみられ、集落が営まれている様子が窺える。隣接地域に集落が展開していった可能性が高い。

菊池川中流域では、菊池川方保田東原遺跡を中心に展開している。いずれも前期（弥生時代終末）から継続して中期前半まで拠点集落として継続していた可能性が高い。御宇田台地で後期の集落がある程度である。石棺群等も河川の近くにあることから、中期から小規模な集落が微高地に営まれていた可能性が高い。

合志川流域の平町遺跡や藤巻遺跡は、前期末から中期前半にかけての集落であり、西側2～3kmのところに家形石棺を持つ久米若宮古墳等が所在する。小野川流域では前期には北無田遺跡、中期以降は石川遺跡で大規模な集落が営まれている。特に中期から合志川流域に勢力を持った首長が存在し始めることを表している。合志川流域の古墳から甲冑等の武器・武具の出土が多いことが関係している。

後期については、菊池川中・下流域では、前期からの集落に土器の出土がみられ、集落が継続していることが窺える。菊池川上流域や合志川流域では、鞠智城の古墳時代集落等がやや高い台地上に営まれてきている様子が窺える。上流域の森北出土に把手付鉢等渡来系の遺物が出

垂飾付耳飾の分布と類似した傾向を示す。古墳時代中期には貝釧とイモガイ製馬具については、伝左山古墳などで出土したほかは、県南部の田川内甲古墳、大鼠蔵山１号石棺など中期でも後半の特徴をもつ石障系の石室に見られる。西迫間横穴群と瀬戸口横穴群、湯の口横穴群等菊池川中流域の横穴群から出土している。特に武器や馬具を多数出土する横穴墓と推定でき、地域首長に関わる軍事を司る人々が埋葬されている可能性が高い。

（７）　横穴式石室の種類と分布

①各種横穴式石室の分布（図３）

菊池川中流域菊鹿盆地西側には、全長約65mで３段築成、葺石をもつ銭亀塚古墳（集成５期）が営まれる。この古墳は、石障系の石室構造をもち長方形プランを有するもので、割石積みの石室で初期横穴式石室と考えられる。幅2.5mで、玄室と羨道に段差をもつ。前期の竜王山古墳群につながる首長墓系譜の古墳である。荒尾市の別当塚東古墳等の系統で、九州北部地域の影響がみられるものである。

②竪穴系横口式石室（図２）

菊池川中流域菊鹿盆地北側では、津袋古墳群中に周囲が削平されて径約7.2mしか残存していないが、竪穴系横口式石室と推定されている朱塚古墳がある。この型式の石室は菊池川下流の城ケ辻古墳群中の７号墳に採用されている。外には、上天草市の樋合島の瀬崎古墳に採用されている。有明海周辺からの伝播と考えられる。墳丘規模は大きくないが、城ヶ辻７号墳では馬具や大刀、長頸鏃が多数検出され、墳丘を一部共有する６号墳では、内湾形（楕円系）轡が出土し、垂飾付耳飾の破片も見られることから、軍事に携わる有力者に採用された石室形式と考えたい。

中期から後期初めにかけて、有明海からの系譜の異なる文化が中流域まで伝わっていることが伺える。

③石屋形の分布（図５）

宇野慎敏氏は、石屋形を分類し、家形に加工していない自然石状の板石の屋根石を有するものをA類、屋根石が家形を呈するものをBとして、両者の分布の偏重を指摘している。

菊池川下流域の弁財天古墳、大坊古墳、永安寺東・西古墳、馬出古墳、塚坊主古墳、中流域のオブサン古墳、チブサン古墳、臼塚古墳、弁慶ケ穴古墳、馬塚古墳などにB類の屋根形の石屋形が分布する。

宇土半島基部の国越古墳、宇賀岳古墳、中ノ城古墳にもみられる。A類の分布は、白川下流域にみられる。

宇野慎敏氏はこれらの分布から屋根形のB類が主要古墳に、A類はB類よりやや低い在地有力層に採用された型式とみている。ただし、筑後地域から筑前にかけて分布するA類の古墳は、弘化谷古墳等規模が40mを超える円墳や桂川王塚古墳（嘉穂郡桂川町）等で有力な首長層にも採用されていることから地域間のネットワークの差とみられ、白川流域との首長とのつながりを示すものと考えられる。B類も童男山１号墳、東光寺剣塚古墳（福岡市博多区）、鶴見塚古墳（糟屋郡粕屋町）などの筑前地域の全長80mを超える前方後円墳に採用されている。宇土半島基部、菊池川流域と北部九州のつながりを示している。

菊池川中流域菊鹿盆地東部の袈裟尾高塚古墳が凝灰岩の加工しやすい石材をしながら石屋形の屋根が平天井（A類）であることは示唆的である。すなわち、菊池川流域の中・下流地域の石屋形を採用せず、他地方からの文化が採用されたと考える。埴輪が樹立されず靫を浮き彫りにした石製表飾を楣石等に採用する点等がそのことを示していると言えよう。

④切石積石室の分布（図11・２）

切石積複室構造横穴式石室の代表例は、菊池川下流域の江田穴観音古墳である。このように巨大な凝灰岩の切石を使った古墳が分布する。菊池川流域より北では、南関の八角目古墳群や萩ノ尾古墳があげられる。菊池川中流域では弁慶ヶ穴古墳や合志川流域では鬼のいわや古墳、石川山４号墳があげられる。注目すべきは、阿蘇の下御倉古墳と上御倉古墳である。高木恭二氏が指摘するように情報や石材移動などが指摘されている。この型式の石室が菊池川上流域で見つかっていないことも留意が必要であろう。

（８）横穴墓の分布（図１・２・３）

熊本県域では、290箇所以上の横穴群の存在が知れており、菊池川流域では130以上が分布し、総数 3750基以上とされているが、そのうち半数以上が菊池川流域に分布する。（「中九州の横穴」松本健郎）横穴墓の分布は、阿蘇溶結凝灰岩の分布地域と重なり、菊鹿盆地周辺部と玉名平野の北・東縁部に分布の中心がある。

６世紀前半頃、菊池川中流域にチブサン古墳や中村双子塚古墳や塚坊主古墳などの主要な前方後円墳が築造される。また、同地域に付城横穴群等造営される。古式の横穴墓と考えられ、古い須恵器も出土している。横穴式石室と横穴式石室が１世紀以上にわたって共存していることが理解されよう。

最古の装飾横穴墓である付城57号・72号は、墓室の奥に切石を持ち込んで石屋形を作る。装飾文様には×印や円文・連続三角文が施される。初期には武具（靫・盾・弓・剣・刀子）、後に楽器の琴やゴンドラの舟、馬、人物などの装飾文様が見られ、葬送儀礼に伴うものと考えられる。

菊池川下流域の伝左山古墳において横穴式石室に複室が採用されると菊池川下流域の石貫ナギノ横穴群、菊池川中流域には、城横穴群、付城横穴群、岩原横穴群、桜の上横穴群、湯の口横穴　129号などに複室構造をもつ横穴墓が造られる。複室構造を持つ横穴墓は、菊池川中から下流地域で顕著で、装飾古墳も多く、長岩109号盾、岩原Ｉ－３２号・Ｖ－６－６号の靫などのように武器を模した彫刻が多い。装飾の有無、複室等有無により階層が分かれていたことを示すと考えられる。いずれも、６世紀後半（TK43から209型式併行期からの築造と考えられるが、７世紀まで追葬されることが多い。

鞠智城に近い瀬戸口横穴群でも6世紀後半から７世紀後半以降の追葬がみられる。拠点ごとに横穴式石室を主体部とする首長墓が営まれている時期にそれに次ぐ有力者層も横穴墓に埋葬されていると推定できる。特に中から上流域に分布が多く、地域的な特色が指摘されよう。

鞠智城の周辺には、南側に山田横穴群、樋画之口横穴群、大井横穴群、堀切横穴群等、北西

の長目塚古墳を含む中通古墳群である。（長目塚、上鞍掛A・B、鞍掛塚A、車塚A、勝負塚の各古墳で円筒埴輪）。

前期から中期初頭までは、玉名平野有明海側、阿蘇地域の他合志川下流域ではあるが、菊鹿盆地の南側に壺形埴輪という初期の埴輪文化が広まっていたことは注目に値する。

また５世紀の埴輪の分布は、八代海沿岸の古墳（上天草市カミノハナ古墳群や松橋大塚古墳。前田A遺跡）や長目塚古墳群以外では、菊池川流域に集中する。B種ヨコハケ（静止しながら調整する横方向の板を使った調整）は京塚古墳や虚空蔵塚古墳の一部と、金屋塚古墳朝顔形埴輪に認められる。

また、岸本圭氏の研究によれば八女市立山山２号窯で焼成された埴輪が樹立された釘崎２号墳の埴輪と金屋塚古墳の埴輪が類似しており、押圧技法（タガをつける際に粘土を押しつぶしたような跡が残る）が初見する埴輪の初源とされている。菊池川中流域西部の6世紀前半の中村双子塚古墳・臼塚古墳・チブサン古墳は岸本圭氏の分析により、底部径や直線的に開く形態の類似性が指摘されている。

押圧技法は金屋塚古墳のほか、塚坊主古墳・チブサン古墳で確認される。筑後地方では、釘崎２号墳の他、鶴見山古墳・善象塚古墳（八女市）、欠塚（筑後市）、岡寺古墳・庚申堂塚古墳（鳥栖市）等で認められる。塚坊主古墳は、断続ナデ技法（タガをつける際に斜め上方にナデで付与する技法）も用いられている。筑後地方では、岩戸山古墳・乗場古墳、立山山８号墳（八女市）、権現塚古墳（久留米市）でもみられる。

以上のことから５世紀後半から６世紀前半には、筑後地方との関係が看取される。

②石製表飾（図６・３）

菊池川流域の石製表飾は、玉名平野北側の清原台地から出土した短甲、腰掛、家、刀形石製品、菊池川中流域の岩野川流域の臼塚古墳の短甲、チブサン古墳の石人がある。

菊鹿盆地東側には、木柑子フタツカサン古墳の武装石人、木柑子高塚古墳の石人、石製蓋２である。肥後では、外に三の宮古墳の武装石人がある。

これらの石製表飾の分布は、前方後円墳もしくは、古墳群に前方後円墳を含む系譜の古墳に営まれ、在地の有力な首長によって樹立される。古墳時代中期後半から後期前半にかけて菊池川下流域玉名平野北部、菊池川中流域の岩の川流域、菊池川中流域の菊鹿盆地に在地の有力首長が分布していることは、円筒埴輪の分布域と重なる点で示唆的である。

そのうち、木柑子高塚古墳は、岩戸山古墳と同様に石人や短甲形のものと器材形の石人が共伴している事例で現段階では珍しい。白川下流域右岸の富ノ尾古墳群に石人があるほかは、それより南の緑川流域の塚原古墳群（石ノ室古墳（笠形石製品）、北原１号墳（盾形石製品））、野津古墳群（天堤古墳　笠形石製品）、姫ノ城古墳（笠６、靫２、盾６）、天草の竹島３号墳（武器形石製品）などでは、武器や祭祀具の石製表飾が見られる。

木柑子フタツカサン古墳は両者の中間に位置するあり方を呈している。石人の分布の肥後の東端と言える。また、周溝が２重に回り、石製表飾（石人）を持つ古墳に日田市天満２号墳がある。このことは、東側の交通路との交流を示唆するものとして注目される。

（５）装飾古墳（図１・２・３）

菊池川地域で石室内への装飾技法が採用されるのは６世紀前半であり、八代から不知火海沿岸の天草地域、宇土半島から熊本市域を経てようやく広まっている。

菊池川下流域の玉名平野北部の塚坊主古墳、中流域のチブサン古墳等が初例であり、菱形文から三角文へそして下流域では、６世紀中葉の永安寺東古墳で馬、中流域の臼塚古墳では人物が描かれている。

横穴墓でも横穴式石室墓と時期を同じくして変遷するが、横穴式石室を石室構造に持つ装飾古墳とやや離れた場所、例えば、玉名平野北部の塚坊主古墳が築造された時期には、石貫や南関の今村岩の下横穴墓に装飾が描かれるというように近接しているが小地域が分かれているような傾向がみられる。

また、中流域に位置する菊池川水系岩の川下流地域のチブサン古墳や臼塚古墳に装飾が採用される時期には、菊鹿盆地の西側の御宇田台地の付城横穴群に装飾が施される。横穴墓でも複室墳や装飾文の有無など構造の違いから階層が存在し、さらに横穴式石室と横穴墓においても階層の違いがみられる。

また、臼塚古墳では幾何学文と具象文の共存がみられる。また、蔵富士　寛氏は筑後平野では６世紀前半に同心円文や・三角文とともに具象文が描かれ、石屋形の影響を受けた石棚等が菊池川や熊本平野北部地域から筑後川流域に伝播したものと指摘する。

（６）特殊遺物の分布

①垂飾付耳飾（図９・２）

菊池川流域で韓半島系の垂飾付耳飾が出土するのは江田船山古墳、伝佐山古墳、大坊古墳の3例である。高田貫太氏によれば、大坊古墳の一つは、大伽耶系でひとつは、百済系である。同様に江田船山古墳の１つは、百済系、もう一つは、大伽耶系とされている。福岡県域では玄界灘周辺に大伽耶系の耳飾が分布する。不知火海沿岸の野津古墳群で大伽耶系の垂飾付耳飾が出土し、菊池川流域では、大伽耶系・百済系共に存在していることから、環不知火海沿岸かもしくは有明海や玄界灘から筑後を経由して伝わった可能性が考えられる。このように菊池川下流域において半島系の遺物が多い点は注目に価する。

②初期須恵器の分布（図１・２・12）

菊池川下流域の玉名平野北岸では、江田船山古墳に百済系と考えられる韓式系土器が含まれることは有名である。径約22mの京塚古墳周辺で鈴付き高杯や子持ち壺が出土している。

また、やや上流の径約33mの竈門寺原古墳では、透かしが施された樽形廻が出土している。このように菊池川下流域に渡来系遺物が顕著にみられる。

また、合志川上流域の菊池市森北で把手付椀が出土している。熊本県では荒尾市の野原９号墳、熊本市稲荷山古墳で出土している小隈窯跡群周辺の池の上墳墓群・小寺墳墓群等筑後の古墳、吉武高木遺跡群や有田遺跡等早良平野、対馬等から出土しているものである。朝倉窯跡との関係はもちろん、韓半島との関係も示唆される遺物である。

③貝製品（図10）

報告要旨４

菊池川流域の古墳時代・古代の遺跡

亀田学　（歴史公園鞠智城・温故創生館）

はじめに

菊池川流域の古墳時代から9世紀後半頃までの遺跡の状況から鞠智城との関係を考える。

菊池川下流域は、有明海側（行末川、菊池川の有明海側）、玉名平野南部（玉名市、岱明町）、玉名平野北部（和水町）、菊池川中流域は、菊鹿盆地西側（岩野川流域他）菊鹿盆地東部（内田川流域他）、菊池川上流域右岸（木野川流域・菊池川上流域・迫間川流域）、菊池川上流域、合志川中流域、合志川上流域までを含めるものとする。（図１）鞠智城が何のために菊池郡木野に営まれ、大野城や基肄城のように９世紀後半まで機能しているのかを考えてみたい。

１.菊池川流域の古墳

（１）前期古墳の分布（図１・８）

菊池川中流域の岩野川下流域に竪穴式石室構造を持つ県北最古の竜王山古墳に竪穴式石室が築造される。その後、菊池川下流域では、壺形埴輪や古式の舟形石棺を主体部とする古墳が出現する。菊池川下流域の有明海側に分布する約85mの前方後円墳である藤光寺古墳や行末川流域の全長約78mで舟形石棺を主体部とする院塚古墳、玉名平野北部の菊池川下流域に分布する約58mの前方後円墳の山下古墳等である。玉名平野東側でも壺形埴輪が樹立され、全長100mを超える規模の前方後円墳である天水大塚古墳が築かれる。

このように、まず畿内系の葬送様式が菊池川中流域にまず採用され、九州系の舟形石棺が菊池川下流域で採用される。

（２）中期古墳・舟形・家形石棺の分布（図４・２・３）

古墳時代中期の菊池川流域の主要な古墳には、舟形石棺や棺身が組み合わせになる家形石棺を主体部とするものが多い。

屋根形棺蓋で石枕を造り出さない舟形石棺（北肥後Ⅰ型）は、菊池川中・下流域にみられる。高木恭二氏の研究によれば屋根形棺蓋の舟形石棺は、福岡県みやま市石神山古墳の小棺に採用されているなど筑後地方にその分布が見られる。このことから筑後地域との密接な関係がうかがえる。

それに対し、屋根形の蓋を持ち、さらに石枕を造り出す舟形石棺（北肥後Ⅱ型）は、菊池川上流域の一部に分布しており、菊池川中・下流域と菊池川上流域の地域差が見られる。

台（うてな）台地にも径約27mの舟形石棺を主体部とする北上原古墳がある。舟形石棺が主体部であり、北肥後Ⅰ型である。鞠智城跡の北西に位置する灰塚古墳は、少なくとも径15m以上の円墳で、葺石を有する。主体部は粘土郭を持つ石蓋土坑墓で、舟形の蓋の形状である。また、割竹形木棺と推定できる粘土郭で、畿内型の古墳と在地の舟形石棺を融合されたものとも考えられる。舟形石棺とは言えないが、灰塚古墳の棺蓋の特徴は、肥後の舟形石棺の東端に位置すると考えて良いと思われる。

玉名平野北部にも径約22mの京塚古墳があり、周辺から凝灰岩製舟形石棺が出土していたことから舟形石棺を主体部とする古墳であると考えられている。埴輪や鈴付高杯などの初期須恵器が出土している。径13.5mの円墳の竈門寺原１号墳は、その棺底跡から妻入（横口式）家形石棺で初期須恵器の楕形瓶、提瓶が出土している。全長約62mの江田船山古墳の主体部は妻入（横口式）家形石棺である。

舟形石棺を主体部とする熊本平野北部の経塚古墳や合志川流域の竈門寺原１号墳や妻入（横口式）家形石棺を主体部とする古墳には初期須恵器等流来系遺物が副葬されている。合志川流域の石川山古墳群９号墳は家形石棺で内湾鏡板付轡を持つものである。内湾鏡板付轡は　f字形鏡板付杏葉に次ぐものて、渡来系遺物と考えられる。久米若宮古墳は、円墳で家形石棺から方格八乳鏡、剣・鉄鉾・辻金具・轡・鉄鏃等多彩な遺物が出土している。菊池川流域の古墳には、舟形・家形石棺を共通の埋墓式としながら、玉名平野北部および合志川流域は渡来系遺物が多く出土するという特徴を持つ。

このように、舟形石棺・家形石棺は、前方後円墳や大形円墳から墳丘規模の小さい古墳にも採用されていることから、有力な首長だけでなく、それに次ぐ階層の有力者の埋葬型式にも採用されたと考えられる。合志川流域や玉名平野北部に勢力をもつ首長を周りに従えながら、おそらくは菊池川中流域の岩原台地に造られた岩原双子塚古墳（全長100mを超える前方後円墳）には、舟形石棺を主体部にしていたと考えられる。その周辺の方保田周辺にも前方後円墳や大形円墳や舟形石棺を埋葬する古墳が分布する状況で岩原古墳の首長を支えた首長層もしくは有力者と考えられる。

（３）武器・武具出土古墳の分布について

①鋲留の甲冑（図１・２）

熊本県で鋲留の甲冑が出土しているのは、菊池川流域、合志川流域、緑川流域の石ノ室古墳、天草北部のカミノハナ１・３号墳等に限られる。玉名平野南部の伝左山古墳、玉名平野北部の江田船山古墳、合志川中流域のマロ塚古墳、上生上ノ原４号墳等であり、菊池川中流域では認められない。

②武器武具の装飾古墳について（図２）

菊池川中流域には、靫の浮彫をもつ横穴が多い。鍋田８・12・14・21・27・49号横穴、長岩41・52・108号横穴等である。また盾形の浮かし彫りも鍋田８・12号横穴鍋田８・27号横穴等に分布する。

（４）埴輪・石製表飾の分布

①埴輪の分布（図７・３）

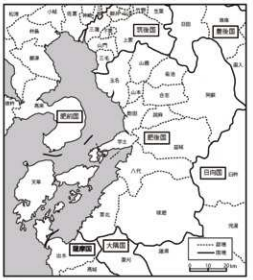
前期では、菊池川下流域の院塚古墳、天水大塚古墳、小塚古墳で、壺形埴輪（壺形土器）が出土している。県内最大級の円墳の慈恩寺経塚古墳でも壺形埴輪が円筒埴輪と共存している。

また、県内で壺形埴輪が樹立されている古墳は、県内では、全長100mを超える前方後円墳

郡	人名・氏族名	典拠	備考
玉名	日置郡	日置郷の郷名から復元	
	日置郡公	「日置氏墓誌」(松本1980年など)	極擬少領
山鹿			
山本			
菊池	聚人	鞠智城跡貯水池跡出土木簡(熊本県教育委員会2012)	郡名を記さないことから菊池郡の人と推定される
	大伴部鳥上・大伴部稲依	東大寺大仏殿廻廊西地区出土木簡1761(奈良県教育委員会2000)	子養郷の人。「楽院依仕奉人」としてみえる
阿蘇	阿蘇君	『古事記』神武段など	郡名との一致から推定
	阿蘇直	『異本阿蘇系図』(田中1986)	阿蘇君氏との同族関係から推定
	穴穂部直	『異本阿蘇系図』(田中1986)	阿蘇君氏との同族関係から推定
	宇治部公・宇治部宿祢	『異本阿蘇系図』(田中1986)	阿蘇君氏との同族関係から推定
合志	日下部辰吉	『日本三代実録』貞観18年(876)9月9日癸未条	擬大領
	壬生諸石	『日本書紀』持統10年4月戊戌(27日)条	
	鳥取部	鳥取郷の郷名から復元	
飽田	春日部	『日本書紀』安閑2年5月甲寅(9日)条	「火国春日部屯倉」の所在地として熊本市春日が比定されることから推定
	建部君部[一部本]	平城宮木簡(『平城宮木簡』1-300)	天平三年、主政
	建部君虫麻呂	天平勝宝6年(754)『瑜伽師地論』巻38奥書(『大日本古文書』25-171頁／石山寺所蔵)	
	建部公弟益	『続日本後紀』承和14年3月丙申朔条	長統朝臣勝雄・左京三条に移貫
	建部公貞雄	『日本三代実録』貞観3年8月21日壬戌条	大領
	私部	私部郷の郷名から復元	
詫麻	津守部(？)	津守郷の郷名から復元	
益城	山稲主	『続日本紀』宝亀元年(770)10月己丑朔条	旧の山部
	肥公馬長	延暦20年(801)浄水寺「燈籠銘」(豊野町教育委員会2004」)	
	真上日乙	延暦20年(801)浄水寺「燈籠銘」(熊本県豊野町教育委員会2004)	真上＝真髪部はもと白髪部
	大伴君熊凝	『万葉集』巻5-885	天平3年(731)相撲使の従人として上京
	当麻部(？)	当麻郷の郷名から復元	
	宅部	宅部郷の郷名から復元	
	益木采女	二条大路木簡(『平城宮発掘調査出土木簡概報』31-20下(2489)	
宇土	額田部君得万呂・額田部真嶋	天平勝宝2年「仕丁造文」(『大日本古文書』25-145頁／正倉院月報文書第94号)	大宅郷
八代	火君健緒鉈	『肥前国風土記』総記、『釈日本紀』所引「肥後国風土記」逸文	火国の地名起源および火君氏の祖先伝承
	火国造	「国造本紀」	八代郡火呂の地名から推定
	高分部部雄	『続日本紀』宝亀3年(772)10月戊午(11日)条	
	豊服広公	『日本霊異記』下巻第19縁	豊服郷の人。宝亀2年の説話
天草	天草国造	「国造本紀」	郡名との一致から推定
鹿北	火葦北国造所部取部阿利斯登	『日本書紀』敏達12年10月是歳条	
	葦分国造	「国造本紀」	郡名との一致から推定
	日奉部広主奕	『続日本紀』宝亀元年(770)10月己丑朔条	『続日本紀』宝亀3年10月丁酉(9日)条では「日奉公広主奕女」とみえる
	家部嶋吉	『続日本紀』宝亀3年(772)10月戊午(11日)条	
	刑部広瀬女	『続日本紀』神護景雲2年(768)9月辛巳(11日)条	
	他田継道	『続日本後紀』天長10年(833)3月丙申(9日)条	少領
	真髪部福益	『続日本後紀』天長10年(833)3月丙申(9日)条	真髪部はもと白髪部
	大伴部	伴郷の郷名から復元	
球磨	久米部	久米郷の郷名から復元	

第2表　肥後国の氏族分布

鞠智城跡航空写真（南西から）

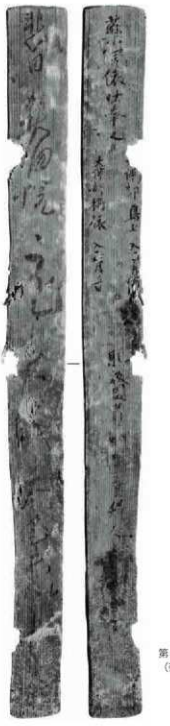


第1図　肥後国の郡
（鳥方洸一企画・編集統括「地図でみる西日本の古代」平凡社、2009年）をもとに作成）

第2図　菊池郡の郷配置
（国土地理院発行20万分1地勢図「熊本」（2005年測量）をもとに作成）

地域	人名など	出典	備考
筑前国	火君等祖（不知本）	『続紀』国風上記』神皇紀本	継体の地名起源説話。「筑紫国造」は九州全土を指す可能性あり
筑前国嶋郡川辺里	肥君猪手ほか	大宝令制下の「筑前国嶋郡川辺里戸籍」（『大日本古文書』1-1-142、『平安遺文 金沢文庫』古1-1）（小山古人、統覚））	猪手は大領
筑前国志摩郡	肥君玉主麿	『続日本紀』天平宝字8年（764）9月11日条（『平安遺文』古1-8-1）、67年文書（『大日本古文書』古代編年補2-218-1）	大領
肥前国養父郡	筑紫大宰府官人・筑紫大宰府の公的従者	『続日本後紀』承和7年（840）6月壬辰（6日）条	百官領事を騒乱、左官に降格
肥前国松浦郡	大君	『日本書紀』巻第29編	
肥後国益城郡	肥公阿良	『肥前国風土記』逸文（『釈日本紀』巻第14所引）	
（肥後国）八代郡	火君健緒麻	『肥前国風土記』編目なし	八代の地名起源および八代君氏の祖先伝承
薩摩国（薩摩郡ヤ）	肥君猪麻	天平9年「薩摩国正税帳」（『大日本古文書』2-248頁、『平安遺文 金沢文庫』古1-2）	主帳
薩摩国出水郡	肥君	天平9年「薩摩国正税帳」（『大日本古文書』2-203頁、『平安遺文 金沢文庫』古1-2）	大領

第1表　火君氏の分布



第4図　鞠智城跡貯水池跡出土木簡
（熊本県教育委員会編2012）

第3図　東大寺大仏殿回廊西地区出土木簡
（奈良県教育委員会編2000）

「国造本紀」に収められた伊吉島造の系譜によると、磐井には新羅人の従者がいたらしい。また『日本書紀』によると、磐井は「高麗・百済・新羅・任那」の「貢職船」を誘致していたという（継体21年6月甲午（3日）条）。筑紫君氏は糟屋など沿岸部の拠点を利用して渡来人を招来しており、その一部が後に秦人に編成されたのであろう。磐井の乱が秦人編成の契機となった可能性も十分に考えられる。

おわりに

以上の考察結果をまとめつつ、鞠智城の成立と地方豪族の関わりをさぐってみたい。

第一に、国造級の豪族からみると、菊池地域はいわば「空白地帯」であった。これまで、有明海沿岸や吉備では6世紀代の有力古墳群を故意に避けて古代山城が選地されており、在地勢力による築城とは考えにくいとの指摘がある（向井 1991）。菊池地域に国造級の豪族がみられないという点は、こうした指摘とも親和的である。ただし、木棺子に築かれた2基の6世紀の前方後円墳の存在は無視できない。菊池地域に豪族がいなかったというわけではない。

第二に、菊池地域は筑紫国造の配下にあった久々智氏や大伴部氏の勢力圏であった。明らかとなっている氏族分布が断片的であるため確実なことはいえないが、かつて筑紫国造の配下にあった有力者が、鞠智城を襲する評の官人に編成された可能性は高いだろう。白村江の敗戦後、特段こうした勢力への牽制が必要になったことは想定しがたい。

こうした勢力と鞠智城築造の関係を考えるとすれば、築城を契機とした倭王権による地方豪族の編成という意義を見いだせるかもしれない。鞠智城の築造にあたって、倭王権—大宰府が、国造を介さず、現地の豪族（評官人）に協力させたとすれば、それによって結果的には倭王権—大宰府による地域社会の掌握が進んだとみられる。つまり、倭王権が国造を介して中小豪族を支配する仕組みから、倭王権が国造を介さずに中小豪族を支配する仕組みへ変化していくなかで、古代山城の造営がそれを促進させる役割を果たしたと考えられる。

第三に、菊池地域は筑紫国造のもとから倭王権の直接的な配下に編成された秦人が居住する地域であった。秦人は国造などの地方豪族を介さず、中央の王権が直接的に把握していたため、鞠智城の造営に際して、倭王権—大宰府による労働力編成が比較的容易であったと考えられる。また、秦氏は土木・建築技術を有していたことも知られているから、技術的な面から鞠智城の造営に関与した可能性も想定できるだろう。

以上、主に文字資料の分析により、肥後国、特に菊池地域における豪族の動向を探り、鞠智城が築かれた背景などを考えてきた。鞠智城周辺の現地の勢力という観点では、鞠智城の所在地にもともと営まれていた集落遺跡や、鞠智城の南方に営まれた瀬戸口横穴群などの存在も重要である。今後は、こうした集落や墓などの発掘調査成果もふまえ、現地勢力の実態を総合的にとらえていく必要があると思う。

（参考文献）
加藤謙吉　2009『秦氏とその民—渡来氏族の実像—（新装版）』白水社、初出 1998
熊本県教育委員会編　2012『鞠智城跡Ⅱ』
佐藤信　2014「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡Ⅱ—論考編 1 —』熊本県教育委員会
東野治之　2010「東大寺大仏の造立と木簡」『書の古代史』岩波書店　初出 1989
中井一夫・和田萃　1989「奈良・東大寺大仏殿廻廊西地区」『木簡研究』11
奈良県教育委員会編　2000『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書　発掘調査篇』東大寺
溝口優樹　2020「氏族からみた古代肥後の地域社会と鞠智城」『鞠智城と古代社会』8　熊本県教育委員会
向井一雄　1991「西日本の古代山城遺跡—類型化と編年についての試論—」『古代学研究』125

鞠智城が築かれた菊池郡に分布が復元できる氏族をとりあげ、その性格を考えたい。

まずは、郡名と同じ「ククチ」のウヂナをもつ久々智氏をとりあげよう。久々智氏は菊池郡に居住したことを直接に確認することはできないものの、もともと菊池地域を拠点とした氏族とみて問題ない。久々智氏は、９世紀はじめ頃に編纂された『新撰姓氏録』に系譜が掲載されている。

【史料２】『新撰姓氏録』摂津国皇別

高橋朝臣。阿倍朝臣同祖。大彦命之後也。日本紀不レ見。

佐々貴山君。同レ上。

久々智。同レ上。

これによれば、久々智氏は大彦命の後裔という系譜をもっていた。後述するように、筑紫国の筑紫君氏（筑紫国造）も大彦命後裔氏族であり、同祖関係にあたる。また、菊池郡に分布する大伴部氏も大彦命後裔氏族であり、それとも同祖関係にあたる可能性が高い。

（２）大伴部氏

次に、菊池郡子養郷の人として復元できる大伴部氏をとりあげよう。

【史料３】東大寺大仏殿廻廊西地区出土木簡（奈良県教育委員会編 2000。第３図）

・「薬院依仕奉人〈大伴部鳥上　入正月□□（[返日ヵ]）／大伴部稲依入正月五日〉＝

＝肥後国菊地郡□（[子ヵ]）養郷人　『□』」

・「『悲田　悲田院　　充大□不□未［　　］』」

476×43×4　011型式

これは東大寺の大仏鋳造に関わる木簡である。同じ土層から出土した木簡は、大仏鋳造が開始された天平19年（747）９月から大仏殿が完成した天平勝宝３年（751）頃までのものとみられている（中井・和田 1989）。そして史料３の木簡は、薬院＝施薬院に所属する大伴部鳥上や大伴部稲依が大仏鋳造の場に入るときの通行証か、二人の勤務をチェックするための札であるとみられている（東野 2010）。この木簡により、大伴部鳥上と稲依が菊池郡子養郷に属していたことがわかる。

ここで考えなければならないのは、大伴部の性格である。大伴部には、大伴連氏に連なる系統と、膳臣氏に連なる系統（膳大伴部）があった。菊池郡の大伴部がどちらにあたるかが問題となるが、同じ菊池郡に縁のある久々智氏が大彦命後裔氏族であることを踏まえると、大彦命後裔氏族である膳臣氏に連なる大伴部とみるべきであろう。

（３）菊池地域と筑紫君氏

ここまでの考察によると、菊池郡に分布が復元できる久々智氏・大伴部氏はいずれも大彦命後裔氏族であった。ここで注目すべきは、北部九州の有力豪族である筑紫君氏も大彦命後裔氏族であったことである。

【史料４】『日本書紀』孝元７年２月丁卯（２日）条

立二欝色謎命一為二皇后一。后生二二男一女一。第一曰二大彦命一。第二曰二稚日本根子　彦大日日天皇一。第三曰二倭迹迹姫命一。〈一云、天皇母弟少彦男心命也。〉妃伊香色謎　命生二彦太忍信命一。次妃河内青玉繋女埴安媛生二武埴安彦命一。兄大彦命、是阿倍臣・　膳臣・阿閇臣・狭狭城山君・筑紫国造・越国造・伊賀臣、凡七族之始祖也。彦太忍信命、　是武内宿祢之祖父也。

【史料５】『先代旧事本紀』国造本紀

筑紫国造。志賀高穴穂朝御世、阿倍朝臣同祖大彦命五世孫、日道命定二賜国造一。

大彦命後裔氏族は列島各地に広く分布するが、北部九州における大彦命後裔氏族の中心は、筑紫国造＝筑紫君氏である。久々智氏や大伴部氏は、筑紫君氏の勢力下にあったことを背景として、大彦命を「祖」とする系譜（筑紫君氏との同祖関係）を有するに至ったと考えるべきであろう。

肥後国と筑紫君氏の関係を考えるうえで想起されるのは、いわゆる「磐井の乱」が勃発した際、筑紫君磐井が、火・豊二国に勢力を張っていたとされることである（『日本書紀』継体21年６月甲午〈３日〉条）。菊池地域は、磐井が勢力を張った火国の具体的な地域の一つにあたるのかもしれない。いずれにせよ、菊池地域に久々智氏や大伴部氏など、筑紫君氏と政治的関係を結んだ集団がいたことが重要である。

なお、菊池川流域には、石製表飾を採用した木柑子フタツカサン古墳（６世紀第２四半期、前方後円墳）や木柑子高塚古墳（６世紀後半、前方後円墳）が築造された。こうした古墳の被葬者たちは、久々智氏や大伴部氏のような、筑紫君氏と政治的関係を結んだ勢力との関連から理解すべきであろう。

（４）秦人氏

菊池郡に分布する氏族として最後にとりあげるのは秦人氏である。

【史料６】鞠智城跡貯水池跡出土木簡（熊本県教育委員会編 2012。第４図）

「秦人忍□（[米カ]）五斗」

134×26×5　032型式

これは、秦人忍が負担した米の荷札木簡である。出土した粘土層からは７世紀後半～８世紀後半頃に比定される遺物が検出されている（熊本県教育委員会 2012）。この木簡の記載内容について留意されるのは、秦人忍の所属する国・郡・郷（里）などの記載がない点である。このことは、鞠智城が所在する肥後国菊池郡に属する人物からの貢進であったことを示す（佐藤 2014）。つまり秦人忍は、菊池郡の人であった。

次に、菊池郡に秦人氏がいた事情を考えてみたい。秦人というのは、中央の秦氏の傘下にあった渡来系集団である。その出自は多様であり、新羅や加耶などさまざまな地域から渡来してきた人々から構成される。ただし、渡来してきた人々がそのまま秦人に編成されたわけではなかった。秦人とは、もともと畿内の在地豪族や国造に任じられた地方豪族の支配下にあった人民が王権直属の民として割き取られ、秦氏のもとに編成された人々であったとされる（加藤 2009）。だとすれば、菊池郡の秦人につながる渡来人を招来した勢力が問題となってくる。これまでの考察を踏まえると、菊池地域の秦人につながる渡来人を招来した豪族としては、筑紫君氏がもっともふさわしい。

報告要旨3
古代肥後の地方豪族と鞠智城

溝口優樹　（中京大学講師）

はじめに

古代山城は、天智２年（663）における白村江の敗戦をうけ、倭王権の主導によって北部九州から瀬戸内、さらには畿内の各地に築造された防衛施設である。こうした築造時期や立地は、古代山城が唐・新羅による侵攻に備えて造られたものであることを示している。

現在の熊本県菊池市・山鹿市にまたがる米原台地に築かれた鞠智城も、そうした古代山城のひとつである。ただし、菊池川中流域に位置し、そこから有明海を臨めないという立地からは、対外防衛的な機能を疑問視するむきも少なくない。こうした疑問から提起されるようになったのが、現地の築族を牽制するために鞠智城が築かれたとする説である。

その一方、鞠智城の築造が倭王権あるいは大宰府によって主導されたものであったとしても、労働力編成などの面で現地勢力の協力は不可欠であろう。倭王権の地方支配制度に目を向けると、鞠智城を含む古代山城が築かれた７世紀第３四半期は、評―五十戸制の時代であった。評の官人には、かつて国造・伴造・県稲置としてミヤケをおさめてきた豪族たちが任命された。鞠智城が所在した菊池郡あるいはその前身となった評の成立時期は不明であるが、現地の評も築城に関与したことであろう（鞠智城を維持するために菊池郡の前身となる評が立てられた可能性や、山鹿郡あるいは合志郡の前身となる評が鞠智城の所在地を管轄していた可能性も考慮する必要があろう）。このように、鞠智城の造営体制を考えるうえでも、現地勢力に対する視点は欠かせない。これまでにも、鞠智城の築造に協力した現地の豪族を追求する研究がおこなわれてきた。

いずれにせよ、鞠智城の機能や築城の背景などを考えるうえで、現地の勢力は無視できない。こうした問題関心から、本報告では、主に文字資料の分析により、肥後国、特に菊池地域（後の菊池郡域におおむね相当する地域）における豪族の動向を探り、鞠智城が築かれた背景などを考えたい（溝口 2020）。

１．肥後国の豪族

（１）火国の国造

鞠智城が築かれた肥後国は、もともと肥前国とあわせて火国という一つの国をなしていた（『肥前国風土記』総記など）。そこでまずは、火国の国造をとりあげたい。

【史料１】「先代旧事本紀」国造本紀

竺志米多国造。志賀高穴穂朝、息長公同祖稚沼毛_倶命孫、都紀女加定_国造 。

（略）

火国造。瑞籬朝、大分国造同祖志賀多奈彦命児、遅男江命定_賜国造 。

松津国造。難波高津朝御世、物部連祖伊香色雄命孫、金弓連定_賜国造 。

末羅国造。志賀高穴穂朝御世、穂積臣同祖大水口足尼孫、矢田稲吉定_賜国造 。

阿蘇国造。瑞籬朝御世、火国造同祖神八井耳命孫、速瓶玉命定_賜国造 。

葦分国造。纒向日代朝御代、吉備津彦命児、三井根子命定_賜国造 。

天草国造。志賀高穴穂朝御世、神魂命十三世孫、建蔣松命定_賜国造 。

（略）

葛津立国造。志賀高穴穂朝御世、紀直同祖大名草彦命児、若彦命定_賜国造 。

平安時代初期に編纂された『先代旧事本紀』の「国造本紀」には、令制下の肥前・肥後両国に関わる国造として、竺志米多・火・松津・末羅・阿蘇・葦分・天草・葛津立の各国造がみえる。このうち、火・阿蘇・葦北・天草の各国造が、後の肥後国の国造ということになる。

「国造本紀」にみえる系譜に注目すると、火国造と阿蘇国造が同祖関係（同じ先祖から分かれた子孫であるという意識をもつ）にあることがわかる。しかし、阿蘇国造以外は火国造と同祖関係が認められない。かつては、「大国造」のもとに「小国造」が編成されるという「大国造制」なる説も提起されたが、系譜からみる限りでは、火国造と他の国造の間に統属関係があったとはみなしがたい。

ところで、火国造を出した火君氏は、筑前も含めた広い範囲に分布している（第１表）。これについては、本拠地たる八代郡から各地へ進出していったとする見方が強い。しかし、火国各地の豪族が結集して火君氏を構成していたとみることもできよう。

なお、菊池地域は国造氏族の分布から外れており、火国の諸国造と当該地域の関係は明確にはみえてこない。

（２）肥後国の氏族

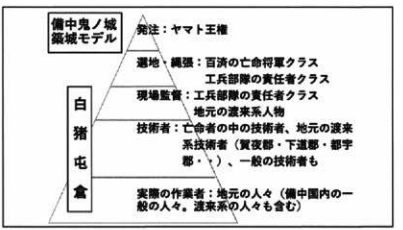
次に、肥後国の氏族分布を確認したい（第２表・第１図参照）。まず指摘できるのは、「君」のカバネをもつ氏族が多い点である。一定地域の諸氏族が同じカバネを有するという例は、列島各地で認められる。例えば出雲国では、出雲臣氏をはじめ、額田部臣氏や日置部臣氏などの豪族が「臣」のカバネをもつ。こうした状況は、国造など地域の有力な豪族を中心として、それと政治的関係のある豪族たちも同じカバネをもつにいたったものだと考えられている。火国の場合、火君氏のカバネが「君」であったから、それと政治的関係を結んだ豪族たちも同様に「君」のカバネを有したのだという考えが浮かぶかもしれない。ただし、北部九州で最も有力な豪族というべき筑紫君氏のカバネも「君」であることに鑑みれば、それに近い肥後北部の豪族たちも、筑紫君氏との政治的関係にもとづいて「君」のカバネを有していた可能性も考えておくべきだろう。

なお、鞠智城が所在する菊池郡（郷配置は第２図を参照）では、久々智、大伴部、秦人の３氏族を復原することができる。カバネをもつ氏族はみられないが、大伴部や秦人を現地で統率する伴造氏族がいた可能性は十分に想定できるだろう。

２．鞠智城周辺の氏族

（１）久々智氏

【図9】備中南東部地域の朝鮮半島関係遺跡

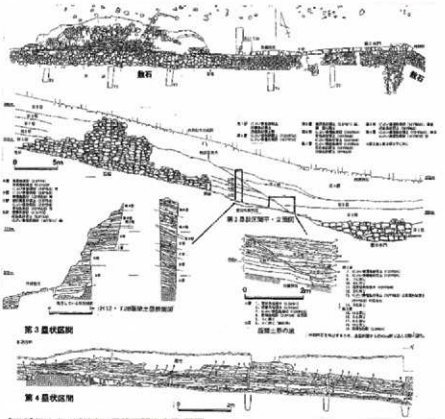


【図10】備中鬼ノ城築城に関わった人々

鞠智城跡出土瓦

【図1】古代山城の分布（村上・乗岡　1999）

【図2】備中鬼ノ城全体図と西門付近イメージ図
（総社市教育委員会）



【図3】備中鬼ノ城第3・4塁状区間の土塁・石垣
（総社市教育委員会2005）

【図4】備中鬼ノ城出土土器（1／8）
（岡山県教育委員会　2013）

（総社市教育委員会2005）

【図5】備中鬼ノ城北門跡写真（1）・図面（2）・鉢山栢嶺山城　（図5-3　忠清南道歴史文化院2007）

【図6】備中鬼ノ城第1水門跡（左）と
忠清北道沃川城峉山城水口（右）

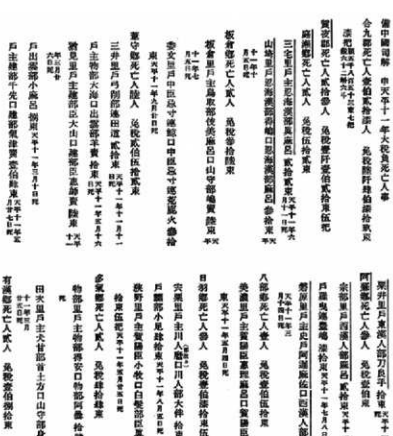
【図7】備中鬼ノ城角楼

【図8】忠清北道稷山蛇山城城壁・敷石

葛原克人　1998「第1章　総社の夜明け　第5節　寺院と山城の築城」総社市史編さん委員会編『総社市史　通史編』総社市
熊本県教育委員会　2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8－32次調査報告－』
成周鐸・車勇杰　1994『磯山蛇山城』（財）百済文化開発研究院
関晃　1966『帰化人』至文堂
総社市教育委員会　1999『奥坂遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 15
総社市教育委員会　2005・2006『古代山城鬼ノ城』1、2、総社市埋蔵文化財発掘調査報告18、19
総社市教育委員会　2011『鬼城山－国指定史跡鬼城山環境整備事業－』
高橋護　1976「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117、ニュー・サイエンス社
高松市教育委員会　2003『史跡天然記念物屋島－史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書Ⅰ－』
高松市教育委員会　2008『屋嶋城跡Ⅱ－史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書Ⅱ－』
高松市教育委員会　2019『史跡天然記念物屋島－史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書Ⅲ－』
竹内理三編　1962『寧楽遺文　上巻』東京堂出版、316-319
田中正弘　2016「基肄城（佐賀県）」『季刊考古学』136、雄山閣、29-31
千賀久　2020「渡来系移住民がもたらした産業技術－畿内地域の鍛冶生産と馬生産－」
吉村武彦編『シリーズ古代史をひらく　渡来系移住民－半島・大陸との往来－』岩波書店、83-142
忠清南道歴史文化院　2007『錦山栢嶺山城－1・2次発掘調査報告書－』
直木孝次郎　1983「吉備の渡来人と豪族」藤井駿先生喜寿記念会編『岡山の歴史と文化』福武書店、73-91
福岡県教育委員会　2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』
湊哲夫・亀田修一　2006「吉備の古代寺院」吉備考古ライブラリィ 13、吉備人出版
宮小路賀宏・亀田修一　1987「神籠石論争」『論争・学説日本の考古学 6歴史時代』雄山閣
向井一雄　2010「古代山城研究の成果と課題－近年の調査成果からみた新古代山城像－」『季刊邪馬台国』105、梓書院
向井一雄　2016『よみがえる古代山城－国際戦争と防衛ライン－』歴史文化ライブラリー440、吉川弘文館
村上幸雄・乗岡実　1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古ライブラリィ 2　吉備人出版
山田隆文　2000「韓国における城壁築城技法の一類型」『東洋史苑』56
行橋市教育委員会　2006・2014『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ・Ⅱ』
吉田晶　1990「第1章吉備と大和　第4節吉備の部民」『岡山県史3古代Ⅱ』岡山県、97-120

［引用挿図］（いずれも一部改変引用）

図1：村上・乗岡　1999、図2：総社市教育委員会提供、
図3・図5-2：総社市教育委員会2005、
図4：岡山県教育委員会 2013、　図5-3：忠清南道歴史文化院 2007、
図8：車勇杰氏提供、その他：亀田作成



○備中國大税負死亡人帳（表裏ニ関する記録）
（備中國天平十一年大税負死亡人帳記を記す行書日本語表人）

備中國司解　申天平十一年大税負死亡人事
合九郡死亡人壹伯貳拾漆人　免税陸阡肆伯漆拾貳束
漆伯貳拾貳束（天平十一年六月廿七日）

賀夜郡死亡人貳拾參人　免税壹阡壹伯貳拾束伍把
廣瀬郡死亡人貳人　免税伍拾貳束
三宅里戸主忍海漢部眞麻呂　貳拾貳束（天平十一年六月十一日）
山埼里戸忍海漢部得嶋口忍海漢部麻呂　參拾束（天平十一年六月廿日）
板倉郡死亡人貳人　免税參拾陸束
板倉里戸主鳥取部使美麻呂口山守部嶋賣　陸束（天平十一年七月廿日）
委文里戸中臣忌寸連鯨口中臣忌寸連荒鳥火　參拾束（天平十一年六月廿日）
東守郡死亡人陸人　免税貳伯伍拾貳束
三井里戸弓削部連田道　貳拾束（天平十一年十一月十一日）
戸主物部大海口出雲部羊賣　拾束（天平十一年五月十六日）
猶見里戸主建部臣大山口建部臣惠勝賣　陸束（天平十一年五月廿六日）
戸出雲部小麻呂　捌束（天平十一年五月十日）
戸主建部牛先口建部氣津賣　壹伯肆束（天平十一年五月廿七日）
建部智麻賣　壹伯肆束（天平十一年六月十日）
大井郡死亡人貳人　免税壹伯參拾陸束
田後里戸主部首加都良　壹伯貳拾陸束（天平十一年五月廿五日）
栗井里戸東漢人部刀良手　拾束（天平十一年六月廿六日）
阿蘇郡死亡人參人　免税壹伯束
宗部里戸西漢人部麻呂　貳拾束（天平十一年六月廿七日）
戸羅鬼連豊嶋　漆拾束（天平十一年七月八日）
磐原里戸主史戸阿蘇麻佐口西漢人部事光賣　拾束（天平十一年五月十四日）
八部郡死亡人壹人　免税壹伯伍拾束
美濃里戸主賀陽臣惠理麻呂口賀陽臣路　壹伯伍拾束（天平十一年五月廿日）
日羽郡死亡人參人　免税壹伯漆拾束伍把
宍栗里戸主川人部口川人部大伴　拾束（天平十一年十月六日）
戸願部小見肆拾束（天平十一年八月五日）
疾野里戸主賀陽臣小牧口白髮部臣眞主賣　壹伯貳拾束伍把（天平十一年五月廿五日）
多氣郡死亡人貳人　免税肆拾肆束
物部里戸主物部得安口物部阿曇　拾肆束（天平十一年五月廿八日）
田次里戸主大甘部首土方口山守部身足　參拾束（天平十一年五月廿六日）
有漢郡死亡人貳人　免税壹伯捌拾束

史料1「備中国大税負死亡人帳」賀夜郡の部分（竹内1962一部改変）

てきた大野城市乙金地区遺跡群（上田 2017、大野城市教育委員会 2017など）が含まれる地域である。新羅系と馬韓系の人々の存在が推測でき、鉄器作り、須恵器作り、農地開発、交通路管理など多様な仕事を行っていたことが推測できる遺跡群である。そして那津官家との関わりも推測できる。

筑前大野城築城にこの地域の人々が動員された可能性は十分あると考えている。鬼ノ城における貢役都と同じように、御笠郡・糟屋郡の人々、例えば大野郷・御笠郷の多くの人々が技術者として、作業者として参加したと推測される。そして鬼ノ城よりもずっと大規模な山城であり、当然御笠郡・糟屋郡だけでなく、その周辺、そしてより広く筑前、筑後の人々が動員されたものと推測される。もしかするとより広く豊前地域の人々も動員されたかもしれない[1]。

おわりに

古代山城と、それらが築かれた地域、地域社会との関わりについて、鬼ノ城を素材として述べてきた。具体的には、鬼ノ城の多様な個性の背景、そしてどのように築城されたのかを地元の貢役都との関わりで述べてきた。

吉備は朝鮮半島から北部九州、そして畿内へ至る陸・海の交通の要衝にあり、鬼ノ城の築城に関しては、国家の意志・意識が強く反映していると考えている。

具体的な築城の様子を推測すると次の通りである。

まず、発注はヤマト王権であり、遷地・縄張などは百済から亡命してきた将軍クラスの人物などが担当したと推測される。そして、現地に張り付いて指導した現場監督、現地指導者のような人物は、亡命将軍の補佐クラスの人物と地元の多少なりともそのようなことを手伝うことができる人物（有力者・渡来系の人々など）が必要であったと考えている。

また、いろいろな技術者、実際の作業を行う人々も当然必要である。鬼ノ城ノ城築城は大規模な工事であり、単に地元である貢役都の人々だけでなく、鬼ノ城全域の技術者や作業者が動員されたものと推測される。近隣の都宇郡、窪屋郡、下道郡の人々も動員されたであろう。

弥生時代以前からこの地の人々、5世紀頃におおむね加耶南部地域から入ってきた人々、6世紀後半以降に畿内を経由して入ってきた新たな加耶（・新羅）系の渡来人たち、そして、白村江の戦い前後以降に入ってきたおもに百済系の人々など、もともとこの地の人々と融合しながら定着していった渡来系の人々が鬼ノ城築城に関与することではかの山城には見られない特徴的・個性的な山城が完成したのではないであろうか。

天平11年（739）の「鬼ノ城大税負死亡人帳」に記された人々の親兄弟の中に鬼ノ城ノ城築城に参加した人物がいたかもしれない。記された本人のなかにも城壁の修繕などに参加した人物もいるかもしれない。

また、これらの技術者や作業に参加した人々の動員などには、ヤマト王権によってこの地に置かれた白猪屯舎なども大きな意味を持ったのではないかと考えている。特に白猪史胆津が作成した田部の丁籍は大きな意味を持ったのではないであろうか[2]。

［註］

（1）筑前大野城が築かれた地域のことについては、九州歴史資料館の松川博一さん、酒井芳司さんにご教示いただいた。記して謝意を表したい。

（2）鬼ノ城築城の政治的な背景として、吉備の総領・大宰との関わりも重要であるが、今回は触れることができなかった。また、機会を改めて検討してみたい。

［参考文献］

明日香村教育委員会 2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』

上田龍児 2017『V章 総括 3節 古墳時代の乙金地区遺跡群』『乙金地区遺跡群23 中巻』大野城市教育委員会、177-180

大野城市教育委員会 2017『乙金地区遺跡群23』

岡山県教育委員会 1993『窯木薬師遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告

岡山県教育委員会 2006『国指定史跡鬼城山』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告203

岡山県教育委員会 2013『史跡鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236

小田富士雄編 1983『北九州周戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書10、名著出版

小田富士雄編 1985『西日本古代山城の研究』日本城郭研究叢書13、名著出版

加藤謙吉 1983『蘇我氏と大和王権』吉川弘文館

亀田修一 2000『鉄と渡来人－古墳時代の吉備を対象として－』『福岡大学総合研究所報』240、165-184

亀田修一 2001『朝鮮半島の石造物と鬼』千田稔・宇野隆夫編『亀の古代学』東方出版、56-75

亀田修一 2009『四 鬼ノ城と朝鮮半島』『シリーズ『岡山学』7 鬼ノ城と吉備津神社－『桃太郎の舞台』を科学する』岡山理科大学『岡山学』研究会、58-71

亀田修一 2014『古代山城は完成していたのか』熊本県教育委員会編『翰智城跡Ⅱ－論考編－』

亀田修一 2015『古代山城を考える－遺構と遺物－』岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城柵調査の現状』平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第28回研修会発表要旨集、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会

亀田修一 2016『西日本の古代山城』須田勉編『日本古代考古学論集』同成社

亀田修一 2018a『日本列島古代山城土塁に関する覚書－版築・壁板について－』『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』大韓民国クリ文化財研究院

亀田修一 2018b『綜合された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城』『大宰府の研究（大宰府史跡発掘調査50周年記念論文集）』高志書院

亀田修一 2018c『古代山城の成立と変容』『翰智城・古代山城シンポジウム－古代山城の成立と変容－』熊本県教育委員会

鬼ノ城学術調査委員会 1980『鬼ノ城』

葛原克人 1998『第1章 総社の夜明け 第5節 寺院と山城の築城』総社市史編さん委員会編『総社市史 通史編』総社市

つまり、朝鮮半島から大和までの陸・海の交通の要衝に山城を築く意図があり、備中鬼ノ城もこの意図に沿って、この地が選ばれ、築かれたと考えている。

そうすると、現在の備中鬼ノ城の場所を選んだ人物は、少なくともこのような山城を使っての防御体制を理解している人物と考えられる。当時のヤマト王権の倭人の中にこのようなことができる人物がいたのであろうか。筆者は、このような山城の配置を考え、防御網を描くことができた人物は純粋な倭人ではなく、百済滅亡前後に日本列島に渡って来た将軍・貴族たち、またはそれ以前に日本列島に来ていた渡来系の人物、その子孫たちであったと考えている。

具体的には、『日本書紀』天智天皇4年（665）条にあるように、長門城を達率答?春初、大野城と基肄城を達率憶禮福留と達率四比福夫らが分担して、指導して築いているので、備中鬼ノ城に関しても、このような人物が来て、指導して、選地・縄張などを行ったのではないかと考えている。

そして、実際の工事をだれが行ったかであるが、選地・縄張を行った達率クラスの人物がこの地に張り付いて指導し、造営したのであろうか。瀬戸内海交通の要衝である吉備であるから、その可能性も十分考えられるが、やはり実際の工事においては、現場監督のような現地で具体的に指導する人物が必要であったと考えている。少なくとも、この地のいろいろな陸路・海路などの交通網、土地の様子を知る人物がいないと、作業は簡単に進まなかったのではないであろうか。

つまり、このような現場監督、または現地の指導者には、達率や将軍たちの補佐クラスの人物と地元の多少なりともそのようなことを手伝うことができる人物が必要であったと考えている。百済滅亡前後に日本列島に渡って来た人物、朝鮮半島の山城作りに何らかの形で関与した渡来系の人物、築城に関する情報を聞くことができた渡来系の人物、そして地元の有力者が必要であったと考えている。また、地元の有力者が自ら築城に関与することも可能であるが、その人物が推薦する人物でも可能であろう。その場合、その周辺には少なくとも渡来系の人々がいたと考えることが素直であろう。

こうして、実際の築城に必要ないろいろな技術者、土塁を築く、版築を指導する、足場を組む、石材を加工する、水門を含めた石積み城壁の石を積む、門を建てる、角楼を造る、城内の管理棟・倉庫を建てる、それらの工事に使用する鉄製工具類を作る、それらの工事に必要な土・石・木などの素材をどこからどのように集めるのか、実際の作業を行う人々をどのように集めるのかが、現場監督およびその周辺の作業チームの仕事になると考えている。このような総合プランナーはやはりある程度の経験者でなければ難しいのではないであろうか。

百済から亡命してきた人々の中のこのような知識や技術を持った将軍、工兵部隊の責任者クラスの人物、工兵部隊のような仕事をしていた人々などが、地元のそのような作業を行うことができる技術者（おもに渡来系の人々、そして一部倭人）や実際の作業をする人々（おもに在地の倭人たち）を集め、指導しながら築城していったのではないであろうか。

以上のような想定をすると、「備中国大税負死亡人帳」に記された人々やその親兄弟の中に備中鬼ノ城の築城や修繕に参加した人物もいたかもしれない。

城周約2.8kmの土塁を築き、4ヵ所の城門を建て、城内に管理棟や倉庫を建てるなどこれまでのこの地域の人々が見たことがなく、関わったことがない大規模な工事であることから、単に地元である賀夜郡の人々だけでなく、備中国全域の技術者や作業者が動員された可能性は高いのではないであろうか。少なくとも近隣の都宇郡、窪屋郡、そして下道郡の人々（例えば秦原廃寺関連の石工さんたち）は動員された可能性が高いのではないであろうか。

前項までに述べてきたように備中鬼ノ城にはほかの古代山城には見られないいくつかの特徴がある。角楼の存在、門に懸門構造を使用していること、北門跡の甕城構造、東門跡とそれ以外の門の唐居敷に残された柱の形の違い、ほかの山城の土塁には見られない柱を土塁に埋め込んで築く技術、堰板をきちんと使った版築土塁構築技術など、ほかの山城と異なる多くの特徴がみられる。東門跡とそのほかの門の柱の違いは時間的な違いかもしれないし、同時並行作業中の施工グループの違いかもしれない。中近世の城作りにおける「割普請」のようなことも十分推測できる。

このような備中鬼ノ城の多様な特徴は、築城に関わった人々の多様性を反映している可能性が十分推測できるのである。

弥生時代以来のこの地の人々、5世紀頃におもに加耶南部地域から入ってきた人々、6世紀後半以降に畿内を経由して入ってきた新たな加耶（・新羅）系の渡来人たち、そして、白村江の戦い前後以降に入ってきたおもに百済系の人々など、もともとのこの地の人々と融合しながら定着していった渡来系の人々が備中鬼ノ城築城に関与することでほかの山城には見られない特徴的・個性的な山城が完成したのではないであろうか。

また、これらの技術者の動員や具体的な作業が進んだ背景には、ヤマト王権中枢部にいた蘇我稲目・馬子親子が関与した白猪屯倉・児島屯倉の存在も大きな意味を持ったのではないかと考えている。百済系渡来人である王辰爾（おうしんに）の甥、胆津（いつ）による田部の丁籍（たべのよぼろのふみた）の検定という作業も大きな意味を持ったのではないであろうか。

2．備中鬼ノ城築城モデルからみた筑前大野城築城

前章でみたように備中鬼ノ城の築城の様子が推測できるならば、同様の方法で筑前大野城を考えるとどうなるであろうか。簡単に述べてみたい。

まず、発注者はヤマト王権であり、選地・縄張は百済からの亡命将軍・貴族である達率憶禮福留と達率四比福夫が指導して行ったと推測される。現場監督には彼らとともに亡命してきた彼らの部下であり、城作りに関与したことがある工兵部隊のメンバーたちがなった可能性が高そうである。ただ、彼らだけでは地元の技術者や作業者を集めることはできないので、地元の有力者や築城以前からこの地に定着していた渡来人たちの協力も得たと思われる。

地域的にはのちの筑前国御笠郡と糟屋郡に属したようであり、御笠郡や糟屋郡の人々、例えば御笠郡城では御笠郷や大野郷などの人々がまず集められたと推測される。御笠郷の地域はまさに大宰府がおかれた地域であり、7世紀後半以降の九州の中心地となる場所である。そして大野郷は山城である筑前大野城跡の西側麓にひろがる地域と推測されており、近年様子がわ

そして、古代山城においては、城門の唐居敷や北部九州の神籠石系山城の列石にこの花崗岩加工技術が使用されている。7世紀の横穴式石室や古墳の墳丘構築にこの切石加工が使用される例もあるが、やはり珍しい例であり、特に地方ではほとんど見かけないものである。7世紀後半（末）であれば、古代寺院の造営が地方に広がる時期であり、古代山城築造と連動して展開する可能性はあるが、このような花崗岩加工技術の各地域における展開に関しては、地域ごとに検討する必要があろう。

ちなみに、備中鬼ノ城周辺では下道郡妹原廃寺の塔心礎などが7世紀前半のものと推測されており、この地域では最古段階のものであり、少なくとも備中鬼ノ城の唐居敷よりは古く、妹原廃寺で使用された花崗岩加工技術が備中鬼ノ城で使用された可能性は十分ある（葛原 1998）。妹原廃寺は、備中鬼ノ城の西南西約6km、総社市妹に位置し、下道郡妹郷に属していた古代寺院跡である。創建瓦は山背広隆寺の初期の瓦と類似しており、山背妻氏と関わる寺院と考えられている（湊・亀田 2006）。

このように、現状では備中鬼ノ城の城門の唐居敷作りには賀夜郡の西隣に位置する下道郡の妹原廃寺関連の技術者が動員された可能性が推測できるのである。

以上のように備中鬼ノ城には日本のほかの古代山城とは異なる特徴がいくつかあり、いずれも朝鮮半島の山城との関連が推測できそうである。日本の古代山城はおもに百済との関わりが考えられているが、備中鬼ノ城のいろいろな特徴は、単に百済地域の山城との関係だけでは説明できないようである。背後に高句麗とつながる朝鮮半島中部地域の新羅山城も念頭において比較研究すべきようである。

さらにこのような特徴は当然具体的な築城者を意識すべきと考えるが、そこには7世紀後半の朝鮮半島の百済などからの亡命者・渡来人たちだけでなく、それ以前からこの吉備地域に移り住んでいた渡来系の人々の存在も念頭において考える必要があると思っている。例えば、花崗岩加工技術に関して述べた妹原廃寺の塔心礎などとの関わりである。

（3）備中鬼ノ城が築かれた地域

備中鬼ノ城が築かれた場所は、「備中国賀夜郡」である。詳細な郷はよくわからないが、「阿曽郷」の中、またはその近くであると推測される（史料1，図9）。

この賀夜郡の当時の様子を教えてくれる数少ない文字史料が、「正倉院文書」の「備中国大税負死亡人帳」（天平11［739］年）である（竹内 1962）。この史料によって、まさにこの「阿蘇郷」の8世紀前半頃の人々を知ることができるのである。

「備中国大税負死亡人帳」の阿蘇郷に記されている人物は、宗部里の戸「西漢人部麻呂」、戸「羅曳連豊嶋」、磐原里の戸主「史戸阿遅麻佐」の口「西漢人部事无賓」である。

この「宗部里」の「宗部」は「宗我部」であろうと吉田晶によって指摘されており（吉田 1990、p.103）、この地域が蘇我稲目による555年の白猪屯倉（しらいのみやけ）設置と関わることがわかるのである。「羅曳連豊嶋」はよくわからないが、残りの3名は近畿地方と関わる渡来系の人々と考えられ、白猪屯倉設置に伴ってこの吉備の地、備中鬼ノ城の麓の地域に入ってきたと考えられる。

「備中国大税負死亡人帳」の賀夜郡には、ほかに庭瀬郷三宅里：忍海漢部真麻呂、庭瀬郷山埼里：忍海漢部得嶋・忍海漢部麻呂、大井郷栗井里：東漢人部刀良手、さらに、都宇郡には、建部郷岡本里：西漢人志申賣、河面郷辛人里：秦人部稲麻呂・秦人部弟嶋、珠川郷鳥羽里：服部首八千石・史戸置嶋・史戸玉賣　などの渡来系の人々の名前を見ることができる。

これらの史料を検討した直木孝次郎は千引カナクロ谷遺跡などの製鉄遺跡が発掘調査される以前からこれらの渡来系の人々と鉄との関わりを述べていた（直木 1983）。阿曽郷の東隣（備中鬼ノ城の東側）に位置する賀夜郡大井郷栗井里に「東漢人部刀良手」など渡来系の人物の名前が見られるが、この大井郷は平城宮跡出土木簡の「大井鍛ト口」の「大井」と考えられており、まさにこの阿曽郷とその周辺地域において渡来人たちの新しい技術を導入して鉄が造られ、鍛などの鉄製品が生産され、そして都へ運ばれていたことが推測できるのである。

さらに、賀夜郡庭瀬郷には「三宅里」があり、そこに「忍海漢部真麻呂」という人物がいたことが記されている。この「三宅里」は素直に読めばこの地域に屯倉関連のものがあったと推測できる。また「忍海漢部真麻呂」は本来大和葛城地域と関わる渡来系の人物と考えられる。この葛城地域は5世紀後半の雄略天皇代に葛城氏の勢力が削がれ、その後その権益を蘇我氏が受け継いだと考えられている（加藤 1983、千賀 2020）。このことから「忍海漢部」も蘇我氏の白猪屯倉・児島屯倉に関わって吉備の地へ移住させられた渡来系の人物の子孫である可能性が考えられるのである。さらに忍海部に関しては、『肥前国風土記』に記された三根郡漢部の忍海漢人が武器を作ったという記事から「忍海部」はもともと武器武具製造に関わっていたと考えられている（関 1966、p.89）。そうすると吉備を代表する鉄器生産遺跡である窪木薬師遺跡（5世紀前半～7世紀前半）が位置する賀夜郡服部郷とは郡が異なり、距離も約6.5km離れているが、6世紀代に鍛・刀子・直刀などが作られていた窪木薬師遺跡と何らかの関わりがあった可能性は無視できない（岡山県教育委員会 1993）。

また、現時点で日本列島最古の製鉄遺跡である千引カナクロ谷遺跡を含む奥坂遺跡群（6世紀後半～8世紀前半の製鉄関連遺跡6ヵ所で、製鉄炉が20基、横口付木炭窯が24基確認されている。総社市教育委員会 1999）が位置する地域は、まさに備中鬼ノ城の麓に位置し、律令期には賀夜郡阿蘇（曽）郷に属していた。この遺跡群が操業していた最後の時期と「備中国大税負死亡人帳」に記された人々が生活していた時期は重なるのである。

（4）いつ、だれが、どのように、備中鬼ノ城を築いたか（図10）

備中鬼ノ城はどのように造営されたか。「はじめに」で述べたような考えが正しければ、発注者はヤマト王権と考えることが素直であろう。次に、だれが、この場所を選んだのか。

663年の白村江の戦いにおける敗戦を契機として、まず、664年に水城、665年に長門城、筑前大野城、肥前基肄城が築かれ、そして667年に対馬金田城、讃岐屋嶋城、河内・大和国境に高安城が築かれた。筆者は、これまでも述べてきたように、備中鬼ノ城もこの頃に造営されたと考えている。

奥側が平らになっており、階段などはない。門の通路部分側面の壁は、西・南門跡は板が貼られていたものと推測されているが、北門跡と東門跡は手前が板、奥が石垣のようである。

門の入口に関しては、西門跡は南からのスロープ(石敷き?)があり、北・南・東門跡は門の床面と外側の地面との間に高さ2mほどの段差があり、北門跡ではその段差部分に石垣が確認されている（図5）。朝鮮半島の山城に見られる塁門（けんもん）のようである。さらに北門跡には床面中央に排水用の石組み溝が作られている。このような塁門で排水溝を持ち、通路側面が石垣になった例は667年に築かれた讃岐屋嶋城跡に見ることができる。さらに讃岐屋嶋城跡（高松市教育委員会 2003・2008・2019）と儛中鬼ノ城北門跡はどちらも城内にはいると直進できずに左に曲がるようになっている。朝鮮半島の山城ではこのような構造を「内甕城（うちおうじょう）」と呼んでいる。

そしてこのような門構造は日本のほかの古代山城においては見ることができないが、朝鮮半島百済地域の忠清南道錦山稍嶺山城の南門跡に見られる（図53、忠清南道歴史文化院 2007）。錦山稍嶺山城の南門跡は前面が少し壊れており、不確実ではあるが、門の床面と外側地表面には約3mの段差がある。門礎などはわからないが、通路側壁には石垣がある。また門中央ではないが、石組みの排水溝も作られている。

このように錦山稍嶺山城の南門跡は全くそっくりというわけではないが、儛中鬼ノ城北門と極めてよく似ている。錦山稍嶺山城の築城年代は出土した文字瓦から6世紀末頃または、7世紀中頃と考えられている。

②水門構造

次に儛中鬼ノ城では通水口を持つ水門跡が5ヵ所確認されており、その特徴として通水口の出口が外側地表面から1～2mほどの高さにあることである（図6左）。単純に地形との関わりでこのような高さになった可能性もあるが、日本で確認されている古代山城の通水口の出口は、一般的に外側地表面と同じ高さになっている。一部豊前御所ヶ谷神籠石（行橋市教育委員会 2006・2014）では外の地面から約1.2mのところにあり、筑前大野城跡（福岡県教育委員会 2010）や肥前基肄城跡（田中 2016）で外側地表面からやや高いものがあるが、多くの古代山城の通水口出口は基本的に外側の地面に築かれており、儛中鬼ノ城の通水口出口の位置はやはり気になる。

ちなみに、朝鮮半島においては百済地域の山城の通水口出口は地面に接するものが多く、朝鮮半島中部以東の新羅地域の山城のものは外側地面から離れたものが多いようである（図6右）。

③角楼跡

儛中鬼ノ城で角楼（かくろう）と呼ばれているもの(図7)は、朝鮮半島では堆（ち）、雉城（ちじょう）などと呼ばれており、基本的に城壁から方形に飛び出したもので、敵が攻めてきたときに2方向から矢を射かけることができるようにした防御用の施設である。同様の意味で半円形などに突出したものは曲城（きょくじょう）と呼ばれている。

このような方形突出部は日本で明確なものはほかに対馬金田城跡でしか知られておらず、そのほか讃岐屋嶋城跡でやや独立したものが、また筑前大野城跡で比較的類似するものが確認されている。ほかの古代山城では確認されていない特徴的な構造物である。

朝鮮半島では高句麗・新羅の山城において方形・半円形の突出部が比較的多く確認されており、百済においては一部で確認されている。前述の稍嶺山城においては築城時かどうかわからないが、方形の突出部が城壁に付加されている。韓国忠北大学校におられた李勇先生によると、新羅地域のものは横幅に対して長さが長く、百済地域のものは長さが短い傾向があるとのことである。これにしたがえば、儛中鬼ノ城や対馬金田城跡の堆（角楼）は百済系といえそうである。

④城壁の築き方

この角楼では柱穴が城壁の表面に埋め込まれた状況で確認された。城壁(土塁・列石)の前面に柱が確認された例は九州の神籠石系山城では多数見られるが、城壁の中(表面)に柱穴が埋め込まれた例はないようであり、1つの特徴といえそうである。

このような城壁表面に柱穴が埋め込まれて確認される例は高句麗の平壌大城山城を始め、忠清北道鶏山蛇山城（図8：成・車 1994）など朝鮮半島中部地域に比較的見ることができる。百済地域においても大田月坪洞山城で見ることができるが、数はあまり多くないようである（山田 2000）。

また、城壁の内外床面の敷石(図3)は、日本の古代山城では明確なものは確認されていないようである。朝鮮半島においてもほとんど知られていないが、忠清北道蛇山城の城壁の外側に見ることができ(図8)、百済後期の王城である扶餘山城では城壁の内側に見ることができる。

そして、城壁の版築方法であるが、日本列島での古代の版築は山城の土塁や寺院建物の基壇に使用されており、朝鮮半島から伝えられた技術であると認識されている。

一般的に方形（長方形）に堰板を組み立て、その中に土を入れ、突き固めながら、高くしていくものである。しかし、これまで発掘調査された古代山城の土塁を詳細に検討すると、山の斜面に城壁を積み上げる場合は、3つの壁（連続する場合は2つの壁になる）に堰板を使用した痕跡が確認できる、またはそのように推測できるものは儛中鬼ノ城と筑前大野城跡の一部の土塁しかないようであり、ある面で簡略化したのか、その方法が理解されていなかったようである。いずれにせよ、朝鮮半島からの技術伝播のあり方の検討材料の一つになっている（亀田 2018a）。つまり、儛中鬼ノ城に関しては、より正確な版築技法が伝えられていた可能性があるのである。

⑤花崗岩加工技術

最後に、花崗岩加工技術について述べる。この場合の加工は、単に「割る」「調整する」ではなく、表面を「平らに、またはきれいに加工する」という意味での加工技術である。

日本列島において花崗岩をきれいに加工した例は一部古墳時代前期や中期に見られるが、一般的に見られるようになるのは飛鳥時代に入る頃、6世紀末～7世紀初め頃以降と考えている（亀田 2001）。寺院の礎石などに花崗岩が使用されるときにこのような加工技術が使用されるようになったものと推測されている。

報告要旨２

古代山城と地域社会－備中鬼ノ城を中心として

亀田修一　（岡山理科大学教授）

はじめに

西日本地域に築かれた古代山城（小稿では朝鮮式山城・神籠石［こうごいし］系山城をあわせてこのように呼ぶ）に関する研究は、古くよりなされ、これまでの成果では、660年の百済滅亡前後の朝鮮半島における混乱、663年の白村江の戦いの敗戦を契機として、対唐・新羅用に築かれたとの考えがおもな意見と考えられる(図1)。ただ、細部ではいろいろな意見もある。

筆者はこれまで発表してきた論文など（亀田　2009・2014・2015・2016・2018a・b・cなど）に記したように、660年の百済滅亡、663年の白村江の戦いの敗戦を契機として、ヤマト王権の主導のもの、百済から亡命してきた将軍・貴族たちが指導し、まず、北部九州、そしてその範囲を広げて、瀬戸内海沿岸地域、近畿地方に古代山城が築かれたと考えている。そして、いつまで造られたのかはよくわからないが、大多数の山城は8世紀初め頃にはその役目を終えたようである。

一方、これらの古代山城の築城目的として、筑前大野城や肥前基肄城などのように対唐・新羅防御用だけでなく、いわゆる神籠石系山城に関しては、地域支配のためであるという考えもある。ただ、筑前大野城や肥前基肄城に関しても、8世紀には防御用だけでなく、地域支配の用途に使用されたと考えられている。

小稿では、これらの古代山城と、それらが築かれた地域、地域社会との関わりについて述べたいと考えているが、今回はいろいろな特徴が明らかになっている備中鬼ノ城を素材として取り上げたい。

古代山城に関する諸先学の研究成果に関しては、報告書も含め多くのものがあるが、ここでは末尾におもなものの、今回の発表に関わるものをいくつかあげさせていただいた（小田 1983・1985、宮小路・亀田 1987、向井 2010・2016など参照）。

１．備中鬼ノ城

備中鬼ノ城（きのじょう）は岡山県総社市奥坂に所在する鬼城山（きのじょうざん：標高366.6m）に位置する（図2：高橋 1976、鬼ノ城学術調査委員会 1980、総社市教育委員会 2005・2006・2011、岡山県教育委員会 2006・2013、亀田 2009）。南に下がる斜面部に城壁がめぐらされた城周2790mの土城である。この山城に関する古代の記録はなく、いわゆる神籠石系山城である。

古代の「国郡」は、「備中国賀夜（かや）郡」で「郷」はよくわからないが、鬼城山の南東の麓に「東阿曽・西阿曽」という地名が残っており、この付近が「阿曽郷（阿蘇郷・阿宗郷）」に比定されている。そのほかの周辺の郷名を検討すると、備中鬼ノ城が「阿曽郷」に含まれていた可能性はあると思われる。

(1) 備中鬼ノ城の遺構・遺物の概要

城壁は基本的に基部に削石列石を配した版築土塁で築かれているが、一部石垣や石塁で築かれており、一般的な印象としては石城のイメージが強いようである。城壁は全周しており、城門跡が4ヵ所、通水口をもつ水門跡が5ヵ所、角楼跡が1ヵ所確認されている。4ヵ所の城門跡には方形（3ヵ所）と円形（1ヵ所）の刳り込みをもつ唐居敷（からいじき、花崗岩切石）が使用されており、いずれも軸摺穴（じくずりあな）、方立て用の穴があけられている。西門跡南東部第3礎状区間には、いわゆる高石垣と呼ばれている石垣があるが、筆者はこの石垣の正面観における上部の石の積み具合の不揃い、石垣背後の掘方、裏込めの状況などから少なくとも一度、そして一部は修築されたのではないかと考えている（図2・3）。

城内の施設としては、礎石建物跡が7棟、土手を持つ貯水施設跡が2ヵ所、溜井跡、烽火台跡（?）、鍛冶場跡3ヵ所などが確認されている。礎石建物跡は2×6間の側柱建物跡が2棟、3×4間の総柱建物跡が2棟、3×3間の総柱建物跡が3棟である。側柱建物跡の周辺では転用硯が出土しており、管理棟の可能性が考えられている。また鍛冶場の1ヵ所では段状遺構の中に9基の鍛冶炉跡が並び、上屋の存在も推測されている。そして7世紀後半の土器が出土している。また掘立柱建物跡に関しては、7世紀後半～8世紀前半のものと推測される確実なものは確認されていないようである。このほか明確な建物は確認できていないが、基壇状遺構と呼んでいる場所では基壇の一部である可能性がある石列が確認され、その付近で7世紀後半から8世紀前半の須恵器・土師器などがまとまって出土している。

出土遺物は、土器は一般的な杯類がほとんどである（図4）が、須恵器甕や土師質の甕・鍋・甑などの煮炊き具を含み、そのほか円面硯、転用硯、鍛冶関係遺物、瓦塔、水瓶、隆平永寶（初鋳796年）などが出土している。時期的には7世紀後半から8世紀前半、そして9世紀から11世紀のものに区分されており、前者の遺物が山城関係、後者の遺物は宗教施設関係のものと考えられている。また、前者の土器は、7世紀中葉～後半の可能性があるものが少々で、多くは7世紀末前後のものである。つまり、備中鬼ノ城は7世紀後半に築城され、8世紀前半まで使用されるが、城としての機能はこの頃なくなり、9世紀から宗教施設として使用され、これが後の新山寺へつながった可能性が考えられている。

このように備中鬼ノ城は、城壁は完周し、門も構築され、城内に礎石建物などの施設があり、さらに城壁の修繕の可能性もあり、完成した城といって良いと思われる。

(2) 備中鬼ノ城のいろいろな特徴とその背景

①城門構造

備中鬼ノ城では 4ヵ所の城門跡が確認されている。いずれも立派な花崗岩製の唐居敷をもつ掘立柱構造の楼門と考えられている。柱の形は方形(西門跡・南門跡・北門跡)と円形(東門跡)がある。門を建造したグループの違いなのか、時間差なのかよくわからないが、いずれも床面に石を敷いている。そして西門跡と南門跡は門の奥側に石で作られた階段を持っている。東門跡は奥側に大きな岩があり、ここに木のはしごのようなものを架けたのかもしれない。北門跡は

【参考文献】

赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」『月刊文化財』631、2016年
伊藤　循『古代天皇制と辺境』同成社、2016年
井上辰雄「大化前代の肥後」『正税帳の研究』塙書房、1967年
小田富士雄『古代九州と東アジアⅡ』同成社、2013年
狩野　久「瀬戸内古代山城の時代」『坪井清足先生卒寿記念論文集』2010年
木村龍生「鞠智城の役割に関する一考察」『鞠智城跡Ⅱ』論考編1、2014年
鈴木拓也「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4、2010年
永山修一『隼人と古代日本』同成社、2009年
三上喜孝「古代北方辺要国の統治システム」『古代国家と北方世界』同成社、2017年
向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2017年
八木　充「百済滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』722、2008年
矢野裕介「鞠智城の変遷に関する一考察」『大宰府の研究』2018年
吉村武彦「列島古代史における鞠智城」『鞠智城2017・2018年度』
熊本県教育委員会、2019年
熊本市『新熊本市史』史料編第二巻古代・中世、1993年　［肥後国関係史料］
熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』2012年
熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』論考編1・2、2014年

熊本県教育委員会『古代山城鞠智城を考える』山川出版社、2010年
熊本県教育委員会『古代山城鞠智城を考える』Ⅱ、2012年
熊本県教育委員会『鞠智城シンポジウム』2012、2013年度
熊本県教育委員会『鞠智城東京シンポジウム』2014～2016年度
熊本県教育委員会『鞠智城2017・2018年度』2019年
熊本県教育委員会『鞠智城シンポジウム2019年度』2020年
熊本県教育委員会『鞠智城と古代社会』1～8、2013～2020年
大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』高志書院、2018

【8世紀の防人年表】

713 和銅6　10 防人派遣に専使から通達へ
730 天平2　9 諸国の防人を停止　［筑紫滞在の防人帰還策はなかったか］
737 天平9　9 筑紫の防人を停止し、本郷に帰す。筑紫人に壱岐・対馬を守らせる　［2000余人。「駿河・周防・筑後正税帳」に記載］
742 天平14　1 大宰府を廃止する
745 天平17　6 大宰府を復活する
757 天平宝字元　⑧ 東国が防人を発遣する。西海道 7国兵士1000人を防人司に充てる
759 天平宝字3　3大宰府の上申に対し、東国防人は不許可、管内防人は10日を築城（怡土城か）に充てる
766 天平神護2　4 大宰府が東国防人の再配置を請う。筑紫を留の東国防人を充て、筑紫6国兵士を減じ、不足分の東国から差発して防人3000人を充たす。
783 延暦2　5 残留希望者と逃亡防人で防御し、不足分を当土兵士から充てる
795 延暦14　11 防人を廃止し、兵士で対応する

【古代山城関係年表】

660 斉明5　9 唐・新羅による百済の滅亡が倭国に伝わる。
661 斉明6　5 斉明天皇が、朝倉橘広庭宮に遷る。7斉明没。
663 天智2　8 白村江の戦いで大敗。
664 天智3　5 唐使郭務悰が、表函・献物を進上する。この年、対馬島・壱岐島・筑紫国等に防と烽とを置き、筑紫に水城を築く。
665 天智4　8 長門国に城、筑紫国に大野・椽（基肄）の二城を築く。9唐使劉徳高・郭務悰と疆埸（旧百済官人）が、表函を進上する。遣唐使派遣。
667 天智6　3 近江大津宮に遷都。唐使が、遣唐使を筑紫に送る。11大和国高安城・讃岐国屋島城・対馬国金田城を築く。
668 天智7　1 天智天皇即位。9新羅が調を貢納する。唐が高句麗を滅ぼす。この年、唐が倭国征伐の船舶を修理するが、新羅攻撃かという（『三国史記』）。
669 天智8　1 蘇我赤兄が筑紫率。8高安城を造ろうする。冬に、高安城を修り内の田税を収む。9新羅が進調。この年、遣唐使を派遣。唐使郭務悰ら2000人が遣わされる。
670 天智9　2 戸籍（庚午年籍）を造り、盗賊・浮浪を断つ。高安城を修りて、穀と塩とを積む。また長門城一つ・筑紫城二つを築く。8新羅が高句麗王を冊立（唐・新羅の対立）。9遣新羅使。
671 天智10　1 冠位・法度を施行（「近江令」の存否）。唐使が上表。天智天皇没。
672 天武1　6 壬申の乱。大海人皇子が近江朝廷軍を破る。
673 天武2　2 大海人皇子が即位（天武天皇）。
675 天武4　2天武が高安城に行幸する。3栗隈王を兵政官長とする（栗隈王は壬申の乱時に筑紫大宰）。
10 畿内の諸王・有位者に武装させる。［676,679, 684,685,693,699,700］
676 天武5　2 唐が朝鮮半島支配を放棄する。
679 天武8　11 龍波に羅城を築く。
683 天武12　11 諸国に詔して、陣法を習わせる。
685 天武14　11軍用の楽器・兵器の私家所蔵をやめ、郡家に収める。
686 朱鳥1　9 天武天皇没。持統皇后称制。
689 持統3　6 浄御原令施行。戸籍作成（庚寅年籍）。兵士への武事教習。
9 石上朝臣麻呂・石川朝臣蟲名らを筑紫に遣し、位記を給送する。また新城を監す。10天武が高安城に行幸する。
690 持統4　1 持統天皇即位。
693 持統7　12 諸国に陣法博士を遣わし、兵法を教習させる。
694 持統8　12 藤原宮遷都。
698 文武2　4 南島に使を遣わし、国をもとめさせる。5大宰府に、大野・基肄・鞠智三城を繕治せしむ。
8 高安城を修理する（天智5年築城）。
699 文武3　9 天武が高安城に行幸する。11南島より帰る。
12 大宰府に、三野・稲積二城を修せしむ。
700 文武 4　6 筑紫惣領に、覓国使を脅迫した薩末比売、衣評督・助督、肝衝難波を処罰させる。
［覓国使は698年の遣使か、新たな遣使か］10 筑紫惣領・　大弐を任ず。
701 大宝1　8 高安城を廃す。大宝律令完成。
702 大宝2　8 命に逆らう薩摩・多褹を征討し、戸を校へ吏を置く。［国司・島司］
10 唱更国司ら「国内要害の地に柵を建て、戍を置きて守らむ」と言う。
712 和銅 5　1 河内国高安烽を廃す。
713 和銅 6　4 大隅国を置く。
718 養老2　養老律令（施行は 757年〈天平宝字1〉）
719 養老3　12 備後国安那郡茨城、蘆田郡常城を俘する。
756 天平勝宝8　6 怡土城を築く。
765 天平神護1　3 大宰大弐佐伯宿祢今毛人を築怡土城専知官、少弐采女朝臣浄庭を修理水城専知官とする。

・「秦人忍冂五斗」

3. 鞠智城の役割

a 坂本経堯氏以来、指摘されている３つの役割

＊大宰府の支援

＊有明海方面の防御

＊九州南部の夷狄対策

b まとめ

＊鞠智城の役割は、律令制国家の辺要政策との視点から考えれば、大宰府の維持と関連づけられて築城され、有明海方面の番国、九州南部の隼人対策のために設けられた。しかし、対隼人策の変更にともない、鞠智城の役割は変化したと思われる。ただし、文字史料では解明できず、鞠智城Ⅲ期（８世紀第１四半期後半から８世紀第３四半期）における考古学的調査の検討に待たざるをえない。最終的には、兵庫・不動倉の維持が重要になる。

むすびに

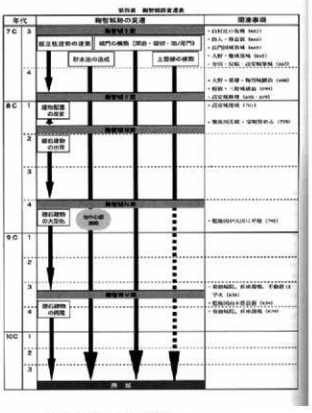
鞠智城の役割を、古代国家の辺要政策との関係という視点からみれば、次のようになる。筑紫（西海道）は、半島・大陸の番国と九州南部の夷狄（隼人）対策が必要な位置にあり、大宰府と筑紫城がその拠点として機能した。大野城・基肄城・鞠智城が、同時に磐石の対策となっていることは、大宰府防衛の一環であることを示すだろう。

また、白村江の敗戦以降は、唐・新羅への防御体制が構築され、対馬・壱岐から高安城までの防衛ライン（西日本防衛ラインと呼ぶ）がつくられた。しかし、西日本防衛ラインは大宝令施行後、唐・新羅との外交が安定化するとともに廃止された。

大野・基肄・鞠智城が筑紫城として維持されたのは、番国・夷狄に対する「西辺」の役割を持たされたからであるが、隼人への夷狄政策の変更にともなって、鞠智城の役割は変化したと思われる。その様相は、鞠智城Ⅲ期における発掘調査の結果から求めなければならない。その後は、いくつかの変遷があるが、兵庫・不動倉が重要な意味をもった。

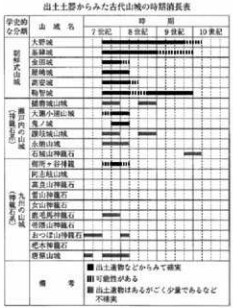
なお、筑紫には防人が派遣されたが、防人の派遣は停廃がある。防人停止中には、筑紫の兵士が動員されることになった。筑紫の兵士は、全国で兵士徴発が中止された時期にも、継続して徴発された。筑紫は「辺要」地域として兵士などの軍備が重視されたのである。

【図１】



（「鞠智城跡Ⅱ」）
2011

【図２】



「古代山城研究の現状と課題」
（赤司善彦『月刊文化財』631.2016）

宇土郡 額田部君
八代郡 高分部 *宅部*
天草郡
葦北郡 山部、刑部、日奉部、家部、他田部、真髪部（白髪部） *大伴部*、
球磨郡 久米部
※イタリックは郷名より推定

3. 特徴

a 名代・子代の設置時期 ［顕宗以前は、部民制は存在せず。仮託］

＊允恭 刑部（允恭紀の名代・子代）
清寧 白髪部
顕宗 久米部（幼年期の名代・子代か）
安閑 春日部（安閑紀の名代・子代）
敏達 他田部

b 私部、壬生部、日奉部の設置

＊577 敏達6 私部、日奉（日祀）部の設置
607 推古15 壬生部の設置
＊部民の再編期に設置
・王権との関わり

c 建部

＊西海道の建部
・筑前、肥後、日向、薩摩

(2) 肥後国と菊池郡

1. 肥後国の兵士と軍団

a 兵士

＊『類聚三代格』弘仁4年（813）8月9日太政官符
・兵士4000人⇒2000人 4軍団（団別500人）
＊『平城宮木簡』六「解説」
・1軍団は、200～400人程度

b 軍団

＊4軍団
・『類聚三代格』弘仁4年（813）8月9日太政官符
＊益城軍団
・「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」（平城宮木簡9884）

2. 肥後国菊池郡の特徴

a 郡家と郡名寺院

＊西寺遺跡（郡家か）
＊十蓮寺跡（郡名寺院か）

b 藤原光明子との関係（東大寺出土木簡）

＊菊池郡子妻郷人 大伴部鳥上・稲依が施薬院で仕奉。東大寺大仏建造と関係。
・皇后宮職の封戸か。施薬院は天平2年（730）設置

(3) 鞠智城の特徴と役割

1. 所在地と特徴

a 所在地

＊肥後国菊池郡城野里（郷）
＊菊池郡の郷
・城野、水島、辛家、夜開、子妻、山門、上甘、日理、柏原

b 鞠智城と大野城・基肄城

＊大野城と基肄城は、大宰府外郭線で結ばれている。
＊鞠智城は、大野城・基肄城とは性格が異なる。

2. 鞠智城の特徴

a 地形的・地理的特徴（木村龍生説）

＊交通の要衝、穀倉地帯との関係、天然の要害地
＊可視範囲は菊鹿盆地のみ

b 史料上の施設

＊天安2年（858）2月 菊地城院兵庫 （日本文徳天皇実録）
＊天安2年（858）6月 菊地城院兵庫、不動倉 （日本文徳天皇実録）
＊元慶3年（879）3月 菊池郡城院兵庫 （日本三代実録）

c 鞠智城の考古学的画期 （図1）

第1期 7世紀第3四半期～第4四半期 創建期
第2期 7世紀末～8世紀第1四半期前半
コの字型建物群、八角形建物、土器等の遺物出土量が多く、内部施設が充実化。
第3期 8世紀第1四半期後半～第3四半期 礎石建物出現
第4期 8世紀第4四半期～9世紀第3四半期 礎石建物の大型化
第5期 9世紀第4四半期～10世紀第3四半期 倉庫機能

d 第3期の特徴

＊矢野裕介氏による整理
・城の転換期にあたり、管理棟的建物群はそのまま存続するものの、掘立柱の総柱建物が礎石建物に建て替えられるなど、施設の耐久性向上が図られるのが特徴として挙げられる。その一方で、土器の出土が皆無に等しく、最低限の人員が配置されるなど、城の管理・運営に変化が生じたのもこの時期となる。
＊木簡の出土

b 和銅３年～養老元年（717）
＊隼人に対する夷狄観の変化（永山修一説）
＊西海道における隼人政策の変化
・文献史料では確認ができない

(4) 古代山城築城の技術的基礎

1. 前方後円墳、横穴式石室
a 西海道・肥後における古墳築造技術
＊筑後　石人山古墳、岩戸山古墳
＊豊前　五所山古墳
＊肥前　船塚古墳
＊肥後　長目塚古墳、江田船山古墳
＊日向　男狭穂塚、女狭穂塚
b 菊鹿盆地の古墳時代後期の主要古墳（『鞠智城Ⅱ』）
＊盆地西部
・チブサン古墳、中村双子塚古墳、オブサン古墳（円墳）
＊後期後半は盆地東部に築造
・袈裟尾高塚古墳（円墳）
＊木柑子フタツカサン古墳、木柑子高塚古墳
2. 首長居館（豪族居館）
a 豪族居館
＊筑後国御原郡（現小郡市）　上岩田遺跡
b 国造の居館
＊肥後地域の国造
・火国造、阿蘇国造、葦分国造、天草国造
＊国造居館は不明

(5) 律令制における山城関連の維持策

1. 城関係の維持（『令集解』賦役令雑徭条「古記」（大宝令の注釈書））
a 軍防令
①軍団置鼓条　（倉庫の修理）
軍団（略）倉庫損壊。須修理者。十月以後聴役兵士。
②城隙条（城隙（塀）の修理）
城隙崩頽者。役兵士修理。若兵士少及无者。聴役人夫。所役人夫。皆不得過十日。
蕃使出入条　（蕃使の出入の際の防援）
蕃使出入。伝送囚徒及軍物。須人防援者。皆量差所在兵士遣送。
緑辺諸郡人居条　（辺境諸郡の城堡の修理）
其城堡崩頽者。役当処居戸。随閑修理。

b 営繕令
①貯庫器仗条
貯庫器仗。有生渋綻断者。三年一度修理。在外者。役当処兵士及防人。
②津橋道路条
津橋道路。毎年起九月半。当界修理。十月使訖。其要路陥壊停水。交廃行旅拘時月。量差人夫修理。非当司能弁者申請。
c 補亡令
①有盗賊条
有盗賊。（略）率随近兵士及夫。（略）登共追捕（略）
※皆此令条之内。不在雑徭之限

三　肥後国と鞠智城

(1) 律令以前の肥後

1. ヤマト王権と肥後
a 江田船山古墳出土の銀錯銘大刀　［５世紀後半］
＊「治天下獲□□□歯大王世奉事典曹人名无利弖八月中用大鉄釜并四尺廷刀八十練九十振三寸上好刊刀服此刀者長寿子孫洋々得□恩也不失其所統作刀者名伊太和書者張安也」
＊獲加多支歯大王（雄略天皇）世に「典曹人」として、ヤマト王権に出仕
・埼玉・稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣　「杖刀人首」
b 『書紀』敏達12年（583）是歳条　［６世紀後半］
＊（日羅）進退跼拝、歔欷而曰、「於松嶺宮御寓天皇之世、我君大伴金村大連、奉為国家、使於海表、火葦北国造刑部靫部阿利斯登之子、臣達率日羅（略）」
＊火葦北国造刑部靫部阿利斯登之子
・宣化朝、我君大伴金村大連、臣達率（百済）日羅
2. 肥後国の氏・部民
a 主要な氏・部民
玉名郡日置部、日置部公、
山鹿郡
菊池郡 大伴部、（秦人）
阿蘇郡 阿蘇君、鳥取
合志郡 壬生部、日下部、鳥取　［合志評か］
山本郡
飽田郡 建部公（君）、春日部、*私部*
託麻郡
益城郡 山部、大伴君、

・割日向国肝坏・贈於・大隅・姶羅四郡、姶凱大隅国。

c 薩摩・大隅支配の特徴

＊薩摩国の「隼人郡」（郷数が少ない）の存在

＊薩摩・大隅国への班田制

・延暦19年（800）12月　班田制の施行

二　筑紫（西海道）の辺要政策と古代山城

(1) 大宰府以前の官司・官人

1. 那津官家

a 宣化元年５月条

＊詔曰、（略）夫筑紫国者、遐邇之所朝届、去来之所関門。是以、海表之国、候海水以来賓、望天雲而奉貢。

b 那津官家に、河内茨田屯倉・尾張屯倉・新家屯倉・伊賀屯倉の穀を運ぶ。

＊那津官家に諸国の屯倉から穀を支援する体制

2. 筑紫大宰

a 推古17年（609）４月条

＊筑紫大宰奏上言、百済僧道欽・恵弥為首、一十人、俗七十五人、泊于肥後国葦北津。（略）

b 筑紫大宰は、推古朝に設置されたか

3. 筑紫・吉備・周防・伊予の総領（大宰）

a 総領派遣と西日本の山城

＊筑紫

＊周防（長門を管轄）　長門城、（石城山）

＊吉備（播磨を管轄）茨城、常城、（鬼ノ城、大廻小廻、城山）

＊伊予（讃岐を管轄）　屋島城、（永納山、城山）

(2) 大宰府

1. 大宰府と防人司

a 防司（防人司）

＊職員令大宰府条

・防人　正１人、（掌。防人名帳。戍具。教閲。及食料田事）

・　　佑１人、（掌同正）

・　　令史１人

＊考課令最条

・防司（大宰令も）

b 防人司

＊『続日本紀』天平宝字元年閏８月壬申条

2. 防人の歴史

a 『日本書紀』の防人

①大化２年　改新詔

②天智３年是歳条

＊於対馬島・壱岐島・筑紫国等、置防与烽。又於筑紫、築大堤貯水。名曰水城。

③天智10年11月条

＊唐国使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、總合二千人、（略）忽然到彼、恐被防人。

④天武14年12月条

＊遣筑紫防人等、飄蕩海中、皆失衣裳。則為防人衣服

⑤持統３年２月条

＊詔、筑紫防人、満年限者替

※白村江の敗戦以降に防人が設けられる

※軍防令兵士上番条は「向防三年」（交替制）

b 軍防令

＊軍団・兵士・防人・城柵・烽など辺要策に密接に関係

c ８世紀における防人制の変遷

＊⇒【防人年表】

＊８世紀になると、必ずしも東国防人が常駐したとはかぎらない。

3. 兵士と防人

a 西海道の兵士制

＊西海道は、８世紀（養老３年〈719〉以降）における兵士の停廃政策の適用外地域

b 防人停止時における西海道の兵士動員

＊天平宝字元年（757）閏８月条　７国　日向国を含む

＊天平神護２年（766）４月条　６国　日向国を除くか

(3) 筑紫の対隼人政策

1. 大宝令制定以前（天智～持統朝）の隼人に対峙する国

a 隼人への対峙国

＊九州島東側－日向国

＊九州島西側－肥後国

b 薩摩建国と肥後

＊薩摩国高城郡は、肥後国からの移住政策の郡

・合志、飽田、宇土、託万郷（４／６）

2. 「隼人」認識の変化

a 和銅３年（710）まで

＊蝦夷・隼人は同列扱い

・日向・薩摩・大隅は、対隼人策の国
＊大宝令では、壱岐・対馬と日向か
b 大宰府・筑紫関係
＊職員令大宰府（養老令）
・「烽候、蕃客・帰化・饗讌事」
・大工、少工「城隍、諸営作事」　［匠司］
・防人正、佑、令史「防人名帳」　［防人司］
c 軍防令縁辺諸郡人居条（東辺条）
＊凡緣東辺北辺西辺諸郡人居。皆於城堡之内安置。其営田之所。唯置庄舎至農時堪営作者。出就庄田収斂訖勤還。其城堡崩頽者。役当処居戸随閇修理。
・東辺（東海、東山道）、北辺（北陸道）－蝦夷に接する地域
・西辺（西海道）－隼人に接する地域（日本思想大系『律令』）
＊城隍条の「城」とは異なる（蕃国対応）
d 衛禁律越垣及城条、賊盗律盗節刀条
＊筑紫城
＊陸奥・越後・出羽等の柵（東北の城柵官衙）
e 隼人司
＊職員令隼人司条
・隼人司　正一人。〈掌。検校隼人。及名帳。教習歌□。造作竹笠事〉佑一人。
令史一人。使部十人。直丁一人。隼人。
3. 辺要地の城柵
a 筑紫城と東北柵
＊名称の差違
・城（筑紫城）と柵（東北柵）
＊支配の相違
・東北は「国司分担統治政策」と呼ばれるようなシステム
b 筑紫城
＊「大野・基肄・鞠智城等をさすか」（日本思想大系『律令』）

(2) 大宰府と辺要政策

1. 大宰府は、『続日本紀』等では「辺要」として扱われている。
a『続日本紀』
＊天平８年（736）５月丙申条
・「大宰管内諸国已叢処分訖。但府官人者。任在辺要権同京官」
＊天平宝字５年（761）７月甲申条
・「今西海諸国。不造年料器仗。既曰辺要。当備不虞」
＊法律用語の辺要との関係で、「辺要」（カッコ付き用語）として扱う。

b その後の大宰府
＊宝亀 11年（780）７月条
・勅曰。筑紫大宰辟居西海。諸蕃朝貢舟楫相望。由是簡練士馬。精鋭甲兵。以示威武。以備非常。（略）
＊宝亀 11年８月条
・太政官奏曰。筑紫大宰。遠居辺要。常警不虞。兼侍蕃客。所有執掌。殊異諸道。（略）
2. 西海道諸国への辺要策
a 筑紫城（衛禁律越垣及城条、賊盗律盗節刀条）
＊「筑紫」は広義の筑紫
＊大野・基肄・鞠智城は含まれる
・筑後国の大野城
・肥前国の基肄城
・肥後国の鞠智城
b 三野城・稲積城の所在地
＊文武３年（699）12月条「令大宰府修三野・稲積二城」
・大宰府の関与と対隼人策
・三野城－日向国児湯郡三納郷か
・稲積城－大隅国桑原郡稲積郷（当時は日向国）
c『日本書紀』景行天皇の熊襲征討
＊豊前・長峡（ながお）⇒碩田（おおきた）⇒日向　⇒熊襲征討（襲国平定）⇒子湯県
＊［筑紫溜狩］夷守 ⇒ 熊県 ⇒ 葦北小島 ⇒ 八代県豊村 ⇒ 高来県 ⇒ 玉杵名邑 ⇒ 阿蘇 ⇒ 筑後御木（みけ） ⇒ 八女県 ⇒ 的邑 ⇒ 日向（帰）
＊『書紀』伝承では、日向側が熊襲の拠点。
3. 対隼人政策－薩摩・大隅の建国と支配体制
a 薩摩国の建国と「柵」
＊大宝２年（702）10月条
・先是、征薩摩隼人時、掃折大宰所部神九処、実頼神威、遂平荒賊。爰奉幣帛、以賽其拷焉。唱更国司等〈今薩摩国也〉言。於国内要害之地建柵置戍守之。許焉。
＊「国内の要害の地に柵を建てて、戍を置きて（兵士を駐在させて）守らむ」
〈注〉唱更国司は、辺戍を守る国司の意。
b 大隅国の建国
＊和銅６年４月条
・割日向国肝坏・贈於・大隅・姶羅四郡、始置大隅国。

座談会次第

日　程

14:00～　挨拶　村﨑 孝宏（熊本県立装飾古墳館長）
14:10～　座談会主旨　佐藤 信（東京大学名誉教授）

第１部　報告要旨発表

14:20～報告要旨１　吉村 武彦（明治大学名誉教授）「鞠智城と地域社会」
14:30～報告要旨２　亀田 修一（岡山理科大学教授）「古代山城と地域社会」
14:40～報告要旨３　溝口 優樹（中京大学講師）「古代肥後の地方豪族と鞠智城」
14:50～報告要旨４　亀田 学（温故創生館）「鞠智城と菊池川流域の古墳時代・古代遺跡」
（小休憩　10分）

第２部　座談会

（司会・コーディネーター　佐藤 信（東京大学名誉教授））
15:10～16:40　発表者及び村﨑孝宏の参加
15:10～Ⅰ　考古学からみた古代山城・鞠智城と地域社会
15:40～Ⅱ　古代史からみた古代山城・鞠智城と地域社会
16:10～Ⅲ　鞠智城と肥後の地域社会
16:40　閉会

報告要旨１

鞠智城と地域社会－「辺要」としての地域のなかで

吉村武彦　（明治大学名誉教授）

はじめに

ａ大宰府・鞠智城の問題を、律令制国家の辺要政策との関係で捉えたい。列島古代の辺要政策とは、蕃国・夷狄に対する対応策であるが、蕃国は朝鮮半島と中国大陸、夷狄は東北の蝦夷と、九州南部の隼人である。蝦夷と隼人では、質的差違がある。

ｂ白村江の敗戦により大宰府・鞠智城は、古代（朝鮮式）山城や防人など唐・新羅に対する新たな国防体制（西日本防衛ラインと呼ぶ）に取り組まざるをえなかった。そのため二重構造の辺要対策にならざるをえなかった。

ｃ大宝令施行後、古代山城は唐・新羅との外交関係が改善されると、西日本防衛ラインは廃止されるようになったが、大野城・基肄城と鞠智城は、大宰府によって維持された（～10世紀初）。しかし、律令制国家の隼人に対する夷狄政策が変化したため、特に鞠智城の役割に影響がでたと思われる。

ｄこのような辺要政策の変遷のなかで、地域社会がどのように変わっていったのか問題となる。しかし、文字史料はほとんどなく考古学研究の成果に待たなければならない。

ｅ小論の構成は、次のとおりである。

一律令制国家の辺要政策－律令法の辺要と「辺要」
二筑紫（西海道）の辺要政策と古代山城
三肥後国と鞠智城

一　律令制国家の辺要政策－律令法の辺要と「辺要」

(1) 律令法の辺要

1. 養老令の辺要政策

ａ仮寧令官人遠任条に「辺要」の語句
＊『令集解』古記に「及任居辺要。謂伊伎・対島・陸奥・出羽是」
ｂ大宝令制下では、九州の伊伎（壱岐）・対島（対馬）と、東北の陸奥・出羽国
＊九州－壱岐・対馬　　対半島・大隅薩
＊東北－陸奥・出羽国　　対蝦夷策

2. 蕃国・夷狄政策

ａ職員令大国条（養老令）
＊陸奥、出羽（712建国）、越後
・「要給、征討、斥候（せっこう）」
＊壱岐、対馬、日向、薩摩（702年建国）、大隅（713年日向から分置）
・「鎮捍（ちんかん）、防守、蕃客、帰化」

令和2年度（2020年度）

鞠智城跡座談会

地域社会からさぐる古代山城・鞠智城

資料編

日時　令和２年11月22日（日）
場所　鞠智城研修施設収録
主催　熊本県・熊本県教育委員会
　　明治大学国際日本古代学研究クラスター
後援　山鹿市教育委員会
　　菊池市教育委員会
　　熊本県文化財保護協会
　　菊池川流域古代文化研究会

鞠智城座談会 2020成果報告書
地域社会からさぐる古代山城・鞠智城

発行年月日　令和三（二〇二一）年三月二九日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒八六二－八六〇九
熊本市中央区水前寺六丁目一八番一号
電話　〇九六－三八三－一一一一（代表）
印刷　株式会社　談

発行者：熊本県教育委員会 | 所属：装飾古墳館 | 発行年度：令和2年度

この電子書籍は、地域社会からさぐる古代山城・鞠智城 鞠智城シンポジウム成果報告 2020 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：地域社会からさぐる古代山城・鞠智城
鞠智城座談会
鞠智城シンポジウム成果報告 2020
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日